

終わりのセラフ～斬月持って異世界ライフ～

沢田空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トラックに轢かれそうになった子供を助けるも死んでしまった青年朝倉翔

そんな彼の行動に神様が心を打たれ、終わりのセラフの世界に特典として斬月を持って転生して2度目の人生を歩む――

目次

プロローグ	1
新宿攻防戦	
1 話〜血脈のセカイ	5
2 話〜崩壊後の世界	16
3 話〜仮面と鬼	26
4 話〜君月土方	35
5 話〜それぞれの想い	39
6 話〜試練	48
7 話〜鬼呪	55
8 話〜新しい力と恐怖	60
9 話〜三葉のチーム	71
10 話〜初任務	77
11 話〜突入	83
12 話〜襲撃	90
13 話〜各自の思い	96
14 話〜開戦	102
15 話〜再会	105
16 話〜家族と仲間	113
17 話〜黒い天使	119
18 話〜実験	123
19 話〜成し遂げるべきもの	127
名古屋決戦編	
20 話〜起きたそこは	132

2 1 話	悪夢と希望	134
2 2 話	柊暮人	139
2 3 話	家族	144
2 4 話	訓練	154
2 5 話	二人の訓練	163
2 6 話	幼馴染	170
2 7 話	過去への入り口	181
2 8 話	過去	186
2 9 話	家族	194
3 0 話	早朝	198
3 2 話	鳴海隊	205
特別編		
告白		212

プロローグ

とある休日、散歩をしに家を出た

社会の荒波に飲まれてすでに5年。精神的にも肉体的にも疲れきっている俺にとって休日にも何も考えずに歩くのはもう日課になっていた

つと挨拶もせず話して悪かったな。俺の名前は朝倉翔（あさくらかける）。社会生活5年目で彼女なしの東京で一人暮らししてる平凡な23歳だ

今は近所の公園のベンチに座って空を見てるよ

空を見てると、嫌のことを思い出さずに済むしな

それに公園で遊ぶ子供たちを見てると和むっていうか、平和だなんて思うんだ

それに案外おれ子供好きだし

そんな時ふと子供たちの方を見ると、1人の男の子がボールを追って道路に向かった

俺はここでまじいと思った。もしこれで車が来ていたらって思ったからだ

いつの間にか体は子供の方に走っていた。もしかしたら車なんか来ていないんじゃないか、ならそれはそれで安心できる

だか来ていたら？そう考えたら体は動いていた

男の子が道路に出たボールを拾うとやはりと言うべきなのか、車に向かってきていた

キイイイイイイ!!つとブレーキをかける音が鳴る

だがそれでも車は男の子にぶつかってしまっただろう

公園の出口にたどり着いた俺は男の子を車から守るように抱きかかえて来るべき衝撃に備えた

ドオーーーーーンン!!

体全身にとつともない痛みと宙に浮く感覚に包まれた

ドサツと体が地面に落ちるも、腕の中にいる男の子を見る

少し切り傷があるくらいで大事には至らなそうだった

それに比べ俺は・・・

「(こりやあ死ぬ俺・・・)」

自分が死ぬ時くらいは分かるってのは本当らしいな

今の俺は身体中から血が出ていて、地面に落ちた衝撃で骨も折れると思う

「おじちゃん大丈夫?!」

抱えてる男の子が俺を見て言う。それに対して虚ろになる意識で一言

「怪我はないか坊主・・・?」

「う、うん!でもおじちゃんは?」

「おじちゃんも・・・大丈夫・・・だから・・・心配・・・すんな・・・」

嘘だ。俺はもう死ぬ。それに自分が死にかけてたっていうのに俺の心配までするなんて大した子だな・・・

ああもう意識がもち・・・そう・・・に・・・ない・・・な

こうして俺―朝倉翔の人生は終わりを迎えた

ように思えた

「ここは・・・どこだ・・・?」

確か俺は男の子を助けて死んだはず・・・なのになんで・・・?

『それはワシが呼んだからじゃ』

「誰ですか?」

『お前さん達の世界の神様にあたる存在かの?』

いきなり現れて神様って言われてもな・・・

でももし本当に神様ならこの真っ白の空間にも納得がいく

「質問しても?」

「もちろんじゃ」

「まずここはどこですか?」

「ここはワシが作った転生の間じゃよ」

転生?転生ってあの六道輪廻とかそんな感じのか?

『そんじゃ!ワシはお前さんの行動に感動した!自分の命を顧みず少年を助けたその行動に!』

「はあ・・・」

神様が興奮気味に言ってくるため、曖昧な返事しか返せない

『そんなお前さんにはワシから2つ特典をつけて転生させてやろうと思ってる』

まじかおい！

こんなssみたいな事があつていいのか!?

「ちなみに行く世界って決まったりしますか?」

「お前さんの希望した世界に行くようになってるから安心せい」

神様ってスゲーなおい!!

なんでもありかよ!?

『ほっほほもつと褒めてもいんじやぞ!』

「てかナチュラルに人の心読むのやめてくれませんか?」

現れた時だけど、普通にやるんだよねこーいうの

『しようがないの。なるべく控えるようにしとくわ』

いや控えられるんだそれ

『とまあ行く世界と特典をきめてもらおうかのお』

おっと、そうだったな。どうしよーかな・・・

よっしきめた!

「行く世界は終わりのセラフで特典の一つ目はBLEACHの斬月を鬼呪装備として手に入れられるようにしてください

二つ目は一護のホロウの仮面をえるようにしてください」

『お前さんはほんとにBLEACHと終わりのセラフが好きなんじやの』

「まあそうですね。休日の楽しみといたら散歩か漫画を読むしかありませんでしたから」

それでその中でもハマっていたのはBLEACHと終セラだっただよな

『そろそろ転生させるがよいな?』

考えに浸っていると神様が聞いてきた

「あ、ハイ、大丈夫です」

「それじゃいく「あの!」なんじや?」

神様の言葉を遮って声をあげた

どうしても聞きたいことがあったのだ

「神様の名前って何ですか？」

そう名前だ。こんな自分の世話を何から何までしてくれて、名前を知らないというのは嫌だったのだ

『まだ名乗っていかなかったの。ワシの名前は主神オーデインじゃ』

お、お、オーデイン!?

「オーデインってあの北欧神話のオーデイン?!」

『そうじゃよ』

俺すごい人に気にいってもらったんだな・・・

『今度こそ転生させるぞ?』

「はい！オーデイン様！」

『何じゃ?』

「ありがとうございます!!」

オーデイン様に感謝を述べてからすぐに目の前は白い光に包まれて意識は途切れた

新宿攻防戦

1話〈血脈のセカイ〉

ある日突然、未知のウイルスによって世界は滅びたのだという
生き残ったのは子供だけ

そしてその子供たちは地の底より現れた吸血鬼たちに支配された
ヴァンパイア暦2016年

地下都市サングイネム

俺がこの世界に転生してから親がすぐに他界して、百夜孤児院に
入った

それからは原作通りに事が起きた。どうやら俺は前世の記憶を
持っているらしい

名前も前世と全く変わっていない

とまあ俺の話はこれくらいにしといて、今は原作のほんとに初めの
方だ

「ミカ！翔！これ見てみるよ！」

声をかけられた方を見ると黒髪に翡翠目色の少年が本を指差して
いた

彼の名は百夜優一郎。自ずとしたこの作品の主人公

「・・・ちよつと考え事をしてるんです話しかけないでください」

そしてこっちは金髪の髪に青眼の少年が答える

彼の名は百夜ミカエラ。この作品の正ヒロイン？と疑ってしまう
位に優が大好きな少年

「あと腕についてる腕章みたいな装置外すと紫外線で死ぬらしい！」

「興味ナツシングです」

「・・・同じく」

「大体優、そんなの調べてどーする気だ？」

「そりゃあ決まってるんだろ！強くなって吸血鬼どもぶっ殺すんだよ
！」

「はい出たアホ発言・・・」

そんな会話を目を閉じて聞いていると次第にどんどん意識が遠く
なつていくそんな俺の意識を「じつとしてろ」という吸血鬼の声に
よって引き戻された。

「痛っ!!」

「うっ」

「つつ」

ブチツと音がして血が抜かれていくのが分かる

その感覚はいつになつても慣れない

「動くなよ。お前らは我々吸血鬼に生かされているんだ。ただおとな
しく血を差し出してればそれでいい」

吸血鬼はそう言い、たち去っていった。

「くっそー、ああああもう我慢できねー!」

「いてえし、フラフラするし!何よりあの吸血鬼どもの家畜を見るよ
うな目が気に入らねえ!俺らは豚か!?牛か!?鶏か!」

そんな文句を並べていく優。きつと彼もこの生活が嫌なのだろう。
食べ物も残飯のようなもの、そして何より吸血鬼の家畜として生きて
いることが、

「だからさミカ、翔、一緒に革命起こそうぜ革命!」

「なにその頭悪そうな計画」

「優、漫画を見るのもほどほどにしといた方がいいぞ」

「漫画なんてよ・ん・で・ねーよ!」

優をいじりながら会話をする。とりあえず俺は原作に逆らわずに
生きることにするしかないみたいだ

「とにかく、吸血鬼にこれ以上目をつけられたくないから」なんとかか
んやら言っているミカを無視して優はそこら辺を通っている吸血鬼
に大声で叫んでいる。

「おめーら、いつかぜってえ殺すからな!!俺毎日一万回(できるわけな
い)腕立てしてんだから:!!」

さすがのミカも呆れ果て、きーとんのかと優の頭にチョップをいれ
る。そんな光景をみて、流石に優が可哀想に見えて来たため現実とい
うものを教える。

「優、人間が吸血鬼に勝てるはずがないだろ？しかも子供の俺たちが…」

「(斬月があれば何とかなるだろうな…)」

その言葉に優は少し俯く。少しは理解してくれたようだ。

そして声を絞り出すように言う。

「じゃあ、どうすんだよ!!？」

「頭を使うんだよ。優ちゃんでも、バカには無理。ねえ翔？」

「そうだな、バカには無理かもな」

「お前等、ぶっ飛ばすぞ」

そんな会話をしてる時遠くの方から三人の吸血鬼が歩いてくるのが見えた。そこら辺にも吸血鬼はいるのだがその三人の中の真ん中を歩いている奴は周りの吸血鬼とは違う。

「あいつ…フード被ってねえ…貴族か？」

「フェリド様!!」

ミカが笑顔でそのフェリドという貴族にかけよっていく。

「やあ、ミカ君今夜も僕の館に来るのかい？」

「お願いします！」

フェリドはミカの顔の頬の部分に手を当てる。

「いい子だねえ、君の血は美味しいから大歓迎だよ。」

そして、クルリと俺達の方を見る。そして、軽く笑う。

「今日はそっちの子達も来るのかな？」

「はあ？行くわけ……」

このままいくと優は貴族に喧嘩を売りそうだったので優の口を塞ぎ俺がかわりに丁重にお断りする

「いえ、今日は僕達は遠慮します…またいつかお願いします」

「そう？それはぎーんねん」

そう言つてフェリドは二人の吸血鬼をつれそのまま歩いて行った。

その吸血鬼の姿が見えなくなるとパツと優を放す。

「ミカお前…自分から血を飲ませてんのか？」

「そうだけど…、優ちゃんやっぱりここで生きてくには頭を使わないとね」

ゴンス殴った鈍い音が響く

「ああ、もういいよー！じゃあ血でもなんでもやれよ！！んで家畜みてーにブヒブヒモーモー言ってる!!」

そのまま優は背中を向けて帰って行った

横にいるミカを見るととても寂しそうな顔をしていたため声を掛ける

「大丈夫だよ。優はわかってくれる」

「うん。ありがと翔」

そしてそのままミカと別れ俺はある目的地に向かった

そこは俺達が住んでいる場所よりも奥で誰も住んでいない廃墟の様な場所だ

流星に吸血鬼の奴らもここまでは見回りに来ないようなのだ。この事に気づいたのはごく最近なのだが・・・

「とりあえず始めるか」

いつもの特訓を、オーデイン様に貰った特典の一つ――虚ホロウの仮面の持続時間を長くする事だ

色々と問題はありますがこの世界にまず虚ホロウはいない。そしてBLEACHでは虚ホロウの力を仮面に出している。まずはこれだ

この世界ではいけないもの力を出せばいいのか、ならば作り出せばいいのだ

簡単な話虚ホロウがないのに対して、この世界には鬼が存在する

これは俺の推測だが、オーデイン様は仮面を出すために俺の中に斬月を鬼として作ったのではないか、ってな

それはそれで正解だったようだが、問題は更にあつた

鬼としての斬月に話しかけようとするが反応が一向にない。これだと斬月も出せないし、仮面もクソもない、そう思った

だが、何故か仮面だけは出せるようになったのだが・・・

鬼の力もなしに。まあこれはこれでそういう特典だと思い、特訓している

それから持続時間が約1分位は持つようになってきた

家に帰るとすでに優は帰って来ており食卓にはカレーが並べてある。

「へーすごいね、こんなご馳走どこで?」

「ミカが裏ルートを見つけたんだって」

そう答えた茜にそうなんだと返し優の隣の席に座る。

仲良くみんなでカレーを食べ終わると明日のためにすぐに眠りにつく

みんなが眠りについた後多分起きているだろう優に向かってカレー美味しかったなつと言ってみる。するとああつと返事が帰ってきた

「なあ、翔、やっぱり人間は吸血鬼には勝てないよな俺本当は分かって優、それ以上は…優のその言葉みんな信じてるんだから」

「大丈夫。俺達はいつまでも吸血鬼の家畜で居るつもりはないよ。吸血鬼は倒せる」

「そうだよ、優ちゃんその言葉に僕も元気つけられているんだから」
「うおつ、ミカ!」

いつの間にやら帰ってきていたミカが少し泣きながら会話に入ってくる。そしてそうだつと手を打つとゴソゴソと何かを探し始めた。出て来たのは一丁の銃、そして地図それも人間世界への出口がかかれているものだった

「さあ、つてことでもう逃げます。今日!いま!すぐ!」

「はああああ?」

つてこれ脱走のところか!だとしたらフェリドが待ち伏せているはず…なら止めるべきだ…みんなには悪いけど…

「ささ みんなを起こしてすぐいくよ。大丈夫全部計画済みだから。翔も手伝ってほらほら」

「だめだ」

その一言にミカは動きを止め、聞いてくる

「どうゆうこと翔?」

「この計画は失敗するからだよ」

その一言に起きたみんなも起こしていた優も驚いた顔をしている
「何でそんな事がわかるの？」

「それは…根拠はないけど、フェリド・バートリーにミカの計画はバレてる」

ミカの顔がどんだん血の気が引いてなのか青ざめていく

「そ…そんなことないだろ！何でアイツがこの事を知ってるの!?!それに翔は何を知ってるの!?!」

「俺は原作を知ってるから、何て言えるわけない…どうすればいい…！こいつら止めるにはどうすれば!!」

「ごめん。それは言えない」

「なんだよそれ！翔はこのままでいいの?!ここで一生を過ごすの?!僕はそんな嫌だ!!」

拳を強く握り、俺に言い切った

「ミカ…」

「なら翔は来なければいいよ！僕達だけで逃げるから！みんな行くよ！」

「ダメだミカ！行くな！」

俺の静止の声も無視してミカはみんなを連れて行ってしまった

「ミカ…!」

俺は1人残った家で拳を強く握りしめてみんなが出ていった扉を見ていた

「ミカちゃん、翔は来ないの？」

「翔兄置いてくの？」

子供たちがミカに聞くがミカは笑顔で答えた

「翔は…後から来るんだよ。ちよつとやることがあるって言ってたからね」

「ミカ…」

優が悲しそうな顔でミカを見る。それに気づいたミカが優に話しかける

「大丈夫だよ優ちゃん。きっと脱出出来る。それに…翔も来てくれるよ」

「そうだよな…翔が来ないはずないよな。それよりも大丈夫なのかミカは」

「え？」

「ホントはあんなこと思ってないのに言っちゃった事」

「…うん、分かってるよ。翔が来たら謝るよ」

「そっか。なら安心だな」

笑顔でミカに言う優

「でも、外出てどうすんだよミカ」

「ウイルスは12歳の僕らにはかからない残った一年で考えていこう」

「ああ」

そして、百夜孤児院の家族、1人を除いての脱出計画は始まった

く門前く

地図通りに道を進んでいく

ある程度心配していたがあつさりと門まで着いてしまった

「まじでここが出口なのか？」

「地図によるとそうだねー。まあ吸血鬼も家畜が逃げるとは思わなかったんでしょ。でも俺らは逃げるよ。さあ行こう優ちゃん！みんな！脱出だ！」

そして出口に向かおうとした時声が聞こえた。それは今から起こることをよげんした悪魔の声、死神の声のように聞こえた

「あはあく、待っていたよ哀れな仔羊くんたち」

現れたのはフェリド・バートリー

子供たちのさっきまでの希望に満ちた顔が今となっては血の気の引いた絶望の顔に変わる

「そうその顔 希望が消え去る時の人間の顔だからこの遊びはやめられないんだよねくくく」

「遊びってまさか罠…そんな翔の言ってたことは本当だったの…」

今気づいても今更だもう遅い

それは一瞬の出来事だった。フェリドによって子供が血を吸われ

絶命していく

それに思わず優は持っていた銃を放つ。だが・・・

「弾をよけた？」

「ダメだ優ちゃんこの距離じゃ当たらない!!」

「あれえ、僕の銃までとったの？あははいいいねえ君らまだ抵抗できる元気があるんだじゃあもう一つ希望を上げよう」

出口の場所を指差してフェリドは続ける。

「実はその地図本物なんだその道を通れば外の世界に出られる。さあ君たちの声を聞かせてごらんよ」

「逃げる!!みんなはしれ！出口まで早く!!走れ!!!」

だがその声すらも遅い

「言っただろ？僕は君たちの絶望した顔が見たいんだよ」

その瞬間、子供たち全員が殺される。かと思われた

『俺の家族に手を出すんじゃない!!』

そこに現れたのはドクロのような仮面をつけた翔だった

翔side

「はっはっは・・・」

今俺は優たちの所に走って向かってる。どんなことがあつたとしても家族を見捨てる理由にはいかない・・・もしそれが血の繋がって無くてもだ

「間に合ってくれ・・・！」

そう呟きながら門前へと急いで向かう

門付近に着くと、そこにはフェリドが逃げる子供たちを殺そうとしていた

「(やめろ！もう二度と大切なもんを失いたくねえ!)」

俺は左手を顔にあて、力を集め引く。そうすると俺の顔には虚ホロウの仮面が現れる

俺は今出せる最大限のスピードでフェリドに向かって跳び蹴りを放つ

『俺の家族に手を出すんじゃない!!』

それをフェリドは腕を交差してガードする。だがガードしたのにも関わらずフェリドは後ろに吹っ飛ばされた

踏ん張って留まったフェリドが言う

「あつはあー何だいその力は？」

『お前には関係ない力だ』

「そう釣れないことを言うなよおー」

わざとらしくいうフェリドに目を向けながら優たちに向かって言う

『優！ミカ！茜！他のみんなを連れて逃げろ！』

「んな！何言ってるんだよ！翔！」

「そうだよ！翔も逃げなくちゃ！」

「翔と一緒に！」

『我が儘言うな！いいから逃げろ!!』

「悪いけど誰一人として逃がさないよお」

ニヤリとした笑みを浮かべながらフェリドは俺に近づいて右の突きを放ってきた。それを半身の状態で右に躲してカウンターに左の回し蹴りを放つ。だがそれをフェリドは左手でつかみ、俺を投げ飛ばした

それを空中で受身を取り、体制を整える

『クソ……思ってた以上に強いな!!』

「君は対して強くないね」

そう言いながらフェリドは俺に近づき、蹴りを放った

それを俺は避けられずに腹にモロにくらってしまった

『がはー!』

そのまま俺は吹き飛ばされ、壁に激突した。それを見てフェリドは哀れな目で見て言った

「うーん。これでは拍子抜けですねえ。力はあるのに扱いきれていないなんて。では邪魔者は消えたし、残りを頂こうかな」

フェリドはミカたちの方を見て言う。ミカ達は逃げろと言われた

のに逃げていなかった

「翔!」

「クソー!お前!!」

ミカと優はそれぞれに怒りを露わにする。だがフェリドはそれをあたかも知らぬように2人の間を抜け、他の子供達を殺していく。そして最後に狙ったのは茜だった

「やめろー!!茜!!」

フェリドは茜を殺そうとするだがその瞬間フェリドは吹き飛ばされる

「まだ生きてるのか。君もしつこいね」

「はあはあ…当たり前だ…!家族は俺が守る!!」

既に俺の仮面は半分が無くなってる状態。体力も残っていない立っているのもやつとだ。

だからってここで引き下がったら残ったみんなが殺される。なら俺が身代わりになってでも助ける。それが俺が成すべき事なんだ

「翔!」

「全員急いで逃げろ…!時間を稼ぐ間に…はやく!逃げろ!」

「でも…」

「いいからい…け…」

そこで残っていた仮面も砕けて消える。通常異常な程の力を使う仮面を体力の限界まで使ったのだ。その反動で地面に膝から崩れ落ちる

「あつはあー。時間切れのようですねー」

「翔!!」

「はあはあはあ…」

「(力が入らない…これじゃあ…!)」

フェリドの方を見上げるとそこに茜の首に歯を立て血を吸っている所だった。そしてそれを見たミカが飛び込んでいき殺される姿。そして優がフェリドの頭を撃ち抜く光景があった

「ミカ!!ミ…!!」

そんな優の声を聞き急いでミカの所まで体にムチを打って駆け寄る

「行って…優ちゃん…」

「ふぎけんな!!ミカも一緒に…」

「いたぞ、あそこだ!!」

追つての吸血鬼がすぐそこまで来ている。

急がないとミカがつくつてくれたチャンスが無駄になってしまう

「俺の…家族…、やつと…やつと手に入れたのに…」

「行けよ早く!!!バカ!!」

今まで聞いたことないミカの叫び声そして優をドンツと突き放す。

「クツソオオオ!」

ひたすら叫びながら出口に向かって走る優

「翔、優ちゃんを家族をよろしくね」

「ああ、任せろミカ…!」

俺も優の背を追って走り出した

「あと一人預言によれば出て来るんだが…」

「ここは…」

地下都市から出た俺は外の寒さに身を震わせるも、優の隣まで歩く周りをみると優と俺以外に三人。そしてその中の一人が近いてくる

「吸血鬼退治のためにお前を利用させてもらおうぞ」

そう一言言うと俺と優をみてる

「ああ、吸血鬼を滅ぼせるなら力を貸してやる」

こうして、少年二人の戦いというなの物語が始まった

2話く崩壊後の世界く

目を閉じるだけ

いつもあの光景が思い浮かぶ

「ねえ優ちゃん、翔。僕ら家族だよね？」

「ばーか。俺に家族なんていな・・・」

「正直になれよ優。俺達は家族だ」

「翔の言うとおりだよ。僕ら百夜孤児院のみんなは家族だって、もう決まってるんだもんね」

「ちよっ・・・お前らな・・・」

「優兄ちゃん大好き！」

「翔兄も大好きだよ！」

「ああ・・・つたく。お前らは仕方ねえな・・・」

「俺も大好きだよみんな」

大切な 友達 仲間 家族の笑顔

そして――

その家族を吸血鬼に殺される光景

優と翔の前に転がるのは家族の死体

「・・・に、逃げて・・・優ちゃん・・・翔・・・」

唯一息の合ったミカが言う。だがその首筋に憎き吸血鬼が歯を立て、血を吸う

「・・・早く・・・逃・・・」

「ミ・・・！ミカアアアア！！」

4年後 東京 渋谷

月が照らす夜。そこにあるのはかつて栄えたであろう街の残骸、廃墟

その廃墟の交差点の真ん中に2人の少年が立っている

「(本当に少し目を閉じただけで

4年経った今も

あの光景が

浮かんでくる)」

彼らの服装は少し前の軍服を思わせるようなもので、そこに膝くら
いまである黒を基調として緑のラインが入っているマントと同じよ
うな色の帽子を被っていた

「クソツ．．．！ヨハネの四騎士か！」

「！」

2人の後ろの壁が砕けると同じ軍服を着た2人と化け物が2匹、一
緒に突っ込んできた

そしてそのうちの1人がこちらに気づき声を上げる

「百夜優一郎二等兵!?それに朝倉翔二等兵!?こんな所で何をしている
!!早く逃げ．．．」

「はっ逃げる?」

「誰に言ってたんだ。俺達は吸血鬼に復讐するために生きてきたのに」

「この程度のバケモノ．．．殺せなくてどうすんだよ!!」

2人は叫ぶと持っている武器を抜刀して、バケモノをそれぞれ一刀
両断した

「．．．!!」

「あのバカどもまた命令違反を．．．！」

翌日 第二渋谷高校

おっーすみんな翔だよー

今はね2度目の高校生活をしてるよー。理由は昨日の命令違反で
優と仲良く謹慎くらってます．．．

そういえば、おかしなことに前世の記憶が最近思い出せないんだよ
ね．．．それも原作の所だけ穴が開いたような感じがする．．．
んで隣でふてくされる優を見してみる

「(どうせ納得いかねえーとか思ってたんだろうな)」

「だいたい軍人の俺が．．．」

ブツブツなんか言ってるし

「おーい百夜優一郎なにブツブツ言ってる?いま授業中だぞ?」
プイと優は先生の言葉を無視する態度を示す

「おっお前！その態度は何だ?!転校してきたばっかで緊張してんのか
なくって多めに見てきたのに・・・あんま態度悪いと退学にすんぞ!!」

ほーら見ろそんな態度取るから怒っちゃったよ

更に次の優の言動で先生の怒りはヒートアップするよ

原作知ってるからこそだよなこの楽しみはく

「え?!退学にしてんれんの!?マジで?!じゃあそれでお願いま・・・」ふ
ざけんなああ!!お前先生バカにしてんのか!!」

マジでショートコントでも見てるようだよ・・・!

え?おれ?俺は先生にバレないように爆笑してるよ

「朝倉お前も笑ってるんじゃないやねえー!!」

って何でバレてんだよ!てか先生口調変わったなおい!

とそこで優の後ろの席の女の子が優の背中をつつく

「(この子どこかで・・・)」

「つんだよ・・・てかお前誰?」

その子は声に出さずにノートに書いた文を見せてきた

「『私は終シノア。軍からの監視官です』」

「ああ?監視官?」

「もしあなた方が協調性のない行動をしたら、軍に報告して謹慎を延
長することになっています』」

「ああ!」

思わず席を立つ優

「おれもか!」

何でだよ!!ちくしよ!!それに思い出してきたぞ

「百夜!!朝倉!!」

「クソが・・・」

「何もしてねーのにおれ・・・」

「協調性」

その一言で優は勢いよく席に座る

監視官——終シノアが言うにはこの高校で「友達」が作れない限り
謹慎は解けないらしい

優はほんとに大変そうだな・・・性格上の

え？俺？俺は何とかなるよきつとははは・・・（現実逃避）

orz状態になって気づいてたら寝てたんだが
優の大きな声で目が覚める

「くだらねえこと言ってるねえで早く俺を吸血鬼殲滅部隊に入れろって
バカに伝える俺はもう奴らを殺れるだけの力があるってな」

「・・・と、言い出すだろうからこれを中佐から渡せと言われていきます。
はいどうぞ」

手紙が渡されそれを優が見る。その内容を見るために優に近づき
その手紙を覗き込む

手紙の内容はこうだ

『仲間も友達も恋人も作れないような童貞くんは軍にはいりませー
ん。くやしかったたら一人でも学校で友達作ってみろっての俺に紹
介してみろってのまあお前にや無理だろうけどな！プップー』

その手紙を読むと優はグシャグシャと手紙を丸めるとだあっ!!と
言って投げる

「どんまい優・・・っふ」

「いま笑ったろ翔ー」

「いや笑って・・・もう無理はっはは」

ガタンツその音とともに一人の少年がドサツと倒れる

「や…………やめてよう……………」

その少年の目の前には三人の男子いかにも俺ら悪ガキですオーラ
を出していた

「やめてだ？なんだよそれそれじゃ俺らがお前いじめてるみてえじゃ
ねえか」

そう一人の男は言うがどうみてもイジメの凶だろう

「俺ら友達だからジュース買ってきてったのんだだけだろ？ナニヨ
その態度は？」

そんな光景をみて優は頭を掻きながら、一言

「平和だねえ、じゃ…俺帰るから」

優は目の前で起こったことを無視し歩き始める

そんな優にため息をつきながらシノアは言う

「あれを見てその感想じゃ…、当分友達作るのは難しそうですねえ…」（まったくもってその通りだなー）

心の中で同意しながらいじめられている男子を見る

「だいたい俺らの仲間になりたいって言ってきたのはお前だろうがよ与一？なら働けよ家畜みてーに。」

いじめられている与一という男子生徒はその男たちに蹴られる。

「おい、その辺にしとけよ」

さつきまで興味なさそうにしていた優がきつと家畜という言葉にイラついたのだらうイジメていた男三人に声をかける

「おいおいおーいえ何？まさか正義の味方？ミカタっすか？」

「それとも何？お前が与一の代わりにパシられてくれんの？」

そう言いながら男三人は優に近寄る

「いやあ…お前らわかりやすくっていいわ、俺こういうのは得意だから何か嬉しいなあいいよ喧嘩か？やるか？」

完全に喧嘩やる気満々の優にシノアは忘れてましたと優に向って声をかける。

「民間人に手を出したら謹慎処分ですから」

その言葉にはあああああ!!?という優にその瞬間を狙ったの相手の拳が優に当たった。

沢山のジュースを持った優と与一そして、その二人の後ろをシノアと俺で歩く

さつきから優はずつと文句を言っている。

「なんで俺がパシリ…：…なんで俺が…」

「ごめんね、僕のせいで…」

さつきからずっと誤っている与一に俺は疑問に感じてることを聞いてみる

「なんで与一はあの三人に仲間に入れて欲しいって、たのんだんだ？」

「三人っていうより山中君にお願いがあつて…：…」

「ん？山中って誰だっけ？」

そんなボケたことをいう優にシノアが茶化しにはいる

「なるほど脳ミソ猿ですね」

そんなシノアを殴りにかかるので俺は優をとめ与一に続けてと言
う

「うん…えつと僕…帝鬼軍の入隊試験落ちただけど…どうしても入
りたくて…山中君…実はあの有名な吸血鬼殲滅部隊の…月鬼ノ組入
りが内定しているらしくて…」

「月鬼ノ組!!?あいつが!?マジで!?俺も入れねえのに!!グレンの奴ぶつ
殺す。」

そしてシノアにまたもや文句を言い始める

たしか山中って奴の内定って嘘だったよなあ気がする…と記憶
を探るが分からずじまいの為、

与一の方を向いてまた質問をする

「で、なんでそこまでして入りたいんだ？」

「こんな弱つちいのが…ていうのは分かっているけどどうしてもお姉
ちゃんの敵を取りたいんだ…」

「まさかっ…」

「うん、お姉ちゃん僕をかばって吸血鬼に殺されたんだ…僕…怖くて
動けなくて…後悔してるんだ…」

優がその言葉を聞き与一に近寄るそしてそのまま与一の頭を殴る。

「バーカ何が後悔だよ助けに行ったら死んでたよ。」

「優の言う通りだ、それに姉ちゃんも復讐なんて求めてないぞきつと」

ドンツ急な爆発音にみんな爆発した方を見る。そしてその瞬間に
警報がなる。

『緊急警報、緊急警報、全生徒及び職員にお知らせします。隣接の生体
実験施設から吸血鬼が一匹逃げ出しました全生徒及び職員は大至急
敷地外に避難してください吸血鬼は血を吸うと力を取り戻します見
つけても決して近づかず…』

「三人とも避難してください!!私は月鬼ノ組に出動要請を…!!」

「いらねえ!!吸血鬼は俺が殺す」

優は大きい声で叫ぶとそのまま走り去って行く。

「くっそ…俺も行く」

優のあとを追い吸血鬼がいる教室につく

そこには女子とその女子の血を吸おうとしている吸血鬼の姿がそして今まさに吸血鬼に向って突進をしている優の姿があった。

そしてその近くに山中という男がいる

「おい、山中!!早く逃げろ早く!!」

「足が…動かなくて…!」

「くそ!このままだと山中まで巻き込んだらもう!」

山中を急いで教室から出し、今でも戦っている優に声を

「優!あの子をどうにかしろ!時間は俺が稼ぐ!」

左手で顔を覆うように構える。そして引く

「『かかってこいよヴァンパイア!』」

「何だ?!それは!!」

仮面を出して、吸血鬼と対峙する

「『これから消えるお前には関係ねーよ』」

一瞬で吸血鬼の懐に飛び込み、右ストレートを繰り出すも避けられる
それで終わるわけもなく、連続的に殴打や蹴りを放って攻撃する

「くっ!」

苦悶の表情をする吸血鬼。そこで優の方を見ると、女子を助けたよう
うで、少し安心できた

「(そろそろ時間だな…)」

「『優!助けたらなら手を貸せ!』」

「っ!わかったよ!」

女子を助けた優と吸血鬼の相手が変わる。これには少し意味がある
る

まず一つ…というよりこれが全てだな。単純に
これ以上は仮面が持たない

仮面は半ば強制的に解かれて、膝をつく

「はあはあはあ・・・」

「翔!」

優がそこで俺に声をかけるがそれが仇となった

「隙を見せたな人間!」

「まずい!!」

吸血鬼が優の血を吸おうする瞬間与一が飛び込み吸血鬼と一緒に倒れる

「与一!?!?」

「百夜君、朝倉君早くこいつを・・・!!?」

吸血鬼が与一を襲う。それをすぐさま優がとめるも、そのまま吸血鬼と窓から落ちる

「百夜君!!」

「優!!」

すぐさま下に降りるとグレンが吸血鬼を消した後だった

「お前、アホか。抗吸血呪もかかってない一般兵器で吸血鬼狩れるわきやねえだろそれに、翔は武器もなしでなにやってんだ」

「気が付いたら体が勝手に・・・ははは」

笑ってごまかすけどグレンには仮面の事は言えない・・・言うとかなり面倒なことになりそうだな

「:まあいい、だがガキのわりにはよくやった。学校の友達を守ったな」

「はっ?友達?興味ねーよ」

そう言った優にやっと下に降りてきた与一が抱きつく

二階から落ちた衝撃で体がボロボロだったのか、優は抱きつかれてからすぐに気絶した

「何あれ?」

グレンが聞いてきたので答える。

「友達みたいだぞ? ついでに俺もな、グレン約束守らなくちやいけなくなっただぞ」

ニヤツと笑いながらグレンに言う

「はあーまじかよ。それとあとでシノアと一緒に執務室に來い」

「はあ？何で？」

「いいから来い。優が目覚めてからでいいからな」

優 side

目を閉じるだけでいつもあの光景が浮かぶ――

大切な家族―― 仲間―― 家族の笑顔――

目の前には家族がいる

ミカや茜達みんながいた

「やーでもよかったなあ優ちゃん達に友達が出来て」

「は……？お前ら何で……」

「これで僕らも安心したよ。だってこれから復讐だけで生きていくのは優しい優ちゃんには無理だからさ。だから新しい友達と最後の家族はたいせつにしよう？」

ちよつと待ってくれ……！俺はお前らに言わなくちゃいけないことが！

「じゃあ僕らはもう行くから」

「ま……待てよ!!ミカ!ミ……」

そこで目が覚めた。目の前には知らない天井。右手を天井に向けたまま、目元には雫がたまっていた

「(俺は泣いてたのか……)」

「う……百夜君……」

ベットの足元から心配そうな声が聞こえた

「シノアさん！百夜君が目を覚ましました!!」

「あ、起きました？」

「大丈夫か優？」

なにがどうなってるのかよくわかんねえ……

「では新しい制服を渡しておきますね」

ベットのの上に袋に入った制服をおく

「友達も出来たので、今日付けであなた方は吸血鬼殲滅部隊に配属されることになりました。となると私たちはあなたの大嫌い☒仲間☒で

すねえ」

「ようこそ月鬼ノ組へ」

シノアが手を差し出してくる。その手のうえに笑顔で翔が手が置く。更に与一も手を置く

「正直なれよ優」

「百夜君も早く」

なんかすげー照れ臭くなる

「んだよ・・・それ」

文句を言いながらも俺は三人の手に自分の手を添えた

そして小さく一言

「・・・よろしく」

優 s i d e e n d

3話く仮面と鬼く

優が目覚めた後、俺はシノアと一緒にグレンのいる執務室に向かっている

にしてもこの頃のシノアって何か話しづらいね。気難しいっていうか、なんかこう・・・とりあえず話しづらい！

だって、さっき勇氣振り絞って話しかけたら

「話って一体何なんだろうな？」

「さあ。私は来いとしか言われていないので」

「そっか・・・」

終わったよー！これだけだよちくしょう！！

「着きましたよ」

シノアに声を掛けられるので、ノックして入る

コンコン

「朝倉翔です。返事は待たずに入りマース」

とまあいつもこんな感じで入るんだよ。え？敬語？何それ美味しいの？

グレンに敬語とかもつたいないしな

「おい翔、今失礼なこと考えてたろ」

「そんな訳ないだろー（棒）」

「って柘少将もいるんですね」

よく見たらソファアに銀髪のイケメンが座ってた

「ひさしぶりだねく翔。それにシノアちゃんも」

柘深夜少将。グレンと同じ年齢で終に養子で入った天才。何かと面識が多いので、俺は名前で呼ばせてもらってる

「お久し振りです深夜さん」

「お久し振りです少将」

俺とシノアが挨拶すると手を振ってきた

「うるせえよお前ら。用が済んだなら帰れよ深夜」

「ちよつとくグレン。親友の僕がわざわざ来てあげたのにその態度はないんじゃない？」

「うざい死ね」

「はっははは〜」

陽気な深夜さんは置いといて本題に入る

「それで何の用？」

「お前俺に隠し事があるだろ？」

それに思わず血の気が引くのを感じた。多分グレンが言っているのは仮面のことだろう。だかなぜ知っている？

仮面を知っているのは優だけのはず・・・

「お前と優が教室で戦っているのを時雨に監視させた。そしたらお前が仮面の様なものを付けた瞬間に身体能力が急に上がったって報告を受けてな。その反応からだとは本当らしいな」

シノア深夜さんも難しい表情でこちらを見る

「・・・黙っててもらえるか？」

「ああ、ここにいる奴らは信用できる奴らだ」

はぁーとため息をつく。こうなったら話すしかないな

「グレンの言う通り俺は仮面を付けると身体能力が異常な程に上がる。吸血鬼の貴族とやりあえる位に、な」

「なっ！」

シノアが声を上げる。深夜さんも同じ心境なんだろう。

「それは俺達でも扱えるものか？」

「いや無理だと思う。それに仮面を保っていられるのもいい所、三分が限界だ」

「そうか・・・。今その仮面は出せるのか？」

「ちよつとグレン、何する気？」

深夜さんが思わず声を上げる

「吸血鬼の貴族と対等に出来るものをここで使われたら、僕達じゃ抑えられないよ？」

深夜さんに続いて、シノアも反対の意を唱える

「そうですよ中佐。もしそれが暴走でもしたら・・・「暴走はしないよ」

シノアの言葉を遮って続ける

「俺が仮面を使えるようになったのは四年前。吸血鬼の都市から逃げ

る前から使えたし、ちゃんと訓練もやってるから」

「もし暴走したら殺してくれてもいい」

「ちよっ……！朝倉さん何言ってるんですか!？」

シノアが俺に喰ってかかってくる

「だって暴走したら俺の意識自体が消え失せるかもしれないねえんだぞ？
だとしたらそれが一番の策だろう」

「確かにそうかもしれないませんが……でもダメです!」

「はぁ……」

思わずため息が出てしまう。だってそうだろう

今日初対面の奴なんてほっといてもいいはずなのに、ほんとお人好しだな

「いいから早くやれ」

グレンから催促させる

「わかったよ……とりあえずシノアは離れてくれ。大丈夫だから、俺は暴走しない」

笑顔でシノアに言う。そうすると渋々といった所で引き下がる。
その時にシノアの顔が少し赤かったのは気のせいだろう

「(今の笑顔は卑怯です……)」

シノアが離れたことにより、右手を顔に当て引く。そうすると仮面が現れる

『『これでいいか?』』

「! 思ったよりも簡単にやるんだな」

『『まあ4年も訓練してればな。もういいか?』』

「あぁいいぞ」

仮面を払うようにして消す

「ふうー」

「君は本当に人間なのかい?」

深夜さんが聞いてくるも、少しばかり殺気が混じってる

「そりゃ100%人間ですよ。あと殺気抑えてください」

「ごめんよくそれで君は味方でいんだね?」

「そりゃもちろん。俺は吸血鬼に復讐するために力を求めるんですか

ら」

「じゃあ用は済んだから帰っていいぞー」

「お前はホントに適當だな」

呼んどのいていつもこれだから。流石に慣れたが

「じゃあ帰るな、失礼しますね深夜さん」

「失礼します中佐、少将」

「うんまたね」

執務室を出てすぐにシノアから質問の嵐を受けたのはまた別の話

〜執務室〜

「それでグレンも気づいてるでしょ？」

「ああ、あの仮面鬼の力を使ってるな」

「だよねー。まだ鬼と契約もしてないのに何でなのかな？」

「そこら辺は本人も分かってないみたいだからな。これから様子を見るしかないだろうな」

2人が去った後に難しい顔をしながら話す大人達であった

〜翌日 屋上〜

優の前には昨日吸血鬼に襲われていた女子が手紙を持って立っている

「あ、あの百夜優一郎君！あの時は吸血鬼から助けてくれて……ありがとうございました……！あなたが好きです!!私の気持ち……呼んでください!!」

「……………」

優に手紙を押し付ける形で渡し、急いで屋上を後にした

「いや……俺……全然ンなことしてる暇ねえんだけど……」

「やーやー流石は吸血鬼から学校を救った英雄さんモテモテですね」

「優モテモテだなーいいなー（棒）」

優の後ろから冷やかすように声をかける俺とシノア
「ンなことねえだろ。てか何で翔には何もねえんだよ」

「いや知らねえーよ」

「はっはーん、翔さんもモテたいンデスカ？」

シノアが遠い目で言ってくる

何か最後の方片言なのは気のせいだろう

ついでに昨日の事があつてから、シノアは俺の事下の名前で呼び始めた

「それに、もってなんだよ！」

「まあ2人とも童貞ですしね」

「・・・シノアてめえ・・・」

「・・・」

「でも童貞は悪ですよ優さん、翔さん。何せ我ら日本帝鬼軍はカップル成立を日々奨励してるんですから」

「は？」

シノアは屋上から外の景色を見渡しながら言う

「世界は一度滅びました。この世界はもはや人間には優しくはない。ですが我ら日本帝鬼軍は残った人間を取りまとめ：増殖させて世界の覇権を狙う！さあ生むのです増えるのです我ら日本帝鬼軍のために！ビバ！不順異性交遊!!」

「いや不順異性交遊はダメだからね・・・！」

「(何だこいつ・・・)」

「つかさ・・・」

語っていたシノアに優が聞いた

「俺たち吸血鬼殲滅部隊に配属されたんだよな？」

「ええ、それなら殲滅部隊の訓練ならもう始まっていますよ」

「え？」

「んあ？」

「あなたが欲しいものを手に入れるための訓練が・・・」

嫌なものを感じる、いや正確には仮面と似たものを感じる

「あなたが欲しいものそれは・・・これでしょう？」

その瞬間にシノアの手にあったカギのようなものが鎌に変わり現れ、そしてシノアの後ろには鬼が現れた

「私が契約している鬼―《四鎌童子》です。一応私も吸血鬼殲滅部隊の一員ですからねえ」

「これが・・・吸血鬼を呪い殺せる・・・鬼呪装備か・・・」

「何か・・・スゲーな・・・」

「それよこせよ」

優が持っていた刀を抜きシノアにむける

「それ持って俺は吸血鬼どもに復讐に行く」

「そろそろ協調性つてものを覚えてください。それに他人が契約した鬼の武器は使えません」

「だったらその武器の実力見せてみるよ!!」

そのままシノアの方に突っ込んで行く優

「（それよか斬月が鬼として来たら、どつちが出てくるんだ？虚の方がまたはおっさんか、出来るならおっさんの方がいいな）」

空を見て、考えてると大きな音がしたのでそちらを見てみる。そこにはフェンスタ吹き飛ばされた優がいた

「は、はは・・・まじですげえなそれ・・・それさえありや吸血鬼なんて敵じゃねえんじやねーか？」

「いや流石に向こうも武装してるだろ」

「武装？まじで？」

そこでドンツと扉があく音がし与一が駆け込んでくる

「た、た、助けて優くん！翔君！」

「まーた いじめられてんのか？」

「それが・・・待ってくださいよ与一さくん」

どうやらいじめられているわけではなくただ単に追いかけられているだけのようだ

「与一さん俺らを舎弟にしてください！」

などと言っている元いじめ野郎の二人。その二人は優を見つけるとその優に対しても尊敬の矛先を向けおれにも・・・

やはり向けてきた

「で？本当はなにか頼みがあるんじゃないやねえの？」

俺はその二人のいる方向を見る。その二人はぐつと押し黙った

「実は、俺らの仲間が『開かずの間』に行ったきり戻ってこなくて……
「開かずの間？」」

「はっはーん、あなたたち軍管理下の一級立ち入り禁止区域を侵した
んですね？」

開かずの間って確か……まただ……原作を思い出せなくなっ
てきてる……何でだ

4年前までしつかりと思いつけていたのに

「あそこに入ったものには厳しい罰が与えられます。」

「じゃあ、助けることは……無理ですねあきらめて下さい。」

「……」

↳校内↳

廊下を4人で歩きながらさつきの開かずの間について話していた

「実は吸血鬼殲滅部隊の隊員を養成するための場所になってますか
ら、訓練を受けてない者が入ると鬼に取り憑かれる可能性があります
す」

「は？鬼ってまさか……」

「はは、では次のステップへ行っても良さそうですね。着いて来て下
さい」

そのままある扉のまえにつく

扉を開けると階段が下までずっと続いている。

「(この空気は異常だな……)」

「この学校は、全てが殲滅部隊訓練場になっています。」

つまり、壮大な人体実験のための学校というわけですね」

「まあ流石に、こんな狂った時代に平和の学校が存在するわけねえよ
な」

「はい、その通りです。翔さん」

そして、大きな扉の前につく

そこには呪符が沢山貼ってあり、気味が悪かった

「ここから先は私たち殲滅部隊が呼んだ人材か、鬼に呼ばれた者しか
入れません」

「じゃあ、あのお仲間さんは後者だな」

「そうですね。鬼に心を喰われてるかも」

「心を鬼に喰われたらどうなるの？」

「吸血鬼より質のわるい人喰い鬼に化します・・・ですから心の修練がいるんです」

優がその扉の前に立つ。そしてその扉を開ける

「要は、負けなければいいんだろ？俺には復讐のための力があるんだよ。鬼だろ？が悪魔だろ？が力が入るなら何でもいい」

と言いながら・・・

その部屋の中には沢山の武器があつた。そしてこの部屋の丁度真ん中には儀式陣があり、そこに武器を持った男子生徒が立っている

「遠目で見ただけで手は出さないで下さい。彼は殲滅部隊で・・・」

そんなシノアの言葉を聞かず、優がいつもの悪戯をしようとする笑顔で笑う

「あの斧まだ契約できてねえんだろ？なら俺が頂く！」

そのまま走っていく優

「はあ、またか・・・。じゃあ俺もちよっくら手伝ってやるか」

少しして優に追いつく

「すぐ終わらせるからな。だから優、鬼に負けんなよ」

「はっ、俺は鬼には負けねえよ」

斧を振り回してくる男子生徒の斧を蹴り飛ばし隙をつくる。その一瞬の隙をつき優が鬼の武器を奪う

「おっしや!!?武器を奪つ・・・!!?」

ドサッ

武器を奪った瞬間優は倒れた

少しして優が目を覚ました

「・・・嘘でしょうまさか自力に戻ったんですか？」

「流石だな優」

「ん？戻ったって何が？」

「……………」

「今、あなたは鬼に幻覚を見せられてたんです。でもそれを意思の力だけで破って調伏しちゃった…。契約呪も無しに……………」

「つまりどゆこと？この斧は俺のもんなの？」

「いえいえそう簡単にはいきません。鬼を使役するには手順がありますし、どの武器を与えるかもグレン中佐が決めます」

「……………でも俺は鬼に勝った、そうだよな？」

「えーと」

視線を合わせずに言うシノアをはたから見ても困ってると思う。そんな姿も案外可愛いなって思ってしまう

「グレンの馬鹿も無視できねえ、そうだろ？」

「あー…そうですね。一応上には報告をしておきます。明日からでもここに——この吸血鬼殲滅部隊の訓練校に通うことになるでしょう」

その言葉を聞き優はよっしやああ！と叫ぶ

「(なーんて勝手に決めて私は怒られるかなあ)」

「(やつとここまで来たな優……………!)」

俺は何処か他人事のように思い、優を見ていた

4話く君月土方く

よおみんな翔だ。早速だか、前回優が鬼を調伏したおかげで吸血鬼殲滅部隊——通常月鬼ノ組に入る事になったから、その為の研修教室に向かつてる

んで、さつき与一と2人で優を待ってたら、顔に痣やら何やら傷をしていてなあ。理由を聞いたら「電柱にぶつかった」しか言わねえんだよ

そんな話をしながら長い廊下を歩いてると月鬼ノ組官舎つて扉の前にシノアが待っていた

「遅かったですね」

「んあ？」

「待たせて悪いね」

「いえいえ。それよりその顔・・・つまりまた謹慎に・・・」

「喧嘩してませーん。僕してませーん」

「優・・・。シノアは喧嘩なんて一言も言っていないぞ・・・」

「あ・・・」

俺がそう言うのと優もやっちったって顔をしていた

「ほんとにバカですね。まあいいんですけどね。でもついに今日からなんですな」

「はいそうなんです!!今日から僕ら月鬼ノ組に入るための研修教室に・・・!!?」

「研修なんていらねえんだよ。とつとと実戦に投入しろつての」

「わかりました。じゃあ百夜さんは研修受けないので武器と制服無しで戦場にどうぞ」

「ほとんど全裸じゃねえか!!」

「いやまだ下着が残ってるぞ」

「いやそうゆう問題じゃねーから!」

優を茶化しつつシノアの案内で教室に向かう。そんな中与一が緊張してきたのか不安そうだ

「大丈夫か与一?」

「う、うん。ちよつと緊張してきただけだよ」

「なんで緊張なんかしてんだよ」

優が与一に聞く

「だって月鬼ノ組の研修教室っていったら軍の中でもズバ抜けた才能がある人だけなんだよ？おまけに僕達は途中転入組だし・・・もし嫌われたり・・・またいじめられたら・・・」

「安心しろって。もしいじめられてたら俺達が守ってやるから」

「当たり前だろ？とりあえず全員ぶん殴って、俺の実力を思い知らせてやる!!」

「逆に心配になってきた・・・」

その時の優の顔は、かなりゲスくて副音声にクフフフフって付けても何らおかしくない位にゲスかった

それじゃあどこぞの幻術が得意の南国果実野郎じゃねーか

そんなこんなで着いたのか、シノアがガラツと扉を開けて失礼しまーす、と入って行くのでその後が続いて入る

教室には沢山の生徒がいて、教壇にはグレンが立っており、生徒に向かつて話しかける

「お前から聞け、今日珍しく担任である俺がここに出向いたてやったのは転入生がいるからだ」

「いや担任は毎日来るもんだから」

グレンに言うのと黙ってると言われた

俺は間違ったこと言っていないもん・・・

「あーなんだとりあえずこいつらだ。百夜優一郎と早乙女与一そして朝倉翔。まあ一言で言う・・・アホと弱虫とチート野郎だ。今日からこの教室の一員になることになった」

「誰がアホだよ!!?」

「誰がチート野郎だ!!?」

「よ・・・弱虫・・・」

それぞれにシヨック?を受けつつも、グレンは手をヒラヒラさせながら自己紹介しろって催促してくる

それに答えたのは優だった

「いらねえよ。俺らは友達作りに来たわけじゃねえんだ」

流石のグレンもは？って顔してやがる

優は黒板を殴って変なことを言い出す

「ここにいる奴らにも言つとくが俺はおまえらと馴れ合うつもりねえから!!だいたいこの研修教室は、鬼呪装備の契約ができる人材かどうかを見極めるところだろ?んじゃ今から宣言しとく」

生徒に指を指して、高らかに宣言する

「ここにいるクズどもが今まで何勉強してたかはしらねえがおまえらがやってたことは無駄だ!!一番いい武器は俺がもらうことになった!!以上!!」

「以上じゃねえええ!!」

グレンと俺の蹴りが見事にクリーンヒットして軽く吹き飛ばすため息と同時に呆れたように優に言う

「やっぱりお前もう一回やり直してこいよ、色々」

そしてグレンも優にむかって言う

「協調性ねえ奴はやめさすつつつたる!!?このアホが!!クズ!!童貞!!」

「童貞関係ねえええ!!」

グレンに殴りかかる優を見てクラスの奴らがヒソヒソと騒ぎ始める

「あいつ正気か?あの一瀬中佐に殴りかかってんぞ」

「一瀬中佐ってたった一部隊で吸血鬼から新宿を奪還した英雄バケモノって聞いているけど・・・」

「もういい座れ馬鹿が!あー席は・・・あそこな」

グレンが指さしたのは足を机に上げて顔には教科書とおもわれる本を乗っている男子生徒の前の席だった

俺の席は優の右側でその前が与一になった

そして、優も自分の席に行ったかと思うと急に大きい声を出す

「んな・・・!!てめえ今朝の電柱!!なんでこんな所に!」

「ふざけんなそりゃこっちのセリフ・・・電柱ってなんだコラア!!」

「(今朝ってことは優の喧嘩の相手か・・・)」

ここで言うっておくべきことがある。俺は原作の知識を持っていたのだが、ここに来て完璧に忘れてしまった。原因はわからない。まあ原作なんて覚えてればラッキーだし、忘れてたら忘れてで割り切れるしんで、優と言い合ってる奴を見る。そいつはピンク色の髪で眼鏡をかけていて真面目っぽいがなんとなく優と同じタイプ（問題児）そんな印象が感じられる

そこでグレンが動いた

「あーいやかましい!!!」

そしてグレンの二回目の蹴りが二人に見事にヒットした

二人をそのままほっとかれ、グレンが授業を進めていく。まあクラスの皆は今日の出来事をこう思っただろう、問題児が増えただけ……そしてこのクラス最悪だ!!と……

5話くそれぞれの想いく

く翌日く

「今日からは一週間後の鬼呪装備適性試験に向けて君たちの能力をジャツジして行きまーす。でも結果を出せないとそもそも一週間後の試験すら受けられないから頑張るようにく」

よっ！みんな翔だ。今日は小百合先生の言う通り、演習を行うために大きめの体育館みたいな所に集まってる

んで俺の周りにいるのは、優、シノア、与一とちよつと離れた所に君月がいる

「だ、大丈夫かな？」

与一が不安そうに声を上げる

「とりあえず一番強い武器は俺がもらう！」

「あはは、まだ言ってる」

何か優の馬鹿さには呆れるよねうん・・・四年もいるのに

「今日の演習は二人一組で行います。仲間と息を合わせる訓練です。なので二人で訓練用の戦闘人形を倒してください。倒するのが早かった順に高くなります。ではまず二人一組になってなった順に前に出てください。あ、あと柊さんは今回は奇数の人数なので、外れて下さい」

「あらら、では皆さん頑張ってくださいい」

手を振って俺達から離れていくシノア。だが去る時に小声で言われた

「翔さん、優さんとは組まずに与一さんと組んでくださいね」

「は？なんで？」

「そっちの方が面白いことになるからですよ」

悪戯っ子のような笑顔を浮かべて去っていつていしまった

「(まあとりあえず言われた通りにしてみるか)」

「え・・・え？二人一組？んなこと言われたって俺知り合いは・・・あ、かけ・・・」

俺の方を向いて、名前を言いかけたが俺は与一を誘う

「与一、俺と組もうぜ」

「へ？あ、いいよ！」

「をを!!?何でだ翔!!?」

そんな優を置いて、前に行く。ふと後ろを見ると、シノアの言った意味が分かった

「あーそういう事ね」

「何が翔君？」

「あれ見てみ？」

後ろに残ったのは優（問題児）と君月（問題児）の二人だった

「あ、あれ大丈夫かな？」

「まあ、何とかなるだろ」

「それじゃあこれ付けて下さいね」

いつの間にかいた小百合先生から渡されたのは手錠だった

それよかあのバカ二人また言い合ってるし、ほんとに大丈夫か？と心配になるよ

そこで言い合いをしてる二人の手に手錠が嵌る

それは小百合先生が投げたものだった

「（いやいや!?何でそんなの出来んだよ!!?）」

心の中でツツコムが小百合先生は笑顔で説明を始めた

「はいはい、これで全ペア決まりました。では手錠を繋がったまま、協力して戦闘人形を倒してください。ちなみに手錠は人形を倒すまで外れないようにできてますから」

言い終わると床が回転して人形が現れた

多分これが先生の言う戦闘人形なのだろう

「それじゃ頑張ってくださいね〜」

それが合図なのか人形が急に動き始めた

与一が驚いたのか声を上げる

「うわああっ!!」

「落ち着け、与一。そこまで早くないから慌てずにやれば大丈夫」

「う、うん！」

目の前の人形の攻撃を与一の負担の無いように上手く交わし続け

る

「そろそろ攻撃するぞ与一！俺が攻撃を受けるから相手の腹に蹴りを入れるー！」

「で、出来るかな・・・」

「心配すんな、お前なら出来るよ！」

俺が鼓舞するように言うと、力強くやってみる！

って言ってきた

なので、作戦通り俺が攻撃受け止め、与一が蹴りを入れたら人形は難なく倒せた

「や、やったよ翔君！」

「やったな与一！この調子でいくぞ！」

二人で喜んでると優の声が聞こえたので優達を見ると二人でなにやら喧嘩をしている

「ど、どうしたのかな？」

「とりあえず行ってみるか」

優たちの所に向かうと丁度優が君月君を殴った所だった

「馬鹿かおまえ!!評価とかどうでもいいだろうが!!てめえの家族があぶねえんだぞ!!?家族は死んだらもう・・・二度と会えないんだぞ!!」

その優の言葉を聞ききつと、優は自分の家族・・・ミカたちのことと重ねているのだろう。と思った。そしてそう言った優の言葉にはどことなくとても重いものを感じた

「おいおまえ!!?連絡官!!?治療室ってのは何処だ!!?」

そう言った後優達は連絡官と一緒に何処かへ行ってしまった

優side

この前から何かと突っかかってくる電柱野郎と演習でペア組むなんて思ってもなかった。それにこいつ自分の妹、血の繋がった家族が危ねえのに評価だの、成績だの言いやがって・・・!!

「馬鹿かおまえ!!評価とかどうでもいいだろうが!!てめえの家族があぶねえんだぞ!!?家族は死んだらもう・・・二度と会えないんだぞ!!」

死んだらもう会えねんだぞ・・・!!

〈病院内〉

連絡官の言った病院に着くと沢山の呪符が貼ってあるベットがあり、そこには辛そうにしている女の子がいた

「君月くん、今回は危機を脱したが民間の治療所じゃこのウイルスは・・・」

「わかってます。でももう少しで月鬼ノ組に入って・・・そうしたら軍の施設に入れられるので・・・もう少しだけお願いします」

「・・・そうか・・・」

その時の君月の顔を見れば分かる。こいつも俺や翔と同じなんだ、って。大切な人を守りたいって気持ちは・・・

「あくよかったな助かって。つかおまえクソみてえに目ツキ悪いのに妹のために頑張ってたのかよ。それならそう言えよ」

「・・・」

「つっても一番強い鬼呪装備は譲ったりは・・・」お前のせいだ

「お前のせいで評価が下がった。俺は月鬼ノ組に入れない。そしたらもう妹は助からない」

こいつ何言ってるんだ？何で簡単に諦めんだ？大事なら諦めずに足掻けよ、俺はそう思う。俺には翔しか残ってないんだ・・・なのに何でこいつは血の繋がった家族を諦められる？よくわかんねえ

「妹の命をあつさり諦めてんじやねえよ。評価が下がった？もう助からない？ざっけんな！俺は俺の欲しいものは絶対に手に入れる。そのためなら軍も月鬼ノ組も関係ねえ！なのにてめえは簡単に家族の命を諦められるのか?!」

「ああ!誰が諦めるって・・・!!くそ、いったいなんなんだよ・・・てめえのせいで評価落ちたのに・・・!!」

まだ評価とか言うのかこいつ

「だが・・・お前の言うとおりで」

「あ?」

「今回だけは感謝してるって言ってんだ、大事な時に妹の側にいられたこと・・・悪かったな。俺の妹のためにお前の評価も下げた」

素直じゃねえー奴だなこいつも。素直に言えよな

「てめえとは格が違うつつつてんだろ？俺の評価は俺が決めるんだよ」

「・・・はっおまえまじうぜえなあ」

俺は大切な家族を奪った吸血鬼に復讐する。そして翔を——最後の家族は絶対守る、それだけだ

　　～四年前～

いつもと同じ夜

だが何処かいつも以上に何かを感じる夜

不吉なことを感じながらふと虚空を見つめた。静かな夜を過ぎ過ぎていたためその変化はすぐに気づけた

数人の吸血鬼が外と繋がる道の方へ慌ただしく走っていく。何かあったのだろう。その吸血鬼達に何があったのか聞くためその吸血鬼達を追いかけた。

そして、着いた場所には私が飼っていた百夜孤児院の子供たちの死体とその近くに倒れているフェリド・バートリーの姿がある

「おのれ家畜の分際で貴族に手をかけるとは・・・殺してやる!!」

一人の吸血鬼が言う。その吸血鬼の前には怪我が酷いがまだ生きていると思われる少年の姿があった

私はコツコツと音を鳴らしながらその吸血鬼に近づいていく

「やめなさい。その人間は私のものです」

　　周りにいた吸血鬼達が私の方を向き驚いた顔をする

「じよ・・・女王陛下」

「あ・・・あなたがなぜここに・・・」

そんな吸血鬼達の声を見無視して倒れている少年の元へ歩いていく

「あらあらこんなに美味しそうな匂いの血を大量に流して・・・これじゃあもう死ぬわねえ」

その少年から流れている血を指でとりペロツとなめる。その血は他の子供と比べかなり美味しいものだった

そして近くで倒れている吸血鬼の方に話し掛ける

「これはいったいどういうことかしら？フェリド・バートリー」

フェリド・バートリーはニヤツと笑顔を浮かべスツと起き上がる

「これはこれは我らが吸血鬼の女王クルル・ツエペシお久しぶり君はいつも綺麗だねえ」

「あらありがとうあなたも相変わらずいやらしいかおで笑うわねえ」

そう皮肉をこめて言う

「ひどいなあ人間に頭を銃で撃たれたばかりなのに。君への愛の力でなんとか笑顔を作ってるんだよ？」

そう言ってくるフェリドそれが本音ではないことくらいすぐに分かった。なので

「あは、愛？あなたが愛してるものは、私の持つ権力でしよう？」

とフェリドの本音を面と向かって言う

それでもフェリドはポーカーフェイスを崩さない

「ふふ、それも好きだけどね」

「それで？第七位始祖のあなたがたかが人間の子供に撃たれた？冗談ででしょ。そんな戯言誰が信じる？」

話にはちがあかないので本題を切り出す

「でも事実だ。」

「(チツまだとぼけるか。)」

本当のことを言わないフェリドに苛立ちを覚える

「いいえ、あなたはワザと逃がした。私の飼っていた天使《セラフ》を二人は逃げ一人は死にかけている。この事件に弁解ができるというのなら今すぐ……」

その言葉とともにフェリドのさつきまでの笑顔が消える

「いや、弁解すべきは君の方じゃないかなあ？天使《セラフ》の呪いに触れるのは吸血鬼の世では法にふれるはず、僕が上位始祖会に一言言えば……」

その言葉に私は完全にきれる

「……え？よく聞こえなかった。上位始祖会に何？」

まだ保てた理性でフェリドに問う

「だから僕がこの件を……」

フェリドが言い終わる前に攻撃を仕掛ける。その力の差は私が約七割の力でも勝てるくらいに差だ。腕をちぎって

ほとんど一瞬でフェリドをおいつめてフェリドの首もとに足を乗っける

「あは、よく聞こえなかつたんだけど、もう一度言ってくれませんか？」

「ひどいよ、クルル、くつつくとはいえちぎられる瞬間は痛いんだよ

腕……」

そんなことをボヤしてくるので

「このまま首もちぎろうか？」

と冷たい声で言う

「それは困るなあ、よし負けを認めようこれ以上この件には踏み込まない」

そんなフェリドの言葉に私は無言で返す

さつきまで、私をはめようとしていた奴の言葉など聞く気にもなれなかつた

「本当だ第一君に逆らつてここで生きていけるとは僕も思つてないしね」

そんなフェリドの言葉に今度はちゃんと返す

「いいだろう……だがもしまたこの件を詮索したら……」

「大丈夫、僕だつて命は惜しいからね」

その言葉を聞き、子供のことも気になつていたので早く消えろとフェリドに言う

「はいはい、でもまた来るよクルル、僕は君が大好きだからね」

そう言つて帰つていくフェリド

チツと舌打ちをする。でも今はそんなことより人間の子供に意識をうつす

「……人間の状態は？」

そばにいた吸血鬼に問うと驚いたようにええ？と言つてくるがすぐに状態を教えてくる

「呼吸が止まろうとしています」

その言葉に間に合つたとホツとしその人間に問う

「・・・おい人間、まだ生きたいか？私ならおまえに命をやれる。永遠の命を・・・」

少年は苦しげながらも要らないと小さな声で言う
そんな少年に私は少し驚きすぐに笑う

そしてブチっと自分の唇に傷をつけ血を流す

「はははそうか、命は要らないか。だがおまえに選択権はない。私の血を飲みおまえは、人間をやめろ」

その言葉と共に血を飲ませるべく少年に口付けをする

そして少年はうわああああと叫び吸血鬼となった



現在 京都ー地下

吸血鬼たちの第三都市

サングイネム

『今日始祖の血を継ぐ貴族の方々に集まってもらったのは他でもない』

そんな吸血鬼の声がする方へ歩いていく。着いたのはたくさん吸血鬼が集まっているドームのような部屋

前には吸血鬼が演説のようなことをしている

『脅威ーそれは東京以北において暴れている。《日本帝鬼軍》という名の人間どもの組織だ』

そんな言葉を聞きながら奥にいる桜色の髪をした少女、ここにいる吸血鬼の誰よりも強いこの少女の名前はクルル・ツエペシ。その少女は僕を見つけてにこつと笑ってくる

僕は顔をかえず無視して一人呟く

「人間の・・・組織・・・」

『奴らは我らの同胞を殺し、領土を拡大し欲望のままに禁忌の呪法に手を出す。情報では再び《終わりのセラフ》の実験までしているという。このまま奴らを野放しにしておけば8年前と同じ、大厄災が起きることは間違いない。よって我らは・・・』

クルルが手でその言葉を制しスツと前にでる

「よって我らは《日本帝鬼軍》を殲滅することに決めた、戦争だ！世界

の安定を守るため我らは欲深い人間どもを皆殺しにする！」

その言葉が終わると周りからオオオオオーと言うこえが上がる。その中を一人僕はやはり眩く。

「優ちゃん、翔、すぐ助けに行くからね・・・」

その言葉は周りの声によって消されていった

6話く試練く

あれから、約10日

優がグレンを探しにいこうぜと言うので五人で探しに行くことになった。やく1時間ほど会話をしながら歩いて行くと

「あー、クソつまんなかった。世界滅びた後も内部で政治やら派閥争いやら・・・あほかつての」

と言う声が聞こえる

その声は俺たちが探していた張本人のものでありその声が聞こえた瞬間に俺たちはその声の方へ走っていくいち早く走っていった優は当たり前のようにグレンを先に見つけ

「馬鹿グレン、見つけたああああ!!」

大きい声を出しながら優はグレンの方にダダダダツと走っていき飛び蹴りをかました。しかも

「俺に鬼呪装備渡さないで10日失踪するってどう言うことだあああ!!」

と言いなながら、だがその蹴りも軽々とグレンに止められた。そんな優を見てグレンは面白いように笑う

「はは、相変わらずおまえ・・・わかりやすいなあ。くだらん政治の後だとちよつと面白いぞ」

「俺は面白くねえよ!!いい加減俺に吸血鬼殺せる武器よこせっ!!」

そんなことを優が言っているとき俺たちはやつと優に追いつく

そしてそんな俺らを見てグレンは一旦優の足をはなしておまえらそーんなに吸血鬼に復讐したいのか?と聞いてくる。その質問にすぐさま優が答えた

「したいねっ!俺はそのために生きてんだよ!」

そう言った優をグレンは考え事をしているのかポーとした顔でみつめる。そして決意したように言う

「よし、なら明日鬼と契約するか。で前線に出してやる」

さすがの優もこんなにすんなりオツケーをもらえとは思わなかったのか面食らった顔をしている

そのあと、え、マジで!!と声を出していた

「ああそうしよう。訓練間に合ってなくてももういいや」

そんな投げやりな言葉に俺は呟く

「仮にも先生やってんのにそんな適当でいいのかよ・・・」

聞こえないように言っただつもりだったのだが地獄耳のグレンには聞こえたようだ

「何かいったか?」

「なーんにも言ってるねーよ」

その言葉にグレンはそれでいいと言うようにとてつもなく怖い笑顔でニコツと笑った。そして俺たちに言う

「死んだらおまえらの責任な?」

そんな言葉に優は顔を輝かせながら

「おおお問題ないね!!それだよそういう展開をずっと待ってたんだよ!!」

と言っている。グレンはははっと笑う

「やつば馬鹿だなおまえ・・・あつとところでさ優・・・」

上官蹴ろうとするんじやねえええ!!」

優の頭にグレンの踵落としがゴンつと鈍い音を立ててヒットした。

そのまま意識をうしなつた優をほつといてグレンは歩いていく

「あーやつば馬鹿どもの相手すんのは疲れたわ。でもまあちよつと面白くなってきたな」

と呟きながら

↳翌日 教室内↳

「それではこの前やつた呪術筆記試験の答案を返して解散にしまーす。この結果はこれから与えられる鬼呪装備のランク決めにも影響するので結果を受け止めて次回に活かすようにして・・・」

先生は答案用紙を配りながらそんな事を言っている。俺にも結果が配られた。結果は全て100点・・・とはいかず平均的に90点くらい。

そばにいたシノアが覗き込んでくる

「いやー、流石は翔さんですねえ」

それに比べて・・・とシノアは風のように優のそばにいきサツと優の答案用紙を奪う。優は取られまいとしたようだが一步遅かった。シノアはその結果を見てやはりというように笑う

「うわーすごいこれアレじゃないですか！超人にしか取れないと噂のあの伝説の点数じゃないですか！皆に見てもらいましょー」

シノアはまたもや風のように男子生徒の方へ行きサツと答案用紙を机の上におく。男子生徒はその点数を見てそれぞれの感想を言うていく

「おおおなんだこいつまじで0点だぞ」

「ほんとだすげえ!!」

「この月鬼ノ組は吸血鬼殲滅部隊の中でもエリートが集まりじやなかったのかよ?」

「答え全部ひらがなで書いてあんだけどそんな馬鹿がなんでここにいらんだよ・・・」

「見んなコラアアア!!!」

ついに優が怒った。まあ我慢した方だろう

やっとの事で答案用紙を奪い取りシノアの方を向く

「・・・てんめえいじめっ子すぎんだろ」

「いじめっ子とはなんですか。トゲトゲしすぎてクラスに溶け込めないあなたを人気者にしてあげてるんじゃないですか」

「余計なお世話だっつ!!だいたい仲間やら友達やら吸血鬼殺すのにいらねえんだよ!!」

と優は開きなおっている

「まーたそんなことをチームプレイできない人は軍じゃ活躍できませんよ」

そんな言葉を聞かず優はシノアを指差し言う

「できるね！俺は超スーパァ活躍するね！」

そんな優に呆れ呆れシノアは言う

「子供ですかあなたは」

「誰が子供だっつ!!」

そんな二人の会話を与一と間に入る

「でも優くんはあれだよ。子供の時吸血鬼の都市で監禁されてたから読み書きは日本語より英語やラテン語の方が得意なんだよね。今回のは仕方ないよ」

そんな与一の言葉にあーいや、なんとというか・・・と照れたように？頭をかく優。そんな中で後ろからひよいつと君月君が優の答案用紙をとった。隙をつかれた優は、ああ!!?と叫んだがその手に答案用紙はもうない

君月君はその答案用紙を見ると一言言う

「頭にクソでも詰まってんのか?」

「ああ!!」

「君月君やめろって、優の頭には何も詰まってねえんだよ」

「おい!!?翔てめえもかよ!!」

本当は言うつもりはなかったのだがどうやら口に出していたらしい、まあいいか

さつきまで怒っていた優は俺たち二人に向かって

「なんだよ偉そうにしてるてめえはじゃあ何点だったんだよ!!?さぞいい点なんだろうな!!」

と聞いてくる

「(言った方がいいのか?)」

そんなことを考えているとすでに君月君は自分の答案用紙をもつて優に見せおり、それは全て100点の答案用紙だった

「右からラテン語呪術、英語呪術、日本語呪術、いやー俺は日本語以外苦手だから帰国子女気取りの優さんにはとてもかないませんよ」

そんな君月君の嫌味に優は完全にきれる

「てめえは吸血鬼の前にぶっ殺おおおす!!」

「上等だ来いやコラああああ!!」

喧嘩し始めた優達をほつとき、俺はシノアの方へ歩み寄る

「なあシノア、グレン今日来るって言ってたよな。くるのか?」

ちようどシノアに聞いていた時ガラツとドアが開く

入ってきたのはグレンだった

「おいなんだ相変わらずクソうるせえなこは」

と言いながら入ってくる。小百合先生はグレンが来たことが嬉しかったのか照れたような嬉しいような顔でグレンを出迎えている

「中佐ちようど来ましたね」

そうシノアが言ってくるのでそうだなと返す

隣の優達はまだ喧嘩をしているがすぐにグレンに気づき優がグレンに声を掛ける

「おいグレン!! てめえいい加減俺に鬼呪装備よこせよ!! 俺は吸血鬼どもに復讐するためだけに生きてんだぞ!! なのになんでこんなところでクズどもと一緒に・・・」「騒ぐな馬鹿俺が喋る・・・」

君月君は優の言葉を遮り次は俺だ、とグレンに向かって話し掛ける「なぜクラスを放置して10日以上も失踪したのでしよう? もう我々には鬼呪装備契約のための実力はあると思いますが」

その言葉にグレンは薄く笑う

「へえ、おまえらクズどもに鬼と契約できるだけの実力があるって?」「あるに決まってるんだろ!! 君月のクソにはないとしても俺にはある!!」

優が素早く返答しそれに君月が黙れよ!!? というそのまままた、喧嘩になっていく

そんな二人を尻目にみながらため息を一つはく

近くにいた与一に聞く

「こいつらいつまでこんななんだ?」

「一生このままだと思うよ?」

だよな〜つとまた一つため息をついた

そのまま前を向くとグレンが自分の剣を抜いている所だった

「(ちよつと待て!! とてつもなく嫌な予感が・・・!)」

そんな俺の嫌な予感は的中する。そして

「死んだ奴は修練足りてなかった自分を恨め」

と、グレンは言ったあとそのまま剣を床に突き刺した

その瞬間黒い霧のようなものが教室全体を包むがそれだけではなかった、周りのほとんどがすぐにドサドサと倒れていく

「があ?なんだこれ」

「し…心臓が締め付けられ…」

それぞれ優と君月君が言う。与一はほとんどなにも感じて無いかみんなどうしたの？とキョロキョロしている。

俺も俺でなにも感じずただ倒れていく人を見ることしかできなかった

そんな中やつとグレンがはい終了と剣をしまう。そしてそのまま言っていく

「よーしじゃあ今意識があるやつ、見込みがあるこのまま訓練続けてきや鬼呪装備契約の儀に移れる可能性がある。あと立つてられた奴お前らは優秀だ。すぐに俺の剣と同ランク『黒鬼』のシリーズに挑戦させてやる。で立っているのはく優…君月、与一、翔…お前は気絶しろよ」

ははっとシノアは笑う。

「あのグレン様、無茶苦茶な試験はいつものことですが与一くんを『黒鬼』シリーズに挑戦させるのはどうかと思います」

と小百合先生がグレンに言う。その言葉にグレンはうつとおしそくに答える

「俺の決定に文句あんのか？」

「文句は無いですが…しかし、与一君は心が安定していても鬼を受け入れられるだけの強さは…」

「強さがなきや死ぬ。ここはそういう世界だ、おままごとやってんじゃねえぞ」

今度は女の先生ではなくシノアがグレンの言葉に対して答える

「ですが鬼は弱い人間を嫌います。与一さんはきつと鬼に…」うるせえなあ」

シノアの言葉を遮りグレンは与一の方を向く

「おい与一おまえ吸血鬼に殺された姉貴の復讐したいんだろ？なら命かけるよな？」

与一は少しためらいを見せる。そんな与一に俺は声を掛ける

「与一、俺はやめた方がいいと思うぞ。でも与一にはここに来た理由があるはずだ。だから無理強いはしない」

そして与一は何秒か考えたあと大声でグレンに言う

「グレン中佐!!僕やります!!もっと強い力が欲しいから!!もう大切な人を失わないですむだけの力が欲しいから!!」

その言葉には与一なりの決意の表れがあつた気がした

そして優がその時悲しい顔をしていたが誰も気付く人はいなかつた

7 話く鬼呪く

「さーてここだ」

グレンが言いながら、大きな扉を開ける。その中には鬼の形をした大きな像があった。そして異様な雰囲気にも包まれている

ゆつくりと部屋の中に入ると、急に頭痛に襲われる

「・・・っ」

「大丈夫ですか？」

俺の様子に気づいたのかシノアが声を掛けてくる

「ああ、大丈夫だ」

「なんだここは・・・」

優がグレンに聞く。グレンはそれにこう答えた

「お前が一番欲しがってた最上位の鬼神を封入した武器が集まってる部屋だよ」

「最上位の鬼・・・じゃあこれがあれば吸血鬼狩れんのかよ」

「そりゃあお前の実力次第だな」

周りを見渡すと俺らの一回りはでかい鬼の像がある。それは俺達をどこか嘲笑っているようにも見える

「まあでももういいだろ、始めようぜ。だらだらとおまえらに付き合うほど俺も暇じゃねえんだよ」

俺達に早くやれとうながすグレンに優が聞く

「で、どうすればいい？」

「好きな武器を選んで儀式陣に入れ。武器に触れたら自動で契約の儀が始まるようにできてる。お前らが鬼に負けなけりゃ力が手に入る」

グレンの説明の途中で一つの視線を感じる。誰かに見られている、と言うよりはこつちに來いと読んでいるそんな感じがする

今度は視線は消えるも、頭痛に襲われる

「(っんだよこれ・・・！誰が俺を呼んでんだ！)」

一人で何かと戦っていると優、君月、与一はもう儀式陣に入っただけで待っていた。なかなか儀式陣に入らない俺にグレンは声を掛けてくる

「翔、お前も早くしろ」

「わかってるよ・・・！」

フラフラと俺は目の前に鞘も柄も鏢もハバキも無い、出刃包丁のよ
うな形状の巨大な刀身のみ刀がある儀式陣に入る

その時にシノアの忠告の声が聞こえた

「翔さん!!それは危険です!!」

そんなシノアにいつもの笑顔で言う

「大丈夫だシノア。ちゃんと戻ってくるから。それじゃやっと思つ
たお前の力を俺によこせ!!」

その言葉と一緒に目の前にあつた刀を抜く

そして俺の意識は途絶えた

目を開けて当たりを見渡すとそこには高いビル等の建物が並ぶ街
並が横たわっていたこの世界はBLEACHの黒崎一護の精神世界
だったもの。でも案外ビルが横になつてるのは驚くもんだ・・・

「出てこいよ、『斬月』」

そんな考えは置いといて、斬魄刀の名を・・・いや鬼の名を呼ぶ。す
ると目の前に真っ白の俺が現れた

「よおっ」

「まさかお前が鬼としていてと思つてもなかった」

ぶつちやけると鬼としておっさんが来ると思つてたからな

「なにしに来たんだテメエ? オレは弱えテメエに力は渡さねえよ」

「ああ?」

「テメエの代わりにオレが復讐してやるよ変われ翔」

「はっ、忘れてたわおまえが鬼だったの。なら力づくでやってやるよ
!」

俺は仮面を出す。それを見た白いオレは呆れたように言う

「それで勝てると思つてんのかあ?」

急に俺の目の前に現れ、俺の仮面ごと顔面を掴む

「ほんと何も知らねえんだなテメエは。それはオレの力だ」
『な!?!』

仮面をいとも簡単に砕き、俺の顔をを掴む

「仮面つてのはテメエが考えた通り特典って奴で使ってるが、それは鬼の力を媒介にしてんだよ。テメエは自分で出せるようになったと思ってるみてえだが、四年前に出せるようにしたのはこのオレだ」

「ンなこと・・・信じられるか・・・!」

「信じようが信じまいが知らねえがテメエは勘違いしてるみてえだ。仮面なんてモン鬼の力無しに使って代償がねえ訳ねえだろうが」

「がつ!」

俺の顔を持ったたまを投げ飛ばす。俺は何も出来ずに吹っ飛ばされ、ビルに突っ込んだ。その衝撃でビルが崩れた

「あの仮面の代償に俺はテメエの原作としての知識を奪ってたんだよ」

この事に驚きを隠せなかった。俺が原作の知識を思い出せなかったのはこういうことか

崩れたビルの中から何とか立ち上がりオレを見据える

「テメエには呆れたもんだ。ここまでされて何もやり返さねえんなんてな。オレはそんな腑抜けた王に従うなんてゴメンだ、だから変われ翔。オレがテメエの代わりに暴れてやるよ。何なら周りにいる奴らから殺してやるよ」

そこでオレはニヤリと笑い言い放った

それは俺の触れてほしくない過去

償うことも出来ない業

「お前が昔あの女にしたみたいにな!」

「!・・・てめえが何でそれを知ってる...!どうやって知った!?!」

「そんなの知らねえほうがおかしいんだよ。オレはお前の一部なんだよ。お前がどんなに隠そうとお前の中にいるオレにとっては隠し事なんてのが無理なんだよ!」

「.....やる」

「ああ？」

「殺してやる!!」

「てめえに出来んのか!?無理だな!!浅ましく生きてきたてめえに俺は殺せねえよ!!」

「来い斬月!!」

俺の声に反応して右手に柄も鏢もハバキもない出刃包丁のような刀が現れる

「かかって来いよ」

「はっ、武器持っただけで強気になってんじやねえよ!来い斬月」

その声に反応してオレの手に斬月が現れた。だが色の全てが反転していた。そこだけが唯一の違いだった

「なっ!?!」

「何を驚いてやがる。オレは斬月なんだぜ?オレがこいつを呼ぼうとおかしかあねえだろ…が!」

そう言い俺に斬りかかってくる。オレは連続的に斬りかかってくる。俺はそれを何とか斬月で防ぎながらにいた

「さっきの威勢はどこに行ったんだ!翔!」

「クソが…!」

思わず悪態を付いてしまう。それもそうだこいつは俺自身。俺のクセやそういったものを全部知ってる。だかそれを抜いても強い

反撃する余地があまりにもない

「こんなならとつとと死んでオレに体を寄越せ」

そう言つてオレは攻撃の手を一旦止めた

「てめえには心底呆れたぜ」

「なに?」

「啖呵をきつておきながら防戦一方。攻撃もしてこない。そんな奴に力は渡さねえよ!それにこいつで終いだ」

オレは斬月を上段に構え力を集まっっていく。それは幾度となく見たことのあるもの

前世でみたあの技と同じもの

それは…

「月牙天衝!!」
振り下ろされた斬月の青白い光の奔流が俺を喰い殺すように襲つた

8話く新しい力と恐怖く

「月牙天衝!!」

俺を喰い殺すように青白い光が俺を襲った

「今のをよく躲したな翔」

「はあはあ…」

膝をつき肩で息をしながら、自分の左腕を見る。そこには肘から下がなく、血がダラダラと出ている状態の腕があった

さっきの月牙天衝を咄嗟に右に飛び避けることで致命傷は避けたが、左腕を持っていかれたのだ

「解せねえってツラしてやがんな。何でオレが月牙天衝を使えるのかってな。それはオレが斬月だからだよ！お前はオレのことを鬼として見てるのか斬魄刀として見てるのかは手に取るように分かる！オレは鬼であると同時に斬魄刀なんだよ！」

そう言ったオレは瞬歩で俺の背後に移動し、俺の背中を斜めに斬りつけた

「がっ！」

斬られた衝撃で地面に倒れる。今の俺は死に体だ

そして、勝てない、その考えだけが頭を過ぎった

「もう諦めろ翔。てめえは前世から何も変わっちゃいねえ。お前があの女を殺した時からな」

「……」

そんなことはないって言いたかった

だけどあいっ言うことは事実だ。何の嘘偽りない事実

俺はなんも変わってなんかかない。変われていなかったんだ

俺が力を望んだのは好きだったって理由以外にもあった。それはもうこんな思いを他人にして欲しくないって、そんな人達を助けたって思ったからだ

偽善者、何て言われるかもしれない。だけどこの想いは俺の、心の

底からあるものだと思いたかった

「ワリイがお前のそれはニセもんだ」

「！」

その言葉に驚愕する

「…俺の…想いがニセ…もん…だと…」

「ああ！そうだ！それはテメエが自分の罪から逃げるために思い込んでいるだけなんだよ！自分が良ければいい！自分が気持ちの良いようにしたい！たったそれだけだ！！テメエの根本は元から腐ってやがんだよ！」

「そ…んな…」

どんどん視界がぼやけていく。俺の想いがニセモノ…

なら俺は何で生きてる…そんななら…

生きてる意味なんてないじゃないか…

「ああそうだ！テメエは生きる価値もねえ！だから肉体をオレに明け渡せ！テメエに出来ないもんをやってやる」

その言葉を最後に俺の意識は深い深い闇へと落ちていった

斬月 side

情ねえ奴だった。自分の過去とも向き合えねえ奴が威勢だけ張りやがって

だがそれももう終わりだ。あいつは完璧に落ちた
ならこの体の主導権はオレのもんだ

「これでオレが王だ！ふはははははははははは！」

そしてオレのやることは一つだ

「現世に戻って殺戮だ」

そうニヤツと笑い呟いていた

時は少し遡り現世

グレン side

「シノア。どれ位成功すると思う?」

優たちが契約を始めてから数分が経ち、そんな問をシノアに投げたその間にシノアは頬に指を当てながら答えた

「私的には四分の三位かと」

「ちなみにその1人は誰だ?」

「大佐こそ分かつてるのに何でそんなこと聞くんですか?」

首を傾げ聞いてくる

「いや、何か嫌な予感がするだけだ」

「ええー。大佐の感って結構当たるじゃないですか」

ゲツて顔をしているシノアを無視して優たちの方に目を向けた

ちようどその時、君月は目が覚めたみたいだ。その手には二つの剣があった

しばらくして優も目が覚める。その隣には一本の刀がある

「ツチ、お前も成功したのかよ」

優は君月君に向けていつもと同じように悪態をつく

「当然だ」

「で翔と与一は?」

その優の言葉がして約1秒ドンツと与一が挑戦していた所の鬼の像が爆発する

その様子を見てやっぱりかと思いながら言う

「あーあ、まじいな。与一はやっぱちよい力が足りなかったか。でもま、《黒鬼》に挑戦して四分の二が成功は上々だろう」

「いったいどういうことだよ!!」

優が叫ぶ

「よし鬼呪装備も手に入れたことだし吸血鬼殲滅部隊月鬼ノ組での初任務をおまえらにやろう。優、君月。天井を見る人喰いの鬼が出たおまえら二人で始末しろ」

俺の指の方向をに言われるまま見る。そこには与一を乗っ取った

鬼が弓を持って座っていた

その瞬間鬼が弓を引く

一気に四発此方に向かって打ってくる。そのうちの一発がこっちに来たのでその矢を刀で打ち落とす

「あーお前ら、追加の命令だ。おまえら鬼呪装備は手に入れたが契約したてじゃ使いこなせないだろ。だから鬼は呼びだすな鬼呪装備の基礎能力だけであの鬼を始末して見せろ」

「つてか殺せつてどういうことだよグレン!!? 与一は仲間だぞ!!?」

優は今回の事に納得していないようだ

「はあく? 仲間? ありやどう見ても鬼だろうが早く殺して楽にしてやれ」

「ぎっけんな!! 仲間殺せるわきやねえだろうが!!」

「生言つてんじゃねえ!! ここを何処だと思ってる? 月鬼ノ組だぞ。あののは修羅の道だけだ。それともてめえは復讐ごっこでもしに来たのか!!」

「……………」

「殺されたきや好きにしろ止めねえよ。だが与一はもう戻らない。てめえが軍人だつて胸張つてんならやるべきことをさっさとやれ」

俺は鬼のような顔で優に怒りをぶつける。優はくそがあと叫ぶと鬼呪装備を手取る。そして優たち二人は鬼に向かって攻撃を仕掛けた

「おいシノア翔の事守っとけよ」

「分かっています!」

鬼呪装備を使っている二人は身体能力が上がり動きがいつもと違って速い

優と君月は鬼を相手に押していた。が…二人は与一を殺す事が出来ない

「与一正気になれ! 鬼になんか負けてんじゃねーよ!」

優は必死に鬼の中にいる与一に向かって叫ぶ

だが鬼は矢を約10本以上同時に放ってくる

優たちはそれを何とか躲しながらにいた

「俺はもう二度と仲間は見捨てねえって決めたんだ！だから与一正氣に戻れー！」

それは優の心の叫びだった

心に届かなくても優はずっと叫び続ける。与一が帰ってくることを祈って、それでもその願いは届かない

「うるさい、死ね」

その言葉とともに鬼は弓を構える

優は何か決意した顔で剣を捨てた

「やれよ。俺は仲間は殺せない。そして与一も……おまえも俺を殺せない！おまえが俺と一緒になら目の前で家族を喪ったんなら仲間を殺せるわけないんだ!!？だから早く目を覚ませよ!!馬鹿与一!!」

与一が弓をギリギリまで引く

矢を放つその瞬間俺は叫んでいた

「おい！与一!!てめえはまたベッドの下で家族が死ぬのを見てるつもりか!!？いいからさっさと出てきて仲間を守れ!!」

鬼が、いや与一が弓を引き矢を放つがそれは優の顔の横を通り過ぎる。そして与一は泣きながら優に抱きついた

周りからは驚愕の声が聞こえる

翔に付かせていた筈のシノア隣から何か言ってきたが無視して与一に近づき……

「戻んのが遅ええ！」

優の頭を蹴った

「何で……俺ばっかり……」

そう言つて優は倒れた

そんな優には構わず与一に言う

「お前には才能がある。なのに姉貴を助けられなかったことに負い目を感じて生きる欲望が足りてない。だが今日それを見つけたら？おまえが生きる理由は今日おまえを助けてくれた仲間を守るからだ。復讐？んな小さいもんにとらわれんな」

寝ている優を軽く蹴り優に……この場にいるみんなに向かって言う

「昔の家族はもう忘れろ。ここにいるのが新しい家族だ。おまえは今いる家族に命を掛ける馬鹿が。過去には何も無いあるのは未来だけだ。それにまだ一人で帰ってきてねえーしな」

翔の方を見て言うのと翔がユラユラつと立ち上がった

「翔戻ったのか!」

優が喜びの声を上げるが何も反応を示さない翔

「(何か様子がおかしい)」

「翔さん!無事ですか?!」

シノアが近づくと翔はニヤリと笑った

「! そいつに近づくなシノア!」

俺が叫ぶとシノアがへ? って顔をした先にいたのは…

「じゃあなガキ」

刀を振り上げ今にもシノアを殺そうとしていた翔だった

グレン side out

「チッ!」

翔いや鬼はシノアに向かって刀を振り下ろす。それをグレンが間

一髪の所で受け止めた

「テメエ鬼だなおい」

「だとしたら何だ?グ〜レ〜ン〜」

更に刀に力を入れて押し込んでくる

鬼はニヤニヤとしながらこちらを見た

「ぐッ!」

「おいおいこんなもんかよ。だとしたら拍子抜けだなあおい!」

「黙れよ鬼が…!」

グレンは鬼の刀を自身の刀で力づくで押し返し、距離を開けた

そんな翔を見て優は有り得ないって顔で言った

「な…んで…翔はどうした…!」

優の間に鬼はうーん?と刀を方に担ぎ嫌な笑みを浮かべて言った

「ああ、あいつなら俺に負けたよ」

「え…?」

「な!?!」

「そ、そんな…」

「やっぱりか」

上からシノア、優、君月、与一、グレンの反応だかグレンだけはあんまり驚いていなかった

「そうだ! あいつはオレを屈服させることが出来なかった!」

「ウソです!」

シノアが大声をあげて反論の声を上げた

「翔さんが負けるわけありません!」

「ならなーんーでオレがここにいる? 要はそーゆうこった。あいつはな過去にも向き合えねえ弱虫何だよ! ふはははははははは!!」

鬼は刀を肩から下ろし地面に刺した

「オレはこいつの一番望まねえものを事をする。こいつは気に食わねえからな。絶望を味あわせてやる。だからテメエら俺に殺されろ」
「!!!!」

四人が感じたのはとてつもない殺気。常人なら気絶してしまうレベルのものであった。与一は辛うじて立っているがそれも辛そうであった。あのグレンでさても冷や汗を流すレベルのもの。その位の殺気を鬼は俺たちに飛ばしてきた

でもだからって負けるわけにはいかなかった

「帰ってこい! 翔! 鬼になんて負けてんじゃねえ!」

「そうだ! 翔! 戻ってこい!」

「翔君! 戻ってきて!」

いい加減にしろ! 翔! とつと戻ってこい!

「翔さん! 戻ってくるって約束したじゃないですか! だから早く戻ってきてください! 翔さん!」

全員が翔に呼びかけるように言うが反応したのは鬼だった

「うるせえんだよ! ガキどもが! そんなに死にてえなら殺してやるよ!」

そう言つて鬼は目の前から消えた…と思つたらシノアの前に急に現れ刀を振り上げた

「まずはテメエからだ女」

「！（不味い！間に合わねえ！）」

「シノアアア!!」

他の人からでは刀が振り下ろされるのは止められなかった。そして刀はシノアに向かって振り下ろされた…かのように見えた

「…え？」

刀はシノアに当たる数センチ前で止まっていた。それは何故か。それは…

「悪かったなシノア…！」

翔が元に戻った証拠であった。そして翔はシノアに靠れるように倒れていった

く翔の心象セカイく

ああ俺は何で生きてきたんだ…俺にはもう何も無いのに…

なのに何でこんなにも声が聞こえるんだ…

その声はとても強くてストレートに心に響く声。そして悲しみを一番に知っている人の声

その声は自分の為じゃなくて妹の為に頑張る兄の、負けず嫌いで頼りになる人の声

その声はとても落ち着いていてみんなに安らぎを与えるかのように優しい人の声

その声は一番頼りになっていつも俺たちを引っ張ってくれる親代わりの人の声

そして最後の声は…

俺の事を一番に考えてくれて心配してくれて守りたいって思う人の声

そんな声が乾いた俺の心に染み込んでいく

心を満たしていく

ああこれが仲間なんだな…って思う

俺には今まで無かったもの

信用はしていた。けどどこかで信頼はしていなかった

また俺のせいで誰かが悲しむ。それを見たくなかった

これが仮初の気持ちだとしてみてもいい

俺が犯した罪は変えられない

ならそれを償うために俺は生きていく

例え偽善何て言われようとも俺は屈しない

でも…もしダメになったらどうしようか…

そうだ…彼らにならないだろうか

少しでも頼っていいのだろうか

そんなもの端から決まってる

「ああ俺にはこんなにも信頼できる人達がいたんだな」

そう言つて俺はオレから主導権を奪うために戦いに戻った

俺が目覚ますとそこはさつきまでと同じ場所だった

高層のビルが立ち並ぶ街。ここは俺の心象セカイだつて理解した

そして目の前には肩に斬月を担いだオレがいた

「よお。悪いが俺の勝ちだ」

そう言つて俺はオレのことを斬月で斬った

「ツチ…まあいい。だがな！よく覚えとけ！オレはいつかお前を殺し

て王になってやる！覚えとけよ翔！」

「ああ、分かってるよ斬月」

そう言つて俺の視界を光が包んでいった

俺が目覚まし、上半身だけ起こし辺りを見渡すとみんながいた

「(こ)は…」

「翔さん！」

そんな俺を見てシノアが抱きついてきて俺の胸に顔を踞ってきた

「お、おい!?!」

「し、心配したんですから…」

「…ああ。心配かけて悪かったシノア」

そんなシノアの頭を俺は撫でやった

俺達がピンク色の雰囲気醸し出しているとゴホンと咳払いをする音がしたからそつちを見てみるとグレンがいた

「やつと戻ってきたな翔。にしても…迷惑かけすぎだボケエ！」

と俺の頭にグレンの踵落としが綺麗に決まった

それを見ていた奴らはまあ自業自得だなんて顔をしていた気がした

その後鬼が起こした一連の事を聞いた俺は本当に頭が上がりなかつた

「まあとりあえずこれでやつと全員無事に帰ってきたな」

俺の方をチラツと見るのやめてくれないかな優…結構精神的にくる…

「そうだな。一人はかなり時間かかったが」

グサツ！

「僕なんて本当に死ぬかもしれなかつたし」

グサツ！グサツ！

「いやいやと与一さん。私なんて二回も刀が振り下ろされたんですよ？」

グサツ！グサツ！グサツ！

「まあとりあえず翔のせいで迷惑を被った訳だ」

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

なんだろみんなの一言一言が俺の心に突き刺さるのだが…

もう俺のHPゼロだからもうやめて…

「まあいい。んじや鬼呪装備ま手に入れ、少しは翔がない内にチームワークっぽいこともできたからそろそろ前線出てみつかう」

「前線!？」

「ああ」

「えええ…い…いきなり実戦なの？」

「ちよつと休みとかないのかよ？」

「…あはは」

「こいつこそホンモノの鬼や…」

こうして、長い長い本当に長かった一日が終わり新しい一日《戦い》が始まろうとしていた

9話〜三葉のチーム〜

あれかは俺達は本格的に吸血鬼殲滅部隊に配属されることになった。着る服も今までの学校の制服ではなく、月鬼ノ組の制服になる俺は前世で高校の制服を初めて着る時のことを思い出していた

「(そういえば、あの時は高校がどんなものか楽しみにしてたなあ。アイツも一緒に)」

昔のことを考えながら、俺は準備を整え、最後に斬月を背負って部屋を出た

外に出るとシノアと優が先に待っていた

そんな2人に俺は一言詫びを入れながら、向かう

「おはよう2人とも」

「おはよう翔」

「おはようございます翔さん」

「遅れちまつて悪いな」

「いえいえ。優さんも今来たところでしたし。それよりお2人共制服が似合っていますねえ」

シノアが俺ら2人を見ながらそんなことを言ってくる

「ん？そうか？」

優が自分を見ながら言う

「似合ってると思うぞ。それにシノアも」

「へ？」

シノアがマヌケな顔で聞き返してきたので素直に答えた

「だからシノアの制服姿も可愛いと思うぞ？」

それを聞いたシノアが頬を赤く染めて俯いちゃまった

「どうした？熱でもあんのか？」

俯いたシノアの顔を覗こ見込むように見るとシノアが慌て始めた

「だ、大丈夫です！さ、さあ行きましようか！（ビックリしたー！！翔さんの顔が目の前にあった…！）」

そう言う就先に歩いて行ってしまった

「アイツホントに大丈夫か？」

「あれは翔のせいだな」

「は？何でだよ」

ため息を吐きながら、優もシノアを追うために歩き始めた。そんな優たちを追いかけるように俺もその場を後にした

俺達がシノアに追いついて3人で歩いていると、さっきからシノアがチラチラ見てくる。んで、こつちがシノアの方を見るとそつぽを向くようにしてあんまり目を合わせてくれない

「お前ら人を挟んで何してんだよ」

俺とシノアの間にいる優が不安そうに言う

「な、何でもないですよ！それより説明しますね。今日から学校には行きません。関西方面の吸血鬼達が新宿奪還を目論んでいるようです。ですからこの渋谷を出て・・・」

「新宿に行くんだな」

その会話に優はやつとかという顔を見せる

「新宿行きや吸血鬼殺せるってことだな」

「あまり最初から血を求めないでください。戦闘になる前に新宿の守りを固めることで・・・って聞いてます？」

優は正直に聞いてませくんと言う

「シノア、じゃあもう城壁の外に出んのか？」

城壁の向こうでは、吸血鬼はもちろんヨハネの四騎士もうろついている。そんな外の世界に俺らは出ようとしているのだ

「そうです。誰も守ってくれない。魑魅魍魎ちみもうりようが跋扈ばっこする壁の外へ行きませよ〜」

それなりに歩いたと思っていたが、それでも遠くに見える城壁を指して俺たちは三人で歩いていく。少しして城壁の前までつくとその城壁は近くで見ると思ったより大きく、前世にあったビル並みに高かった

その城壁にある外の世界とつながる扉の前には数名の兵士がいた。俗に言う監視兵つてやつだ（そのまんま）

その人達にシノアは声をかける

「吸血鬼殲滅部隊―月鬼ノ組です。吸血鬼退治に外へ出ます。開けてください」

数人の軍人はシノアの言葉を聞いてヒソヒソとそれぞれ話をしていく。その中にはあんな、ガキが?とかこんな、チビ共、が月鬼ノ組?なんてのも聞こえてきた

「ガキって言われてますよ優さん」

「お前のことだろ、チビだし」

その優の言葉を聞いてシノアはない胸を張って言う

「翔さん今失礼なこと考えてませんでした?」

「いえ、滅相もない」

シノアが笑顔（黒い）で言ってきたので目を逸らして答える

「まあいいです。それに私はまだ成長中ですから、なにせ姉の真昼は胸がぼーんの美少女でしたからね」

そんな自信満々のシノアに突っ込むことなく優が聞く

「へえおまえ姉貴いんの?」

「もう死にましたが」

そんな会話の中でゴゴゴツと音をたてながらゆっくり扉は開いていく。優は申し訳なさそうな顔をしてシノアに謝るがシノアは気にしていないようだ

「こんな醜く荒廃した世界で大切な人を亡くしてない人なんてもういないでしょう?」

「……」

シノアの言葉で優が思い出したのは守る事が出来なかったミカや家族の事だろう。もちろん、俺も思い出している。だがそれと一緒に前世で一緒にいた一番大切な人のことを思い出していた

「グレン中佐!!あたしは納得いきません!!」

昔の事を思い出しているとそんな大声が俺達を現実に取り戻す。俺と優はその声ができる方を一緒にみる

「んあ、なんだあ?」

そこには、与一、君月、怪訝そうな顔をしたグレン。そして見知ら

ぬ女子の4人がいた

その女子は髪が金髪で高い位置に二つくくりをしている

さっきの大声はこの女子が出したんだと思う

「なんであたしが新人ばかりの部隊に配属されるんですか!?!13の時から殲滅部隊にいるエリートですよ!!」

またその女子は声を張り上げる

グレンも困ったような顔をしていた

「あの金髪、新メンバーか?」

「そうみたいです。月鬼ノ組の最小部隊は5人で構成されますが・・・私たちは6人みたいです」

俺の質問にシノアが答える

とりあえず4人の方へ行くと与一が気付いて手を降ってくる

「あつ優くん!翔くん!」

「遅えよ馬鹿優」

「誰が馬鹿優だ」

「おはよう、与一、君月」

そんな挨拶を済ませた後俺は先に来ていた二人に聞く

「あれ誰?」

「三宮 三葉さんっていうらしいんだけど・・・」

その三宮という女子の方を見る。彼女はいまだにグレンに色々と言句を言っている

じつとその光景を見てみるとグレンがこちらに気づいたようですよと口を開いた

「ああ揃ったな。じゃ今からおまえらに命令を・・・」

「現れたな!終シノア!」

シノアは怒っている三宮に笑顔で答える

「はい、私が現れましたよ。みつちゃん」

「おいシノア喧嘩すんなよ。三葉はこれからお前の分隊に入れるんだからな」

「もちろん大丈夫ですよ中佐。私は大人なので実力のない負け犬の遠吠えなどひらりふわりとかわしてみせます」

グレンの言葉にシノアは三宮を弄りながら答える

流星にそれは言い過ぎじゃないか、なんて考えていると怒った三宮が自分の斧型の鬼呪装備を出していた

「ぶつとばす!!」

「あはは〜」

そんな三宮にシノアも鬼呪装備を出してこたえる

ギインツ刃と刃が重なり合う音が響く。この状況を見てグレンは頭を抱えながら溜息をつき剣をぬく。そして二人の戦闘喧嘩のなかに入り止める。そのまま、二人の首を手で掴む

「逆らうなよ。これ以上上官の俺に面倒掛けんなら独房に入れんぞ」

「ありやりや」

「う…すいません」

二人はやつと反省のいろをみせる

グレンから開放されたシノアに聞く

「シノア、三宮と仲悪いのか?」

「いえいえ、むしろ仲はいいですよ。月鬼ノ組にいる同年代の女の子って少ないですし」

まあ喧嘩するほど仲良いつて言うしな

にしても、シノアは本当に人を弄ったりからかったりするのがうまいなあと心の底から思う

「じゃお前ら、こいつが新しい仲間となる三宮 三葉だ。覚えとけよ。月鬼ノ組は基本5人一チームで動く。五人以下で武装した吸血鬼とぶつかるのと殺される可能性があるからな。この城壁を出た瞬間からどんな状況でも決して仲間割れや単独行動は許さない、いいか?」

グレンの言葉に優はまた協調性がないことを言おうとするが三宮がその前に優に蹴りを入れる

「何すんだよ」

「ふうん、反応はいいな。だがあたしはお前のような馬鹿が一番嫌いだ。お前のような奴が部隊を危険にさらす」

その言葉には何処か重く感じさせるものがあつた。彼女にも何かあつたのだろう

「グレン中佐、分かりました。私がこの問題児達を教育すればいいんですね？」

グレンに三宮が笑顔を浮かべながら聞くと

「いやお前もシノアも十分問題児だぞ？」

グレンが真面目な顔しながら言う。それに反発するかのようになた三宮がグレンに食ってかかる

「んな?!わ、私のどこが問題児ですか…!!」

「何かめんどくさい奴しかいねーな、おい」

君月がグレンと三宮を見ながら言う。それに与一が笑顔で言う

「君月君がそう思うならもうそれは本格的だね」

「……なんつった？」

「あはは、なんでもありません」

そんな俺らにグレンが言う

「とにかく、ここにいる奴らがお前らの仲間だ。仲間は家族以上の存在だ。命懸けで守れ。んじやこのチームに初任務を与える」

グレンのその言葉に俺はもう一度決意する

きつと、仲間を守ってみせると…俺の魂に誓って！

そして俺たちに任務が伝えられた

10話〈初任務〉

グレンからの初任務はこういう内容だ

原宿には吸血鬼が人間狩りをして家畜化している集落があるから、原宿に行つてその集落を潰して人間を解放する。そして新宿に向かう、というとても簡単なものだった

その原宿にいくため俺たちは歩いてきた

城壁から外に出るとそこには倒れたビル。ひび割れたり穴のあいている道路。昔の賑やかさを思い出させないほどの静かで壊れた世界。俺にとっては前世での記憶のせいで何とも言えない光景だった。こんな世界を見て与一は言う

「本当に世界つて滅亡したんだ。僕帝鬼軍が渋谷に保護してくれてから外に出るの初めてだけど、ここまでは…優くんとか君月くんと翔くんは普通科来る前は渋谷警備兵として外出してたんだよね?」

俺は与一に向つて頷く

その時、

「はっ！結界が掛かった城壁周辺の弱いヨハネの四騎士を殺した程度でいい気になつてもらつては困るな。そもそも……」

と自信満々にそしてなぜか嬉しそうに言ってくる三宮

そんな彼女の長い長い説明はまだまだ続いた。まあ、俺はほとんど聞いていなかったが……

「シノア、あれっていつものことなのか?」

「あは、すつごく可愛いでしょう?何気に彼女新人の命を任されて責任感じてるんですよ」

いるよな、たまにこういうやつ。というように俺は溜息をついた

そして、しばらく歩いていくと原宿駅につく

「……任務地だな」

「つまりここに吸血鬼が……」

と、君月と優がそれぞれ言った瞬間きやあああ!!という悲鳴が聞こえた。そしてその悲鳴とともに現れたのは一人の少女

「助けてえ!!?」

その少女の後ろからヨハネの四騎士が出てきて、少女を襲おうとしていた

それを見てすぐさま優は助けに行こうとするがそれを三宮に止められる

「動くな馬鹿!! 隊列を崩すな!!」

「ああ!?! なんだよそれ!!」

「優、これはきつと罠だ」

苛ついている優に俺はそう声をかける

「ああ!?! なんでんなこと分かる!?!」

その優の質問には俺ではなくシノアが答えた

「簡単ですよ。こんな世界で子供一人生きられるはずがない。あれは私たちを釣るための餌でしょう」

「餌!?! 冗談だろ!! 意志を持たないはずの、ヨハネの四騎士、が何故吸血鬼に従う!?!」

「君月、それは違う。正確には従ってはいねえ。吸血鬼に上手く使われているだけだ」

ヨハネは吸血鬼は襲わない。人間だけ襲うのだ。まるで増えすぎた人間を罰しているかのように。まあその生態はよく分からないが・・・

「バケモノの前に餌を放って襲わせ助けに来た人間を捕獲するー」。吸血鬼がよくやる手・・・」

「んなのどうでもいい!!?! じゃあどうすんだよ!?!」

優は必死に叫ぶ。優はもう誰も失いたくないのだろう。それも自分の目の前で：彼は目の前の人を助けるために、あのような事が起こらないようにするために戦っているのだから。

「だから：待機だ。敵の出方を：」

三宮も耐えている。我慢している。みな同じなのだ、結局。誰が目の前の少女を見捨てると言うのだろうか。助けたくないと言う奴なんでもこの場には誰一人としていないのだ。それはきつと優も分かっているはずだ

「ふぎげんなよてめえ!! ガキ一人救えなくて何が吸血鬼殲滅部隊だよ

!!!

ついに優がキレる。その少女のもとへ走って行こうとするが三宮がそれを止める。がそれを俺が止める

「じゃあ、優。助けに行くぞ、俺たち二人で」

「ふざけるな!!」

三宮が叫ぶ。だが俺はその言葉を無視してヨハネに向って走る。例え、罨だとしてもそれがどうしたっていうんだ。それならその罨さえも壊してしまえばいいだけの話だ

「優はあの女の子頼む」

「分かってる!!」

俺は一瞬でヨハネとの距離を詰め斬月をしっかり握り斬り伏せた俺がヨハネを倒したのは本当に一瞬だった。そしてヨハネが倒れた時優も少女を無事助けていた

喜んだのもつかの間、優の頭上から吸血鬼が現れる。その数は三体。それも貴族ではなく普通の一般吸血鬼だ。それでも遥かに人間より強いのだが

その吸血鬼達は優を囲い込むようにして降りると、すぐ優に斬りかかる。さすがの優でも同時に三体は厳しいらしくとても苦戦している

「ぐ…!!?力を貸せ!!?阿朱羅丸!!?」

優の声が聞こえたかと思うと黒い何か吸血鬼を阻む

「…!!なんだこいつ」

吸血鬼もこれには驚いたらしい

でも、吸血鬼は更に驚くこととなる

「おい。こつちにもいるぜ?」

俺は吸血鬼の後ろにまわりこみ、そこから攻撃を仕掛ける。吸血鬼は声をかけてやっと気付いたみたいだがそれでは遅い。俺は吸血鬼を肩に担いでいた斬月で一刀両断にして、殺した

「この強さ。なるほどおまえら…吸血鬼殲滅部隊か…!」

一人の吸血鬼が驚いた顔で言う

そしてもう一人の吸血鬼が応援を呼ぶように促した

だがそんなことはさせない

「させると思ってるのか？」

俺は二体の吸血鬼に向かって斬月を振り下ろし、剣圧で吹き飛ばす。その様子を見てかチャンスだと思っただろう三宮が、大声でいう

「そこまでだ優、翔。全力撤退!!」

だがその言葉に吸血鬼は笑う

「…は、家畜が…逃がすわけが…」

「あ?てめえ今なんつった?」

家畜という言葉に反応した優が吸血鬼達を睨む。吸血鬼もその目にビクツと畏怖している

「優さん!ここは敵陣です!応援を呼ばれる前に…」

今にも吸血鬼を攻撃しそうな優だがシノアの言葉にその怒りを鎮める

「…分かってるよ。仲間の命が最優先だ」

そして吸血鬼達は一旦引いていった

渋谷拠点監視哨

パンツ、そんな音が響く

優と俺がビンタされた音だ。帰って早々に俺たちは三宮に叩かれた。それは身勝手な事をしたからだってわかってる

「いったいどういふつもりだ!!おまえらの行動が部隊を危険にさらしたんだぞ!!」

「ああ、そうだな。でも俺たちは後悔はしてないし、反省もしてねえ」
「…子供は救う必要があった。だからどんな状況でも俺たちは同じ行動をした。でも悪かったとは思っている。仲間の命を危険にさらした。殴って気がすむなら、いくらでも殴っていいぞ」

俺も優と同じ意見だ。守る力があるのに守れないのは辛いから…
もう二度と目の前で大切なもんを失いたくねえ

それでも三宮はまだ怒っているようだ。

「おまえらは…わたしはおまえらのような奴が一番嫌いだ。おまえらのような奴が部隊を全滅させるんだ。」

その言葉に重いものを感じる。前と同じような感じ…やはり何かあったのだろうか？だから彼女はこんなにも仲間を守るのに必死なのだろう。

「…悪かったな。以後気をつけるよ」

「……」

「あの…お兄ちゃんたち…」

不意に聞こえた声は俺たちが助けた少女のものだった。

その少女は笑顔で言う。

「あ、あの…命を助けてくれてありがとう！」

その笑顔に少なくとも俺は救われたような気がした。

「気にすんな。やるべきことをしただけだ」

優はその少女に笑いながら言う。三宮は少女に歩みよりスツと座り少女の手を握る。

「もう大丈夫だからね。これからは日本帝鬼軍があなたを守るから！」

「(そんな顔もすんだな)」

三宮は今までに見せたことのない優しい笑顔で話掛けていた。様子を見ていたらシノアがムツとして少し機嫌が悪いように言ってきた

「そんなにみつちゃんを見ていて楽しいですか？」

「いや別に楽しいわけじゃねえけど…意外にもあんな顔で笑うんだなあって思っただけだよ」

思っただけを正直に言うシノアはふーんと何か言いたげな顔で見てきた

「なんだよ？」

「いえ、別に何でもありません」

そして、少女が歩いていくと俺たちはバイバイと手を振る。少女が見えなくなった直後に三宮は後ろに振り向き俺たちに指を指し大声

でいつてきた

「だがお前らは嫌いだ!!」

「えー」

そして三宮は何処かに行ってしまった。彼女は案外弄りがいがありそうだ。これからは行動をともしめるのだ、どうやって仲良くなるか。などと考えているとシノアが俺たちに話掛けてくる

「まああれです。ああ見えて三葉ちゃんにも過去が色々あるので、優しくしてあげてくださいねえ」

「やっぱりか」

「おや、翔さんは気付いていたんですか。まあそれはそれとして敵に此方の存在がバレてしまったんですが、どう原宿を攻略しましょうかねえ?」

それもそうだ。もう不意打ちなんかは出来ないだろう。まあ大丈夫か、こつちには黒鬼シリーズが4人はいるんだ。気をぬかなければなんなく勝てるだろう

そして俺は歩いていく三宮の背中を見る

「(もう俺の目の前で大切な人を失わねえ…!)」

11話く突入く

あの後、女子組とは別れてシャワーを手短に済ませて、女子組を待っていると女子のシャワー室の方からきやあああああ！という叫び声。全くなにやつてるんだか

「・・・たく女どもシャワー長えな。いったいなにやつてんだ？」

優も同じことを思ったらしい

シノアのことだ。またふざけてるに違いない

俺は手に持っていた牛乳をゴクつと飲む

でもやつぱり牛乳は苦手だ：

「・・・で少しだけ君に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

君月が件の少女に話しかけている声が聞こえたため少女の方を向く

少し顔が強張っているように見える少女はコクンと頷いていた

「君月、怖がられてじゃねーか」

「うつせえよ、翔。後お前だけには言われたくない」

「ああ？」

そんな会話に少女の顔が緩む

少しは笑顔にすることが出来たみたいだ

「やつと笑ったな」

「え？」

キョトンとした顔をする少女

「さつきまで助けてもらったのに悲しそうな顔してたからな。やつと笑ってくれて良かった」

俺が微笑むと少女は俯きながらはい・・・と言うだけだった

「それに答えなくなかったら答えなくていいからな。嫌だったきちんと、「大丈夫です。助けてもらったお礼をしたいので」

そう言った少女に優が優しく声を掛ける

「礼はいいって、そういうの気にすんな。これからおまえが毎日笑って元気に生きてくれりやそれで・・・」

ボタンツ優の言葉を遮るようにして扉の開く音が聞こえる。そこ

から出てきたのはシノアと三宮だった

そして、三宮は優を見るとちつと舌打ちをする

「えー」

「(優、嫌われすぎだろ。それともシノアが余計な事言ったなこりやあ)」

思い出して見ると三宮は優を見た時少し顔が赤かった気がした

「シノア、三宮に何か言ったのか？」

シノアはさあくと言って笑うだけだった

翌日 表参道地下鉄入口付近

チュンチュンという鳥の鳴き声に耳をすませながら目をつむる

朝日が眩しいなあ

とそんな感想は置いて、今から任務だ

「えー、優さんが救出した少女によると、どうやら吸血鬼たちは原宿から1キロの表参道地下鉄跡地に潜んで人間を飼っていることがわかりました。吸血鬼の数は7人我々より多いですね。なので吸血鬼が眠りについていて早朝から昼にかけて奇襲攻撃を行います」

シノアが言い終わると君月が手を挙げる

「はい君月くん」

「捕らえられている民間人はどうする？人質に取られたりしないのか？」

その質問には三宮が答えた

「人質は無視だ。敵の方が数が多い。誰かの心配ができるほど、あたしたちに余裕はない」

優は何か言いたそうな顔をしている。それを見て三宮が続ける

「なんだその顔は、不服なら渋谷に帰っていいぞ」

「誰が不服だった？俺は吸血鬼が殺せんならそれで・・・」

いい。とは続かなかった。優の言葉をシノアが遮った

「吸血鬼七人全員武装した状態で起きていた場合は絶対に勝てませんので、やはり逃げます」

流石にそれには、あ？と声をあげる優。そんな声を無視してシノア

は続ける

「正直 黒鬼シリーズを使えるあなた方は強いのでなんとかなる可能性もありますが・・・どうせやるなら無傷で敵を皆殺しにしたい。なので、独断専行は・・・」

「しねえよ。無傷で奴らを皆殺し・・・いいじゃねえか」

やはり前向きな優に俺は少し笑う

「では行きましょうか。陣形を崩さず互いを守り、絶対にはぐれないようにいいですか？」

その言葉にそれぞれ返事をする

「では、吸血鬼を皆殺しにしましょ」

おーと一人シノアは言うが俺たちは誰もおー、と言ってあげなかった

理由は単純明解だ。単に恥ずかしいのだ

そんなグタグタなまま俺たちは任務を開始した

〈駅内部〉

階段を降りるとそこには沢山の人間がいた

だが人間がいるだけで吸血鬼は一人として見当たらない

「どうなってる？吸血鬼がいないのに、こいつらなんで逃げずにここにいる？」

「考えてみる君月。逃げたとしても外にはヨハネがウロウロしてやがる・・・ならここにいる方が安全ってことだろ」

俺はまた人間が沢山いる方を見る

「(あの服・・・俺達が昔着てた服だ)」

「無視しろ！進むぞ！吸血鬼がいるというB3フロアまで一気にすすむ！」

三宮の声が聞こえ、急いでその後を追う

B3フロアに着くとそこにも沢山の人間がいた。ほとんどの人が座っており、元気がない。これでは生きながらに死んでいる、要は生き地獄のように見えた

周りを見渡すと柱の向こうに一体の吸血鬼が見えた

その吸血鬼もこちらに気付く

「総員攻撃準備!!」

その声を合図にして全員鬼呪装備を出す

「やるぞ、斬月」

俺も斬月を包帯のように巻かれている鞆から解き放ち、構える

「仲間を呼ばれる前に・・・」

三宮が言い終わる前に優は走り出す

そしてそのまま突っ込んでいき吸血鬼の心臓部分に刺突し殺した

「ガア、この家畜が・・・!!」

「はは、その家畜に殺される気分はどうだバケモノ」

その優の行動に三宮が怒る

「この馬鹿が・・・あれほど独断専行はするなと・・・!!」

「独断専行じゃねえ。敵は非武装だった。抜刀の命令も待った・・・」

優が色々言っている中で三宮の後ろから吸血鬼が迫ってくるのが

見えた。当然、三宮は気付いていない

俺はそのまま走り出す。この距離なら間に合うだろう

そして吸血鬼が三宮に剣を振り下ろす瞬間その吸血鬼は消滅した

「な・・・なんだ!?!」

まだ自分が殺されかけたことに気付いてない三宮

別に俺がやらなくても優がやっただろうけどな

「やーやー、グレン中佐の秘蔵っ子ですから強いってのは分かってま

したが、まさかこれほどとは」

シノアがパチパチと手を叩きながら褒める

「すごいよ、二人とも!」

「俺よりは弱えけどな」

一人、喧嘩を売っている奴もいるが・・・気にしないでおこう。構っ

てたらキリがねえ

「よし、おまえら浮かれるな。まだ敵は4人い・・・」

ガシャーンと音を立てながら三宮の後ろにある窓ガラスが割れる。

現れたのは吸血鬼だった

「3...4...7人!?!」

「……どういうことだ。情報と数が合わない……」

情報通りにいくと、後4人のはずだった。吸血鬼が応援を呼んだ？

いや違う。ならば……

「情報が嘘だったわけか……」

俺の呟きに吸血鬼の1人がニヤツと笑い言った

「そうだ。誰が出したかわからん情報を宛にするとは滑稽だな人間共」

その吸血鬼の言葉に怒りを感じる

「(こいつら……子供を脅して嘘の情報を!!絶対に許さねえ……!)」

「ふふ、人間は醜いよなあ。家族や仲間を人質にされたら平気で同族を売る。さて、動くな人間。仲間を殺されたくなければおとなしく……」

「くそ!!?あたしはもう終わりだ!!?見捨てて早く逃げ……」

三宮が叫ぶ。仲間思いな彼女らしい言葉だった

だからこそ俺は見捨てられなかった。否見捨てたくなかった

「うるせえ!!俺はもう二度と仲間を殺させねえ!!そう俺の魂に誓ったんだ!!今すぐお前を助けるから待ってろ!!」

そう言っただけ俺は誰にもわからないだろう速さで三宮を掴んでいる吸血鬼の後ろへ行く

「なっ……!」

三宮は俺の行動を見て、驚きの声を上げる

そして俺は無言で吸血鬼を殺した

誰もが言葉を呑み込む。あまりにも速すぎたからだろう。吸血鬼でさえも固まっている

「怪我はねえみてえだな。ほら」

座っている三宮に手を差し伸べる。その手を三宮はとり立ち上がった

優は三宮が無事なことを確認すると怒りを隠さず、吸血鬼に向って睨み言った

「人間は醜い?家族を人質に取られたら平気で同族を売るクズだつて?そりゃよくご存知で……そうだよ家族のためなら人間は何でもす

る。平気で嘘をつくし鬼にでも悪魔にでもなる。それを醜いつてんなら・・・その人間の醜さに怯えながら死ね、ヴァンパイア」

そう言う優を見て俺は溜息が出てしまった

「優の奴め・・・いいところ取りしやがって」

「たく・・・めんどくせー奴が仲間だなあ。ま・・・やるか六対五だが、このメンバーなら」

「やれるでしょう。どうやら二級武装の吸血鬼しかいないようですし・・・」

そして陣形をつくりそれぞれ武器をかまえる

「行くぞ、吸血鬼を殲滅する」

こうして第二幕の戦いに火蓋がきられた

く地下鉄入口付近く

無事、任務を終え地下鉄を出る

ほとんど無傷で終えることができた。誰も目立った外傷はない。外傷は・・・だが、さつきから身体がズキズキするように痛い。きつとさつきの瞬歩に身体が悲鳴をあげているのだろう。あんなの、なんの代償もなしにだせるはずもないのだ。これから慣れていかないとな、と思いながら歩いていると一人の少女が俺たちに向って走ってくる

「ごめんなさい・・・私・・・私」

泣きながら謝ってくる少女。その少女に俺は歩みよる

「大丈夫だ。お前は家族を守ろうとしたんだ。だから悪くない」

そう慰めてやると少女も落ち着いたようだ

しばらく少女と話しているとシノア達がいる方から怒鳴り声が聞こえてきた

「なんで吸血鬼を殺した!?!あいつらがいなくなったら俺らは・・・子供たちはどうなる!?!」

どうやらその声の主は吸血鬼を殺した事に怒っているようだ。その男性はなおも続けて声を張り上げる

その男性の言葉を聞いて優が俺は・・・、と声を出す

「俺は子供の頃……ずっと吸血鬼の都市にいた。残飯食わされて毎日、毎日血を抜かれて……それでも自分は家畜じゃないと言い続けて生きてきた。そしてある日、脱出を企てた。そのせいで仲間みんな死んだ。……いや自分が逃げ切るために見捨てた」

「優……」

「今はそれを後悔してる。俺もあの日一緒に死ねばよかつたって、そう思うこともある。だけど、それでも……それでもあの日家畜をやめようと決めたのを後悔したことは一度もない」

「(優……ホントにごめん……)」

俺があの時無理にでも止めていれば変わっていたのかもしれない。いや俺も自分の事しか考えていなかったんだろうな……

俺の力があればなんとかなると思ってた。要は自惚れてたんだ。本当に情けないの一言に尽きる

この事を顔に出さないように作りものの笑顔でその場を見つめる。その場を立ち去ろうとするが身体中の痛みで思うように動かない

「(たった1回の瞬歩でこのざまか……)」

「翔さん、大丈夫ですか？肩を貸します」

「ありがと、シノア。助かる」

そしてシノアの肩を借りて歩き始めようとすると後ろから声をかけられる

「翔！そ……その……さつきはありが……い……いやなんでもない」

「そこまで来たら気になるから言ってくれ」

「な……なんでもない。とにかくあたしはお前と優が嫌いだ!!」

突然、そんなことを言われる。近くにいた優も、俺も!?と驚いている。そして、

「「また、それがよく」」

と二人して声を挙げた

12話 襲撃

「こつちに来んなよ、人殺し」

「近づくな、犯罪者」

「何でお前なんか生きてんだよ。早く死ねよ」

俺が前世でさんざん言われてきて来たことだ。別におかしなことはない。言われてもおかしくないことしたから

それ相応の罰は受けなくちゃいけない

あいつは俺が殺したも同然なんだから

そしてそれが俺の背負うべき業なのだから・・・

く東京 表参道く

「おい、まじでおまえこの車動かせるのかよ？まじのまじ？おまえすげえな」

「・・・うるさいぞ、おまえ」

車を見つけたため移動手段として車を使おうとなったのだが・・・壊れていたため、今は君月が直している最中だ

俺も昔に車に乗っていたから、運転は出来るけど、直すのはちよつとな・・・

それを見てか、あの優が君月に対して称賛の声を送っている

「いや、でも俺・・・子供の頃しか車乗ったことがねえからさあ。吸血鬼の都市は車なかったし、渋谷じゃガソリンが貴重だつて車なんかほとんど・・・」

優が言っている間も君月は黙々と作業を進めていく

丁度その時車が動く。どうやら直ったみたいだ

「お、直ったか。いけそうか？」

「ああ、問題ない」

優はどことなくワクワクした顔をしている

「つてか、あれかな？あの、俺もちよつと運転していいのかな？」

「はあ？その様子じゃおまえ運転出来ないだろ」

「いやでもさ、ちよつとだけならさ・・・」

「とにかく触るな。あとでちよつとなら運転教えてやるから」

その言葉にさらに優は目を輝かせる

「お前、運転も出来んのかよ！まじですげえな!!」

本当にこういう時だけ素直な優

ふと君月の方を見てみると・・・やっぱり照れてる。顔を少しばかり赤くしていた。本人もまさかこんなにも褒められるとは思ってなかったんだろうな

「い・・・いいからガキは後部座席に乗ってろ」

俺と君月は歩いてすぐそこでお茶しているシノア達に近づく

「動いたぞ。これで新宿はすぐだ」

「おおー本当に動いたんですか？君月くん、車泥棒は犯罪ですよ？」

「うるせえシノア。早く乗れよ」

「あ、後ろ」

与一が俺らの後ろを指さして言う

後ろを見てみると車が大きな岩にぶつかっているところだった。

そしてその車はバックしてまた反対側にあつた岩にぶつかる

「おまえ、何やっ・・・て!」

「優!？」

「うおお!!」

その車はこつちに向って走ってきたためそれには流石に驚き君月と逃げる

「てめえ、ぶつ殺すぞ!!？」

「優!!てめえ!!」

優は車から降りて自信満々な顔をして言ってくる

「いや、もう慣れてきた。乗れよ！俺が新宿連れてってやる!」

ビキツ・・・

隣にいる君月のキレる音が聞こえた気がした

そして二人は喧嘩を始める

そしてそれを止めるために俺もその喧嘩に参入する

「馬鹿やってないで、行くぞ。原宿での任務が終わったらすぐに新宿に会いと言われてるんだ。さっさと行かないと・・・」

「じゃー、シノア号かな乗ってさっさと新宿へ行きますか」

シノアが車に向って歩き出す

「みなさん、早く乗ってください。・・・あれ？」

流石にシノアの身長じゃあ車は高すぎたみたいだ

そのシノアの様子に俺、優、君月は喧嘩をやめてシノアの方を見ていたかと思うとハハハハ！と大声で笑いはじめる

「おまえの身長じゃ、無理だろー！」

「シノア、背小っちゃー！」

「ペダルに足届いてねえし!!」

と言いながら。そして俺達は笑ったことを後悔してしまう

「あつはあ、なるほど・・・とりあえず今笑った人は死刑にしましょう」

「「え」」

そしてシノアは鬼呪装備を出して：こちら向って攻撃してくる

「「うわああああ!!」」

「車内」

車の上中で揺れながら俺は思う。

なんでこんなことになったんだ。と

人数的に五人が限界だった為、シノアが俺の膝の上に乗ってます、

はい

そのシノアはと言うと、ものすごく嬉しそうです。終いには鼻歌もしてる

前の席では俺と同様にボロボロな二人の姿がある

「もう・・・シノアを身長でからかうのはやめよう」

「ああ、そうだな」

「次こそ命がなくなる・・・」

隣から視線を感じて、そちらを見ると三宮がジイっとこちらを見ていた

「なんだよ三宮?」

「別に何でもない!」

そう言い、プイッとそっぽを向いてしまった

「ほんとなんなんだよ…」

しばらくして外から、ドゴン：ドゴオオン：と音が聞こえてくる。
「?なんだ?」

「音は新宿の方から聞こえているみたいだよ」

その俺の言葉にみんなの顔に緊張感が走る

「みなさん、とりあえず臨戦態勢で・・・あらゆる状況に対応できるようにしてください」

「次の角を曲がったら、新宿の防衛壁が見えるはずだ。：曲がるぞ」

車が曲がる。そして見えたものはあちこちから煙が上がっている
そんな光景だった

「あれは…新宿が襲われてる…!!?」

「うわっ!!」

キキキツと車のブレーキがかかる。俺たちの進む先には人影があった。よく見て見ると…

「(あれは…貴族の吸血鬼!!?)」

「あの服…吸血鬼の…貴族だ!!止まるな君月!!轢け!!」

優も気付き君月に轢くようにと声を出す

そして吸血鬼に近づいた瞬間に俺たちは車から出る

ドンツと音を立てて車は吸血鬼にぶつかるが…いやぶつかっては
いない。その吸血鬼は車を受け止めたのだ

そしてそれが合図だったかのように戦闘が始まった

まず与一が脱出したと同時に敵に矢を打ち込む。完璧なタイミン
グだったのにもかかわらずその全ての矢が撃ち落とされた

そして今度は吸血鬼が与一に向かって剣を振るう

与一は動けない状態だ。しかし、与一の前に三宮とシノアが立ちそ
の斬撃を受け止めた。しかしそれでもギリギリだったようだ

「みなさん独断で動かないで!!?相手は一級武装した吸血鬼です!!?

今までとは…!!」

シノアが言っている間にその吸血鬼はシノアの後ろにまわっている

「させるか!!」

吸血鬼の振るう剣を俺は上手く弾き、そこに優が飛び込んできて、吸血鬼の腕を斬り落とした

そして吸血鬼は距離を置く

「おっと…人間のわりにはやるねえ、君達何者なのかな」

「生憎ただの人間だ」

「前衛に早々に殺されない翔さん、優さん、君月さん。それを私達がサポートしながら吸血鬼を殺します。幸い一人だけなら…」

シノアが俺らに概ねな陣形を話していると新たに吸血鬼が二体増えた。一人はボブな感じの髪をしている吸血鬼。もう一人はクルクルに毛先を巻いている吸血鬼

「な!?!」

「どうする撤退するか?」

「逃げられるならそうしたいですが…あのレベルが三人もいては無理でしょう」

「なら俺が殿をやる。その間に…」

「ふざけるな!お前まで失ったら俺は…」

「優。今は生き残ることが最優先だ」

「でも!!」

俺らが口論しているとボブの髪をした吸血鬼が言う

「こんなところでなにやってるんですかあ」

「前線で第七位始祖様がお呼びです。クローリー様」

「(前線?それに第七位始祖って…やっぱりフェリド・バートリーか…あんなんじや生きてるか…)」

「んー?フェリド君が私を?それはいかないとまずいねえ。ここもちよつと、面白くなってきたんだけどなあ。まっ、それは次の機会でもいいか」

クローリーと呼ばれた吸血鬼は俺の方をみて笑ってくる

「今回は見逃してあげるよ。でも次は、君の血を吸わせてもらうからね。」

「俺の血は不味いぞ。それでもいいなら来いよ。返り討ちにしてやるからよ。」

「あはは、それは僕が決めることだ。それにそんなことしたら貴重な家畜が減っちゃうだろ?」

気付くとクロリーは後ろにいる。俺はすぐに後ろを向きクロリーの手を避け、斬月で斬り掛かる

「この、速さについてきて、反撃もするか。まあいいか。じゃあねえ、かわいい家畜君たち」

そしてクロリー達、三人の吸血鬼はこの場から去っていった

「やった…助かった…」

「あの野郎…ふぎけんな!!余裕顔で馬鹿にしやがって…!!」

「くそ…、なんだよこれ、鬼呪装備使ってもこんなに力の差があんのかよ…?」

そんな優を見てシノアが声を掛けた

「今回はいい勉強になりました。死者も出なかった。優さんが自分から撤退を提案してくれたのも嬉しかったです。貴方はグレン中佐が言った通り仲間思いですね」

その言葉に照れる優

「それと翔さん。もうあんなこと言わないでください」

「…わかってる」

「そうだぞ翔！俺はお前がいなくなったらどうすればいいんだよ…」

「優…。悪かったな、考えなしに発言しちゃって」

「まあいいです。でも…お説教はしますので」

「は?!」

シノアに言われたその言葉に俺はこれからのことを思ってたため息をついた。そして

「よし、行くぞ！新宿を守るんだ」

俺たちは新宿にむかって足を進めた

13話く各自の思いく

クローリーから何とか生き延びた俺らは急いで新宿に向かった。まあその途中でシノアから走りながらのお説教を貰うことになると思わなかった

シノアにはサカライマセン

「やっ到着いた。新宿だ」

だがそれにしても酷い現状だった。先の吸血鬼（クローリー）が前線にいとすればもう戦争は始まっていると思っていたがこれはまずい状況にあった。人間側は対応が出来ていないために防戦一方である。でもそれが人と吸血鬼の差なんだと嫌でもわかるものだった
「まずいな…」

俺がボソツと呟くと警報を伝える放送が入った

「緊急警報！緊急警報！吸血鬼たちの襲撃がありました！！敵は西防御壁に攻撃を仕掛けています。民間人ご皆さんは東防御壁へ退避してください！！」

「一体どういうことだよ！新宿は日本帝鬼軍の第二都市だぞ！！吸血鬼が攻めてくることなんてあるのかよ！吸血鬼殲滅部隊は何してんだ！！」

周りの軍人たちは慌てながらも文句を言っていた

「どうなってる？」

「吸血鬼が予定より早く攻めてきたんだらうよ」

ドオン！とあちこちから爆発音が聞こえる。どうやら俺のせ予想は当たっていたみたいだ

更には空には数機のヘリコプター。アレに吸血鬼が乗っているのだらう。

だか数機の中の一機が弓によって撃ち落とされた。その弓は与一の使っている鬼呪装備にそっくりだった

「あれって僕と同じ鬼呪装…！」

「のダウングレード版です」

「鬼呪装備を簡略化した通常呪術装備だ。銃のような一般火器では吸

血鬼は殺せないからな…」

簡単に言えば吸血鬼を殺すために一般人が使えるようにカスタマイズした鬼呪装備の粗悪品みたいなものだろう

「こりやあひでえな…。マジで戦争じゃねえか…」

「だろうな。てかさっきの時点で気づけたろ」

俺の放った言葉に君月は睨んで聞いてきた

「どういう事だ翔」

「さっき遭遇したのは吸血鬼の貴族だ。貴族が普通に考えて帝鬼軍の第二都市である新宿周辺にいるか？答えは否だ。ならどうしてかなんて分かりきったことだ。戦争は始まっている、そしてそれに貴族が最低でも二人はいるってことだ」

「き、貴族が二人だと!？」

三宮が声を上げるのも分かる。他のみんなも驚き、いや恐怖に近い顔をしている

「ああ。これはあくまで推測だがもう一人は第七位始祖フェリド・バートリーだと思う」

「!？」

その言葉に優は驚きを隠せなかった

「フェ、フェリドだって?!」

「多分優が思ってるフェリドだと思う」

「な、なんであいつが生きてる!?!あの時確かに頭を!？」

「落ち着け優。俺だって信じたくない。だけどクローリーの隣いた金髪の吸血鬼が”呼んでいる”って言ったが微かに聞こえたんだ」

「聞こえた…?」

与一が放った言葉は全員が思っていたことみたいだ

「ああ。だけど今はそれよりも…」

俺が言いかけた時に連絡の放送が入った

「兵士のみなさんは西へ!!吸血鬼が大挙して押し寄せてきています!!渋谷本隊が合流するまで…なんとか防ぎきってくださいー!」

「ってことだ。シノアどうする?」

シノアに聞いた

「私たちは吸血鬼殲滅部隊ですよ？もちろん吸血鬼が出てきたのなら…」

「前線しかねーな」

そう言っただけ俺らは西に向かって走った

ある建物の屋上。グレンは一人吸血鬼の行動を観察していた

「おーおー、始まったな、本当に攻めてきやがった。んで…どーこが司令塔だ？」

吸血鬼の司令塔らしき人物を探す。そして、そいつはいた。車の上に立っている吸血鬼。他の吸血鬼と違ってかなり雰囲気違った。こちらはかなり遠くから道具を使って見ていたのだがその吸血鬼はこちらに気づいたみたいだ。一瞬だけ目が合った

「おーつと、やべえ。この距離で気づくのかよ」

「あの、グレン中佐。こんなところで悠長にしてる場合では…」

後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。そこにいたのは見慣れた女性であった。名は花依小百合。位は少尉でグレンの従者でもある
「ん〜別に悠長にしてるわけじゃなえけどな。新宿攻めんなら見張り塔がいるだろ。とすれば吸血鬼どもはここを狙ってくると思…、って言ってるそばから来たぞ小百合」

小百合の後ろには一人の吸血鬼。彼女はそれに気づいていない為にへ？、って顔をしている。そしてやっと気づいた時には遅かった。振り向いた時にはすでに吸血鬼は跡形もなく消えていた

「遅せえよ、美十」

真つ赤な髪を一括りにした女性、先の吸血鬼を殺した本人。名を十条美十。位は大佐。グレンとは高校の時からチームである

そんな彼女はグレンの方を見てため息をついて言った

「何が遅いよ。急に戦争するとか言い出してこんなところ呼んで…一体どういうことなの？」

そして美十のそばからスツともう一人現れた。今いるグレン達は気づけたが、並みの人だったら現れたのにも気付けないだろう。それほど上手く気配を殺して現れるその女性は小百合と同様グレンの従者である雪見時雨だ。位は少尉である

「グレン様ただ今参りました」

「なーんかすげえこと始まったみたいだなあ。どうすんだ？新宿の殲滅部隊はまるで対応できてないぞ、これ」

美十の後ろから現れたのは男性だった。名を五士典人。位は美十と同じ大佐である

グレンは四人が集まったことを確認して口を開いた

「よし俺のチームは全員揃ったな」

「はあ？なんで名門十条家の令嬢であるわたしがあんたなんかのチームに…」

「キーキーうるせえ」

「うるさくなあああいい!!」

美十はグレンの言葉に早くも怒り叫んでいる。それを五士が抑えている。まあ何とも戦争中の雰囲気ではない

そんな美十を無視してグレンは優達の監視させていた時雨の方を向く

「んで、時雨。優のチームはどうだ？」

「無事、吸血鬼の支配を解放して新宿に入りました」

その報告にグレンは驚いた

「へえ、早えな。じゃあこの戦争にも参加できるか？強くなるには実戦が一番だからなあ。死ななきゃ強くなる」

そして外の状況を見た。あちこちから爆発音や煙が上がり、元々ボロボロだった建物は原型をとどめているのが不思議なくらいにボロボロになっている

そんな光景を見て静かに告げた

「行くぞ、お前ら。司令塔は五丁目の交差点にいる吸血鬼どもだ。とりあえず頭を潰しや状況も変わんだろ」

そして司令塔を倒すべく、交差点に向けてグレンのチームは歩き出

した

「あはあく、これは見られてますねえ」

銀髪の吸血鬼フェリド・バートリーはある一点を見つめて言う

「……見られてる?」

そう聞いたのは金髪の吸血鬼。ほかの吸血鬼とは違う点があった。それは未だに赤目ではなく蒼目であること。

「いえいえ、こちらの話です。ところでミカ君、君は血を吸わなくていいんですか?」

彼が顔を上げると、人の血を飲んでいるたくさんの吸血鬼の姿が目につく

「……うるさい、お前には関係ない」

本当は今でも血を飲みたいという吸血鬼としての感情を抑えることで精一杯だが今はその衝動は収まっているようだ。まだ、我慢できないのだから

「でも、戦時中の今飲まないと吸血鬼の街では法に縛られて、直接人間の血を飲めませんよ?」

「はっ、お前は法を守らず僕の血を飲んでたじゃないか。フェリド・バートリー」

「はは、人間きの悪いことを言わないでよミカ君。君の方から飲んでと言ったんでしよう?で…僕の屋敷から銃や吸血鬼の都市を脱出するための地図を盗んでいた」

そして思い出すのは昔の記憶。まだ彼が人間だったころの儂い記憶、いや悪夢に近いもの

僕はお前の道楽で家族を皆殺しにされた」

あの時のことを少し思い出したためか声が憎しみを込めたものに変わり、少し低くなる

「あーらら、吸血鬼になった今でもまだそんな古いことを怒ってるん

ですかあ？」

彼はフェリド・バートリーを睨む。そしてトンツと車から飛び降り言った

「いや…僕が怒りを感じるのは家族を守るだけの力がなかった自分だけ。そして…」

そこで言葉を止め俯いて言った

「翔の言うことを信じればよかったっていう後悔だけだ」

「ふふ、相変わらず自罰的ですね。で…最後に残った家族…あの二人だけは守る…ですか？愛だなあ…あははは、あつてもミカ君本当に人間の血は吸つとかなきやだめですよ？血が欠乏したら僕らは暴走して鬼になっちゃうんだから」

人間の血を飲んでいる吸血鬼を見る。その時感じたのは喉の渇きだった。そしてそれを感じた自分に対する絶望でもあった

14話〈開戦〉

―四年前―

吸血・都市サングイネム

その部屋にあるのは玉座。そしてそこに座るのは桃色の髪をした幼い少女である。そう、彼女はこそがこの都市の女王、クルル・ツエペシその人である。

そしてそんな彼女の前には金髪の髪をした少年―百夜ミカエラが苦しそうにしていた

「さあ、ミカ。この人間の血を吸いなさい。そうすればあなたの細胞は動きを止める。人間の老いのない体―完全な吸血・へと変貌する。我らの同胞に―」

「…ぼ、僕は…吸血鬼になるつもりはない!」

そうは言うもののその子供を見て彼が感じてたのは喉の渇きによる苦痛。それでも血を飲むわけにはいかないとグツとその苦痛を押しとどめる

だかクルルはそんな彼を見て笑って言った

「ああ、そんなこと言っても、体は我慢出来ないでしょう? 全身が痛いはず、乾いて乾いて仕方ないはず…我慢せず欲望のままに…」

「うるさい!!」

いつの間にか近づいてスツと彼のの顎に手を当てて来たクルルの手を叩く。パシツという乾いた音が部屋の中で響いた

「…じゃあ、このまま死ぬ?」

「吸血鬼になるくらいなら…死んだほうがましだ!!」

「そう、まあ確かに…ね。でも貴方もう普通には死ねないわよ? わたしが貴方を変えちゃったから。血を飲まなければ意思のない醜い鬼に変わってしまう―。だから人間の血を…」

「絶対に嫌だ!!」

だがそれでも彼は拒み続けた。一度は死んだ体だ。だからと言って血を飲むのも一理あるだろう。だが彼は拒んだ。その理由は――

家族を殺した吸血鬼に何てなりたくない。そして生き延びた二人にもし会えた時、どんな反応をされるのが怖い。それだけだった

そして彼女はそう、と言って自分の手首を切って彼の前に差し出した

「じゃあ、人間ではないわたしの血を飲み続けるかー」

残された理性が血を飲みたいという衝動で埋め尽くされる。そして彼は気付いたらクルルの首筋に噛みつき血を飲んでいた。

その時彼は気付く、彼は一生クルルから離れられない。と…もうクルルに頼るしか生きていけないのだから

ドンツという音で吸血鬼の前に現れたのグレン達《月鬼ノ組》それぞれの人間と吸血鬼の主力がぶつかり合う

「よーし、ここ制圧すりゃ俺らの勝ちだ。力を貸せ鬼刀、真昼ノ夜」

そしてグレンの刀から黒い霧のようなものがでる。それはいつかの急な試験よりも多かった。

そんな奇妙な事にも驚かず冷静に判断していく吸血鬼―フェリド・バートリー。そして彼は的確に指示をそれぞれの吸血鬼にだしている。

「吸血鬼を皆殺しだ!!」

「下等な人間どもを殺しなさい」

そして新宿を巡った戦争は本格的に始まった

「なあ流石に吸血鬼多すぎないか…?」

「まあ戦争中だしな」

優が俺の問いに答えた

そしてこれで何体目かわからないがまた目の前の吸血鬼をで消し

ていく

俺たちが西へ着いた時ほとんどの人が希望を見るような目で声を上げた。まるでどこかのヒーローのようだって、一人思いながら門前の吸血鬼を俺たちシノア隊で片付けていく

丁度吸血鬼を殺り終えたときまたも、スピーカーから放送が流れる「命令を伝えます。命令を伝えます。現在かつてこの新宿をたつた一部隊で吸血鬼から奪還した、《月鬼ノ組》の一瀬グレン中佐が出勤されています。あと少しみなさん持ちこたえてください。続いてシノア分隊へー、一瀬中佐から命令です。至急新宿五丁目交差点にこい。敵の司令塔がいるとのことです」

五丁目ってどこ？状態の俺はパツとしなかったが君月がすぐだ！って言うてくれて安心した

「よし、じゃあ行くぞ！吸血鬼どもを皆殺しにしてやる！」

優は高らかに宣言しながら俺達シノア隊は五丁目に向かった

15話く再会く

俺達が新宿五丁目まで行く間にも吸血鬼は襲ってくる。だが、そろそろ飽きてきたものだ。死ぬ！人間、と襲いかかってくる吸血鬼。それも大体単騎で突っ込んでくるだけ。それを全て一撃で消していく。これではもう流れ作業をしているみたいだ

「…おい…ここでずっと戦ってても拉致明かねえぞ。先へ行こう！」

君月がそう言うのと三宮がそれに賛同した。

「賛成だ。グレン中佐の命令も敵司令塔がいる新宿五丁目へ集合しろ、だ。敵の頭を一気に叩くぞ！」

「優くん！翔君！」

さつきから吸血鬼のせいであまり進めていないため、急がないとまじいと思う。それに流石にみんなから疲れの色が見える

「行きましよう翔さん、優さん」

「おう！」

「よっしや行くぞー！」

そして俺達は目的地に向かって走った。

走り始めてからシノアが思い出したように言った

「あ…、ところで最前線にいく前にちよつといいですか？優さん、翔さん」

「あ、なんだよ？」

「どうした？」

こんな時に何を言ってくるのだろうか？と疑問に思うがまあ大事な事だと思う。流石にここでふざけたりは…しないと言いきれねえ…

「突然ですが、今から優さんの第一回目の修業を始めます」

「はあ？修業？」

「今からか？」

あまりの急なシノアの言葉に優と俺は走っている足を止めそうになる

「はい足を止めないで。まあ、前線に行きながら説明します」

「ちよ、お前…こんな状況で何言っ…」

「こんな状況だから言っています。すでにさっきの吸血鬼の貴族とぶつかってわかったと思いますが：いくら優さんたちが《鬼呪装備》でも最上位《黒鬼》シリーズの保有者とはいえ今のままだったら瞬殺です。前線にでてでもまるで役に立ちません。もうね、あれです。地面に落ちているうん…」

「二何の話だよ!! (だ!!) (ですか!!) 二」

おおビックリした！君月は分かるがさすがの与一も黙っていられなかつたらしい

まあ流石にあのクローリーには仮面つけても勝てる気がしねえなあ…

それに確かクローリーの周りにいた二人も強いな。多分三人一緒にいることが多いだろうから手こずるどころか瞬殺だなありや…

一人で色々考えている間にも優とシノアの話は進んでいた

そしてシノアが急にあるものをだした

それは沢山の錠薬のようなものが入っている小さな箱だった

「薬？」

与一がそう聞くとシノアは頷いて答えた

「ええ、いま一番最先端の修業法です。ドーピング、ドーピング。飲むと鬼と同化しやすくなつて本来の力が引き出せます」

「じゃあそれ飲みや、吸血鬼の貴族もー」

「少なくともすぐに殺されたりはしなくなるでしょう。理論上、1錠飲めば1.5倍ー、2錠飲めば1.8倍の力が使えます」

「んでそれは何錠以上飲んだら死ぬんだ？」

普通の事を聞いたただけのだがシノアが驚いた顔をする。優は優でなんで死ぬんだ？をつて顔してるし。それ以上に君月と与一は死つて言葉に顔を強ばらせてる

「あはは、よくわかりましたね。この薬は三錠飲めば内臓全てが破裂します。二錠でもショック死しかねないダメージがあります。なので普通は一錠まで、おまけに効果時間は15分、薬が切れた瞬間鬼呪装備すら解除されて完全に無防備になります。そこでこれの登場です」

そして、シノアが取り出したものは懐中時計型のアラームだった。きつとこれで戦う時間を、そして効果時間の方もな

「このアラームは13分で鳴ります。鳴ったら全力で逃げてください。残り2分であなた方はただの人間ですから。ちなみにこの薬の効果が出始めるのに10秒掛かります」

「だからクローリーの時に渡さなかったのか」

「はい。あの吸血鬼は十秒あれば私達全員を殺せました」

「ちよつと質問」

「はい、優さん」

「これが前にお前が言ってた。鬼呪装備の本当の使い方なのか？これさえあれば全部、鬼呪装備の力を引き出せる？」

それは優が一番聞きたかったであろう質問だった

優はすぐに力を求める。それは今も昔も変わっていないし、良くもあるし悪くもあると思う

「いえいえ、これは一時的処置です。鬼呪の力を使いこなすにはもつと勉強と修業が必要ですが…その後それでも足りない部分を補うためのドーピングです。でもー今はそれ、やってる時間ないでしょう？なにせ戦争始まっちゃいましたし」

「確かに…」

シノアの言葉に納得する優

「それが戦場だ」

「三宮…そればかりだな」

「君月、三宮はそれで流行語狙ってだから。邪魔してやんなよ」

「ああそうだったのか。悪いな三宮」

「おい翔、君月殺すぞ」

はいはいって軽く流しておいた。その時三宮が物凄く睨んでいたのは気にしてはならない。そして与一が思っていることを言った

「でも…薬飲んで強くなるとか…なんか嫌だなあ…」

「ああ、そこは安心してください。この薬人体に副作用がありませんのは日本帝鬼軍お墨付きですから」

「全然ダメじゃねーか!!」

よく自慢げに言えたなおい！

「あはは、だから極力飲みたくないですが、今回は仕方ないので皆さんに配りまーす」

そして俺にも薬が渡される

その中には結構な量の薬が入っていた。見た目は普通の薬だがそれでも死ぬ可能性がある薬だから丁重に扱わないとな

「飲むタイミングは？」

「まあ、今回はグレン中佐がいるので中佐が命じるでしょう。でも中佐にその暇がなさそうなら私がしますが…」

「分かった。じゃあ行こう」

そして、一度走りを止めた足を再び動かした

「なあシノア」

「何ですか翔さん？」

走り始めてすぐに隣にいるシノアに質問を投げた

「あの薬、俺飲まなくていいか？」

「ツ！何言ってるんですか？」

シノアの声のトーンが少しだけ下がった。あ、これ怒ってるわ

「俺は一度鬼に負けてる。その時点でかなり同化しちまつてる。それに仮面も、あるからさ」

「…確かにそうですね。でも…」

「まあお前が飲めって言ったなら飲むしダメだと思っただら止めてくれていい」

「わかりました…無茶だけはしないでくださいね」

シノアは渋々と言ったところで納得してくれた

(でもわりい…無茶するなっつてのは守れそうにねえ)

前線――

新宿五丁目交差点

グレンの前には金髪の吸血鬼。服装からして貴族ではないらしいがそこらへんの吸血鬼に比べたら格段に強いと言えるだろう。それは剣を交えただけでわかった

「俺に意識を向けさせれば俺たちの勝ちだ」

そしてその吸血鬼と戦いながらも悟られないように吸血鬼を罠のある方へ誘導していくグレン

「おーおー、なんだためえ強えくな、おい！」

「…そう？でも君は強くない」

「そうか？」

相手の虚をつきを一瞬で距離をつめて、吸血鬼の頭に呪符をはる

「爆裂しろ。不動明王呪」

その言葉と同時に呪符が大きな音を立て爆発した

やったか？と思ったが数メートル先に爆発を回避した吸血鬼の姿があった

「…ちつ、今のよけんのかよ。たまんねえな、おい」

「爆発が遅いよ…それにそんな古い呪術が吸血鬼に通用するとも？」

「あつはー、さっすがミカ君、第三位始祖クルル・シエペシのお気に入りに。圧倒的な力と傲慢さでも、その傲慢さは足元をすくうよ。手伝おうか？」

不意に聞こえたその声は建物の上にいるさつきまでの戦いを見ていた吸血鬼の貴族のものだった

「…なんだよ、それ。どこに僕の負けがある？」

今の言葉を聞きグレンは確信した。この吸血鬼は気づいていない、このままなら殺れる、と

「あはは、負けるよ。足元見なきや、敵は最初から一対一で戦う気はないよ」

その貴族の言葉でようやく気付いたようだ。その吸血鬼は足元をみて驚く

「バレたぞ時雨。殺れ」

「はい」

何処からともなく現れた時雨は、敵の足元にあった罠のもとである糸をひく。そしてその糸を操作し、クナイをあらゆる方向から吸血鬼に向って放った

「五士、幻術展開」

「もうやってる」

時雨の攻撃さえもかわした吸血鬼を今度は五士が幻術で襲う。だがその幻術からも避け、吸血鬼はグレンの予想どうりのところへ逃げる

「ほら、チェックメイトだ。吸血鬼」

剣をその吸血鬼を殺そうと振り下ろし、殺った!と思った直後、思わぬ邪魔によりグレンは相手に殴られただけで約10m以上も吹き飛んだ

「グレン!」

それを見た美十が思わず声を上げる

「うっは、やーべ予想と段違いだ。あの長髪の吸血鬼が尋常じゃなく強え」

先の攻撃により満身創痕のグレン

そして目の前の吸血鬼二人は何か話しているようだった

「ねえ、ミカ君。人間なめない方がいいよ。彼らは強かで欲深くて卑怯だからー。なくんてもと人間の君に言うのもなんだけどね」

「うるさい」

「あはくさて、そろそろ本気で行こうか。二人でやれば…」

「もう問題ない。向こうのやり口はわかった。剣よ、もつと血を吸え」

そしてさらに剣の色が赤く、血のように紅くなる

「ふふふ、やっぱり傲慢。その傲慢さはこないだまで人間だったせいなのかなあ」

ミカとフェリドが話している時グレンはアラームを見ていた。そして呟く

「こりや、薬二錠コースかねえ。もしくは新宿捨てて撤退するかー。それか優たち黒鬼装備の援軍が間に合うかー」

「いけません!グレン様!二錠飲んだら死ぬ可能性が…!!」

小さく呟いたつもりだったが小百合には聞こえていたみたいだ

「飲まなくても死ぬだろこれ。じゃなくても薬の効果時間があと八分、その制限時間内にあいっすら始末しないとー」

「話は終わった？ならもう行くよ」

ミカが戦闘準備に入り告げる

「そりゃ、ご丁寧にどうも、でももうちょっと待ってくれっかな〜？」
「どのくらい？」

「ちよつとお薬の時間なんで20秒だけ静かに待ってくれるとありがたい…」

キンツと刃と刃が重なる金属音が響く

「まあ待ってくんねえよなあ。おまけに——てめえさつきより速えじゃねえか」

「もう手加減はやめたんだよ」

「戦場で手加減とかお子様だなア、おい」

強がってはいるものの内心はまずいと思っている。体はボロボロ。なのに向こうは万全の状態に近い。こりゃあ死ぬな…何て自傷気味に笑っていると再度剣を構えた

「その子供に殺されるんだおまえは」

そして吸血鬼の速い攻撃。グレンはその攻撃で剣を弾き飛ばされ丸腰となる

「うお…まず…」

「お？敵の援軍はつけ〜ん、ミカちゃん早く始末しないとまずいよ〜」
その長髪の吸血鬼の声により俺はやつとか、と誰もわからないぐらいに笑った

前線につくとそこには吸血鬼に剣を向けられているグレンの姿があった

「全員すぐに薬を飲んでください!!？中佐を救出して離脱します!!」

シノアの言葉を聞きすぐに薬を口の中に放り込む

「行くぞ!!」

「おう!!」

そして、全速力でグレンの元へ向かう

だが、それでも一歩遅くグレンの前にいる吸血鬼は剣を構えてグレ

ンの方へ剣を突き刺した。途端にグレンから流れる血

「グレン!!」

「なっ！てめえ…グレンになにしてんだあああ！」

優と二人で金髪の吸血鬼に向かって走る。だがそこで気づいてしまった。グレンを刺した吸血鬼は見覚えのある金髪。そして青色の目。二年以上一緒に暮らした家族を見間違えるはずがない。自然と足が止まってしまふ。あの時本当に死んでしまったと思つた。俺のせいで死んでしまった家族が目の前にいる

「ミカ…！」

だが前を走っている優は頭に血が上ってしまっていて気づいていない

「(まずい！このままじゃ…！)」

そう思い自分の出せる最速でミカの前に立った。そして――
優の刀が己の体を貫いた

16話 家族と仲間

——優の刀が己の体を貫いた

自分の体から血が流れる。そして意識がどんどん遠のいていく。そしてこれは前にも経験したものだ

「っ……」

「死ね吸血……え、何で翔が……？」

「優がミカを傷つけんのは見たくねえからな……」

「は？ミ……カ……」

俺の言葉を聞き優は俺の後ろにいる吸血鬼を見る

そしてその目はさらに驚愕の色を見せた

「……いや……うそだろ……」

「ゆ……優ちゃん？それに、翔……？」

ミカも驚いていた。それはこちらも同じだ

まさか吸血鬼になって生きているとは思わなかったからな

今も二人とも驚きにより体が硬直している

そんな二人を見た後、俺は自分の状況を見て笑う。情けない……つ

と、体には優の剣が刺さっており制服は自分の血で汚れている

(手で少しは塞いだけど、きついなあこれ……)

ゆつくりと刀を抜いていく

ちようど抜き終わったとき、やっと状況を理解したグレンが声をあげた

「お前……」

「お前……自分がなにをしたか分かってるのか!!翔!!早く、その吸血鬼を殺せ!」

ミカはその言葉を聞き、その場から一旦逃げようとするが、グレンに刺した剣をグレンによつて掴まれているため剣が抜けない、だから逃げる事が出来ないみたいだ。その状況を見てグレンは勝ち誇つたように笑う

「はっ、俺の勝ちだ。ヴァンパイア!!」

そしてグレンはミカに攻撃を仕掛けるが、ミカの方が早く遠くに逃げた

それを見届けたあとグレンは俺のことを殴った

「ふぎけんな!!?てめえなんで…邪魔した!」

「悪いと思う…。でもあいつは…俺達の家族なんだ…!」

刺されたところを押さえながら言う。そして俺の言葉に反応したのは優だった

「翔…本当にミカなのか…?生きてたのか…?」

「ああ、俺もびつくりだが本人だと俺は思う」

俺は言い終わった後自分の傷ついたはずの手を見て、自虐的な笑みが浮かんだ

(流石は鬼呪と虚の超速再生の重ねがけだな。もう傷どころか失ったはずの血液まで回復してる)

そこで優が声を上げた

「お前…ミカなのか?」

優が金髪の吸血鬼に尋ねると、吸血鬼は俯き立ち上がった。

「あれ百夜 優一郎君と朝倉翔くんでしょう? いやーまさかの運命の再会。涙が出ちやいそう。で…どうするんです? たぶん優ちゃん、翔くん人間どもに利用されてますよ?」

フェリドが隣にいるミカに問いかける

「当然、救う」

「醜い人間どもの手から?」

「ああ」

「でも、彼も人間ですよ。人間は決して僕らの仲間にはならない」

銀髪の吸血鬼が、そう言ったあとポンと手を叩く

「そうだ。じゃあクルルが君にしたように僕が優ちゃん達を吸血鬼にしてあげま…」

その瞬間、ミカは素早く動き銀髪の吸血鬼の首元を掴む

「僕の家族に手を出したら、殺すぞ」

獅子のような鋭い目でミカは睨む

「ふふふ、冗談ですよ。珍しく熱くなっちゃって。ま、じゃあ手を貸

してあげましょうか。他の人間は僕が止めてあげるから、君は君の大切なお姫様達を奪ってきなよ」

ミカは持っていた剣を握りしめると鏢から茨が生え腕に絡みつき、持っている剣の刀身が更に赤くなっていた

そしてフェリドも剣を抜き、刀身を撫でる

「では、やりますか。優ちゃんと翔君以外の人間どもを皆殺しにしましょう」

剣を手近づいて来る。

「私をお呼びと聞きましたが…第七位始祖様」

急に聞こえた声。その声には聞覚えがあった。

新宿の防壁前で対峙した吸血鬼、クローリーだ

クローリーは先の、金髪と青い髪の二人の女吸血鬼を連れて、フェリドんぽ元に現れた

「ああ、クローリー君かあ。待ってたよ。君たちがいたらもうゲムセットだねえー、彼らを殺す必要もない。よし、家畜にしよう。殺さず生捕る。吸血鬼殲滅部隊家畜化計画」

「悪くないねえ」

「終わりだ………」

グレンが立ち上がり叫んだ

「総員離脱態勢！新宿は放棄する！」

「ち…ちよつと待ってくれよ！向こうにミカが…！俺の家族がいるんだ！だから撤退は…」

「今は無理だ優俺たちじゃあれを相手にしながらミカは助けられない」

「でも…」

「ちゃんと聞け。今は無理だったんだ。誰も助けないと行ってない。でも今耐えろ。俺も助けたいが今は仲間の命が危ないんだ、納得してくれ優」

「…分かった」

優は渋々に納得してくれた

「撤退だ！陣形を崩さず、第二防衛ラインまで撤退！」

グレンの指示に従い、全員が撤退を開始する

だが、吸血鬼はそれを見逃そうとせず、追い掛けて来る

俺達の進行方向に銀髪の吸血鬼——フェリドが見えた

(いつの間にも！)

「逃がさないよ〜ん」

「お前：フェリド・バートリー！」

優は「阿修羅丸」を抜き、斬り掛かる

「くそっ！」

それを見てグレンが悪態を吐きながら刀を抜き、後を追う

優の攻撃をすべて躲し、フェリドは笑う。

「速〜い。けどまだ若い」

そこで、グレンが横から攻撃を仕掛けるが、それすらも尋常ではない速さでよけてフェリドはグレンの後ろに現れる

「そして、ライオンも手負いじゃ剣線が鈍るねえ」

「!!」

そして、フェリドはグレンを蹴り飛ばした

「グレンー！」

助けに行こうと走り出そうとするが、俺達の前にクローリーと二人の女吸血鬼が立ち塞がる

「今度は逃がさないよ」

俺は気付かれないようにシノアの近くに移動し、小声で話す

「シノア、二人が危ない。一瞬でいい、隙を作ってくれ。その隙に、グレンと優を助ける」

「分かりました」

そう言うと、シノア、三葉、君月の三人が飛び出し、与一が弓で援護する。

君月は一人で金髪の女吸血鬼相手に奮戦し、三葉は青い髪の方、シノアはクローリーと戦い、与一がそれを援護していた。

君月がなんとか金髪の方の獲物を押さえ、三葉とシノアもなんとか獲物押さえ込む。

「今だ行け翔!!」

君月の声聞いて俺は全神経を足に集中させ、その場を離れグレンの下に移動した

「グレン!」

「翔…俺のことは良い!優が金髪の吸血鬼に連れてかれた」

「な!?ミカに!?」

遠くを見ると、ミカが優を連れ移動していた

「早く行け!手遅れになるぞ!」

「わかっ…」あつは一行かせませんよ」

俺が向かおうとした矢先に聞こえたのは憎きあいつの声だ。俺は思わず足を止めそちらに向き直った

「フェリド・バートリー!!」

「お久しぶりですね翔君。ではこの前の続きと行こうじゃないですか」

そう言つて斬りかかつてきたのを咄嗟に斬月で防ぐ

「昔の俺と思うなよ!!」

すぐに仮面を付けフェリドに攻撃する。だが――

「確かにあのときよりは強くなっていますが、まだまだですな〜」

全てをかわすかいなすだけ。こいつ…!!

「ふざけんじゃねえ!!!」

俺は大振りに、力任せに斬月を振った

「…こんなものですか」

だがそれをフェリドは片手で受け止め、更には俺の首を掴んだ

「が!」

「あの時から何も変わっていないんですね」

俺が変わってない…?そんなことない。あの時よりも強くなった。誰かを守るようになった

――なのに弱いまま?

俺の意識が陥る一歩手前でグレンが横からフェリドに剣を振るつた

「しっかりしろ!!翔!!」

その言葉に救われたと思った。下手したら俺は死んでいた。

「ゲホツゲホツ!!」

「いいから優の所に向かえ!」

「わかった!」

俺はグレンにフェリドを任せ優の所に向かった

17話 く黒い天使く

翔side

フェリドをグレンに任せ、優のところへ向かう時にある光景が見えた。

それは——シノア隊のみんなが吸血鬼に血を吸われそうになっている場面だった。

それを見た瞬間に俺の中で何が音を立てて崩れた。

「クソ吸血鬼共がああああ!!」

叫び、俺は斬月を抜き、仮面をつけみんなに傷つけないように斬月で地面を思いつきりたたつ斬った。

血を吸おうと歯を立てていた吸血鬼共は俺が現れたことによつて一瞬動きを止めた。だが俺にとってはその一瞬があれば十分だった。まず一番近くにいた与一に張り付いている吸血鬼を殺した。

その後、三宮、君月を襲っていた吸血鬼に斬りかかるもそいつらはクローリーという貴族共。そう易々と殺されなかった。だが流石に距離を取ることは出来た。

『大丈夫か!?三人とも!!』

「あ、ああ。それよりそれは…」

君月が答えるも指を指しながら聞いてきた。おそらく仮面のことを聞きてんだろが答えている時間はない。

『後で答えるー!それよりも全員距離を取つとけ!』

俺は一方的に伝え、シノアの所へ飛んだ。

他の三人とは違い少し距離が空いていた為に瞬歩を使った。されど遅かった。

シノアの首筋には吸血鬼が——クローリーが歯を立てて血を吸っていた。

それをみた瞬間に俺の理性は吹き飛んだ。

大事な人を守れない、また死なせてしまう、なら大事なもんには手を出すものを駆逐してしまおう。その思いが再びアイツを呼び起こした

「全員皆殺しだああああああああ!!」

そう——虚と鬼であるオレを。

「いやーまずいのが来たね」

そう言いながら彼は家畜の血を吸うのやめた。目の前に現れたのは鬼のような仮面をつけ大剣を持った少年。

「まあ少しは楽しめるかなあ?」

「全員皆殺しだああああああああ!!」

「うわおおおおおおああああああああああ!!!」

叫ぶ彼に目を向けた直後——後ろから凄まじい雄叫びとも、いや苦痛の音が聞こえた。

そちらに横目を向けるとそこには背中から黒い羽とも形容しがたい何かを生やした少年がいた。

「…なんだ? ちょっとまずそうなのが出てき…」

素晴らしい後ろの彼を無視し、そちらに体を向けるも、彼の言葉は最後まで告げなかった。なぜなら——

翼を生やした少年——優が刀を振り下ろされたからだ。

クローリーはそれを横に回避したがその一撃はあまりにも大きすぎた。優の一撃は地面を抉った。それも10mやそんなものではない。1kmは抉っていた。まるでそれはクレータの様であったそれを見たクローリーらは一旦下がった。

だが優の攻撃を受けながらも抉れた地面の真ん中に立っている男がいた。それは——カケルだった

「おもしろえのがいるじゃねえさ!! テメエから消してやるよおお!!」
「つ　つ　ツツツツツ罪人は……罪人はミナミナミナ皆殺しだ」

そう言いカケルは優に斬りかかった。

それを阿修羅丸で受け、そのまま力任せに吹き飛ばした。その先にはビルがありカケルはビルに直撃した。ビルは簡単に崩れ煙が上がった。

だが今の一撃を無かったかのようにカケルは再び突撃した。その顔はこの場で異常なほどに口角を吊り上げ笑っていた。

カケルはお返しと言わんばかりに優のことを力任せに吹き飛ばした。当然優の方にもビルはあり、そのまま直撃した。だがカケルのようにビル一つではなく後ろにあるビルの方まで吹き飛ばされた。優は周囲の障害物全てを吹き飛ばした。

カケルは追い討ちをかけるべく瞬歩で間合いを詰め、縦横無尽に斬りかかった。

優はそれに対処が出来ずにいた。あまりにも速いため、ただそれだけの理由でだ。だがやられてばかりではなくこれは思いつきり刀を振り下ろした。

そこには先程よりは小さいがクレーターが出来ていた。

その先には瓦礫に埋もれていたのかそれらを吹き飛ばし、何事も無かったかのように立つカケルの姿があった。

「おもしろえじゃねえか!! もっとオレを楽しませろや! クソ天使!!」

「なな　なぜ　キサマゴトキオニがワレのチカラヲリヨウガデキる」

「はっ! オレはテメエの思ってるような存在じゃねえからだよ!!」

再び斬り掛かる。その戦いは周囲を更地に変えてしまうほどのものであった。更には場所は地面の上だけではなく時には空中、地上、地下ともはや想像を絶するものだった。

だが一瞬カケルにブレが生じた。

「っち……」

その隙を見逃さなかった優はカケルの右腕を斬り飛ばした。

だがそれでもカケルの顔から笑顔は消えなかった。それは純粹に

戦いを楽しんでいる顔でもあった。そしてカケルの方から距離を取った。

「残念だか俺の勝ちだクソ天使」

「なニヲイツてイル」

「こいつで終いだからだよ！」

カケルのそばには斬られた右腕と斬月があった。そしてカケルは右腕を再生して斬月を掴みそのまま振り下ろした。

「月牙天衝!!」

そして優の事を青白い三日月が覆い尽くした。

「後のことは任せたぜ翔」

そう言い残しカケルは翔に戻り気を失った

「! ……え?」

クローリーに血を吸われ気を失っていたシノアが目にしたのは

大きなクレーターののような跡だった。周囲に目を配れば周りのビルは完全に破壊され、当たりは瓦礫でいっぱいだった。よく自分が巻き込まれずに無事であったと思った。

だがこれは誰がやったのかはすぐには分からなかった。

——二人の戦いを見るまでは。

二人の戦いは想像を絶するものだった。己の体が傷つくもどちらもすぐに傷が塞がり、斬りかかる。それも一合刀がぶつかるだけで周囲のビルが吹き飛ぶ程。

「…な、何ですかこれ…」

あまりの光景にその一言しか出なかった。それほどに二人の戦いは常軌を逸していた。だがそこで状況が一変した。

カケルの右腕が斬月諸共斬られ吹き飛ばされたのだ。

だがカケルはあろう事か斬られたハズの右腕を再生し優に斬撃を放った。それはとても大きく青白い三日月のようだった。

それを放ったカケルは倒れ気を失い、優もまた黒い翼は無くなり気を失っていた

18話く実験く

日本帝鬼軍新宿官舎——地下

新宿が攻撃をされてから五日。シノアは地下に続く長い階段を下りていた。

そして、地下に着くとそこにある扉を開け中に入る。

中には檻のような扉がありそれを守るようにして軍人が二人立っていた。

「止まってください。ここから先は立ち入り禁止です。」

その内の一人がシノアに制止の声をかけてきた。

「私は日本帝鬼軍吸血鬼殲滅部隊に籍を置く者です…」

軍人はシノアの階級章を一瞥し、再び口を開く。

「たとえば、殲滅部隊の方でなくても尉官以下の人間は立ち入ることを禁止されています」

「……………一体ここは、なんの施設なのですか？」

「お答えできますs「モルモットの実験場だよ」おい！」

一人の兵士があっさり口を開き、一人がそれを咎める。

「大丈夫だろ、新宿兵はみんな知ってたんだから」

「モルモット、というの？」

「捉えた吸血鬼どもの体を使って弱点を探ってただよ」

「つまりは、人体実験ですか？」

「はっ、あいつらが人間だっていうならそうだな」

それを聞き、シノアは詰まらなそうに息を吐く。

「まあ、いいです。入れてください」

「だから尉官以下の者は…」

「これでも通れないでしょうか？」

シノアは手を前にだし、柊家のマークが掘られた物を見せた。

「それは、柊家の!？」

「私は、日本帝鬼軍を統べる柊家の血に連なる人間です。これでも通れないでしょうか？」

「い…いえ！もちろん大丈夫です！」

軍人は驚き、そして血の気の引いた顔で、扉を開ける。

シノアは「では」っと一言だけ言い、そのまま扉をくぐる。

「あ…あの、お聞きしたいのですが…」

その時、軍人の一人がシノアを呼び止める。

シノアは首だけを動かし、その軍人を見る。

「なぜ帝鬼軍を総べる柊家の方がその…軍曹などという階級に…」

「軍曹って響きが好きなので、あと軍の中でのくだらない権力争いに興味がないんです。そのせいで姉は死にましたし…」

そう言つてシノアは奥へと進んでいった。

奥へと進んでいくと、檻の中にいる吸血鬼はシノアの方を見るが、シノアは気にせず進む。

しばらく進んでいくと明りのある一つの部屋について。

中を覗いて見ると、そこには沢山の実験器具と研究者、そしてそれらを一望できる部屋の窓からシノアが探してる人物、一瀬グレンが座っていた。

シノアはその部屋まで歩き、扉を開ける。

「五日探しましたよ、グレン中佐」

「そうかい。それはご苦労だったな」

「少し聞きたいことがあります」

「答える気はない。帰れ」

シノアはグレンの言葉を無視し、机を叩いて話す。

「優さん達がまだ目を覚ましません。グレン中佐は二人に何をしましたんですか…いえ、二人で何をしようとしたんですか？」

だが、グレンは何も答えようとしなない。

そんなグレンの前にシノアは二つのケースを置く。

優の鬼呪促進剤と翔の鬼呪促進剤が入ったケースだ。

「優さんの『黒鬼』シリーズの装備は特殊なものだから特殊配合の薬を渡せと中佐に言われてそうしましたが…。あの優さんの暴走はその薬のせいじゃないんですか？ いったいあの戦場でのあれはなんなんですか？」

だが、グレンは一向に応えようとしなない。

「更に翔さんの薬にはなにを配合したんですか？ 医師の話によれば細胞自体が造りかえられている

って聞きました。中佐は何を造り出そうとしているんですか？ 答えてください中佐!!」

さつきよりも強く、そして声を荒げる。

「お前が感情見せるなんて珍しいな。怒ってんのか？…で、なんて答えたら納得する？ 何もしてないって答えたら安心するのか？」

「馬鹿な！ 何もしてないわけが…」

「じゃ人体実験してるって言ったら怒るのか？」

人体実験、その言葉にシノアは驚く。

「か弱い人間が…崩壊した世界で生き残るにはどうしたらいい？ 吸血鬼を殺すには？ ヨハネの四騎士を始末するには？ お前の姉『終 真昼』が開発した『鬼呪装備』はいったい何人の犠牲の上に完成した？ 『鬼呪装備』なしで、人間はこの世界で生き残れたか？」

グレンの質問に、シノアは答えることが出来ず黙った。

「なら、いまさら綺麗ごと抜かすんじゃないやねえよ。ガキ…それとも優に惚れたか？ いやお前の場合翔か？」

の瞬間、シノアは『四鎌童子』をグレンの首に引っ掛けるように出した。

「…中佐、あまりおふざけが過ぎると…私、何するか分かりませんよ？」

シノアの言葉も殺気も本気だった。彼女は何も答えない彼を殺しても構わないと考えていた。それは今回のことだけではなく、姉のこともかかわってくるのだが…。

だが、グレンは微動だにせず黙って椅子に座っていた。

「殺したきゃ殺せ。だが何度でも言う。俺は、お前の質問に答える気はない。さつきと帰れ」

シノアはこれ以上言っても無駄と悟り、大人しく『四鎌童子』を仕舞い、部屋を出ようとする。

「…：優の薬だが、アレ五日で抜ける。もうそろそろ目覚めるだろう」

グレンのその言葉にシノアは立ち止まり振り返る。

「心配なら傍にいてやれ。それと翔のことだが…」

そこで一旦言葉を切り、グレンは立ち上がる。

「俺は今回の事に関しては何も知らない。ましてや薬に関してもあ前らと同じだ。それにあいつの過去を知りたいなら本人に直接聞け。俺は話すことは何もない」

グレンなりの優しさなのか、シノアはそれ以上何も言わず、大人しく部屋を去った。

一人になり、グレンは机の引き出しからある紙の束を取り出す。

「つち…。まったくどうなってんだか…」

19話 く成し遂げるべきもの

夜の病室。

空いた窓から夜風が入り込む。

その風に優は気付き起き上がる。

見渡すと与一がベッドに寄り掛かるように眠っていた。

そして、新宿で戦っていたのにいつの間にか軍の施設に居ることに

驚き、与一を起こす。

「おい！与一！起きろ！」

「……ん……あ、優君！目が覚めたの!？」

「そりゃこっちの台詞だ！一体何がどうなって「優君！」

与一は感極まったのが優に抱き付く。

「よかった！皆に知らせなきゃ！」

「待てよ！俺の質問に！」

優の最後の言葉を聞かずに、与一は病室を出て行く。

「皆は！皆は無事なのか！」

優の言葉が夜の部屋に響き、静かになったと思ったら与一が扉から顔を出す。

「心配？」

「べ、別にそう言う訳じゃ……」

「安心して。皆無事だよ……翔君以外はだけど」

「え？それって……」

「とにかく皆呼んでくるよ」

与一はそう言い残し、病室を出る。

数分後、病室には、翔を除いたシノア隊全員が集まっていた。

すると優はシノアの首筋にある傷に気付いた。

「お前、その傷……」

「あ、ああこれですか？大丈夫です。ちょっと血を吸われただけなので」

シノアは首筋に張られた絆創膏を撫でながら言う。

「所で、翔はどうしたんだ？」

優がそう尋ねると全員が沈黙する。

「優さん。優さんは何処まで覚えてますか？」

「えっと…。みんなが血を吸われかけて…。それを翔が助けて…。シノアがああ赤髪の吸血鬼に…。そこからは覚えてない」

「…では、その後何が起きたかお話しします。優さんが戦場に戻った直後気絶しました。部隊は壊滅の危機。ところが、終暮人中将と終深夜少将が率いる渋谷本隊が援軍に駆け付けたんです。貴族を除く一般吸血鬼はかなり殺せましたし、数匹捕獲もしました。まあ、それでも殆ど逃げられましたが」

優には真実を話さず、嘘を交えて話した。

「それで翔はどうしたんだよ？」

「…未だに目を覚ましていません。この病棟の最上階にいます。軍の監視付きで」

「そして翔さんは再び鬼に？まれました」

「な!？」

優は驚きを隠せず、ベットから出てシノアに迫り焦った表情で聞き返した。

「もしかしてあいつまた仮面を使ったんじゃない?！」

「何でそれを優さんが…?！」

聞かれたシノアも驚きを隠せなかった。仮面の事は翔本人から聞いていたため知っている。そしてあの場所にいたのはシノア、グレン、深夜の三人だけのはず。

なのに何故知っているのか、それだけが不思議だったが一つの結論が出た。それは――

「優さん。翔さんに仮面のことを聞いていたんですね?そしてどのような能力であるのか、そして――」

そこでシノアは一度言葉を切った。周りの君月や与一、三葉は何の話をしているのかは詳しくは分からなかったが、共通で浮かんだのは翔が付けていた禍々しいあの仮面。

優は少し顔を俯かせ、他の三人は固唾を飲んでシノアの言葉を聞いた。

「あの仮面がどれほどのリスクを伴い、それがどんな形で返ってくるのかを」

目を覚ますとそこはいつものビル群ではなく真つ黒な世界だった。光も何もなかった。暗黒が支配する空間。

そこに一人少年が立っていた。その少年の顔は俯いていてよく見えない。

そこで気づく。ああ、あれは俺なんだと。昔の何も出来ずに何かに立ち向かえない今よりも弱い自分であると。

幼馴染の彼女を救えもしなかった愚かな自分。

「そうだ、あれはお前の弱さ」

そこで声が聞こえた。俺の中にいる俺を乗っ取ろうとする鬼の声。

「お前はそれから目を背け続けている」

前にも同じことを言われた。前はそれを否定した。

「だがお前は変わっていない」

そんなことは分かっている。いや分かっているつもり…だったんだ。

「お前に選択肢与えよう」

選択肢？

「我の力を十分に使いこなせるのかどうか」

ははっ。出来なかったらどうするんだ？

「使いこなせないならば貴様を乗っ取り共に死んでくれよう」

…何だそれ。俺も殺してお前も死ぬってか。矛盾してるんじゃないか。

ねーか。

「我とお前は一心同体なのを忘れたのか？貴様が死ねば我も死ぬ。それが道理であろう」

そうだったな…。それよりもお前は本当に斬月なのか？

いつもよりも話し方が違うような…。

「いずれ知ることになるであろう。…そろそろ時間か。ではな翔。我はここで失礼させてもらおう。だが忘れるなよ、貴様はまだ過去に向き合ってもいない。それに向かわなければ力を使うどころか飲み込

まれる事を忘れるなよ」

そう言つて視界がボヤけ始め意識が遠のき始める。

向き合わないとか…。なら落ち着いたらあいつらに話すか…。

俺の過去を。そして俺の償うべき罪を

時は少し遡り優の病室

「なあシノア…。翔は本当に大丈夫なのか？」

そう聞く優の声は少し震えていた。

「…ええ大丈夫ですよきつと。それにここいる人達は優さんと翔さんに助けてもらいましたし」

シノアははにかむように少し笑った。

「ああ、そうだ。それに翔がそう簡単に負け…と思うか…？」

「いやそこは自信もつて言えよ君月」

最後の方が疑問形なつた君月に優がツツコミを入れる。

「はは、まあ翔くんなら大丈夫だと僕も思うよ。何だつて翔くんだしね！」

与一も謎の自信で笑いかけてくる。

「まあ翔に限つて方が一があるとは思えないしな」

三葉も少し困つたように言うがその顔には笑みがあつた。

「…ありがと、心配かけた。あと全員生き残つてよかった、俺は仲間恵まれてるな」

意外な言葉にみんな顔を見合わせる。

「おいおい、これまだ治療いるだろ？」

「いやいや、実は優くん最初からいい子だったよ？」

「いい子ちゃんアピールやめてほしいですよねえ」

「明らかに、頭とか打つてるな」

「おまえらぶつ飛ばすぞ?」

そして、優をいじったあと少しでも体を休ませてもらうため彼らは部屋から出ていった。そして優は窓の前に立ち決意に満ちた顔で呟いた。

「必ず…救う。ミカも翔も…!」

同時刻

とある屋上で外の景色をながめている、人影。その人影は銀髪の吸血鬼、フェリド・バートリー。フェリドは外の景色を見ながらつぶやく。

「いやゝ、しかし笑えるほど順調にきてるよね。相変わらず暴走していく人間の欲望に、全てを侮る吸血鬼たちの傲慢さ。そうは思わない? 僕の新しいパートナー君、はいこれ、こっちの研究資料」

そして、研究資料を渡すフェリド。相手は何も言わずにその場を立ち去った。

名古屋決戦編

20話〜起きたそこは〜

—優が目覚めてから二日後—

「……ここは？」

目をあけると知らない天井だった。体を起こして室内を見る。時刻は夜。開いた窓から入る風が妙に気持ち。そして俺は隔離されているみたいだ。

そんなことよりもあの夢は……。俺の中には斬月以外にも何かがいる。これだけは確かだ。でもあれは鬼ではなかった。じゃあ、あれは……。

ガラガラツと扉が開く。入ってきたのはグレンだった。

「目が覚めたのか。んじゃとりあえず確認したいことがある」

グレンはそう言いながら、ベッドの近くの椅子に腰をかけた。

「俺の質問に嘘偽りなく答えろ」

「……」

無言で頷く。

「よし……。じゃあ名前と年齢、それと所属部隊答えろ」

「……は？」

「早く答えろ。俺も時間が無えんだ」

「……朝倉翔。今年で16。吸血鬼殲滅部隊月鬼ノ組、終シノア隊所属」

「次に……お前は童貞か？」

思わずベットから落ちそうになるのを耐える。こんな関係あんなのかこれ。無かったら執務室に奇襲かけてやる。

「……そっだよ」

「あつそ。んじゃ次」

あつそ?!お前が聞いたんだろぅがああ!!クソグレン!!

「新宿でのことどれだけ覚えてる」

この問いに肝を冷やした。何故かって?そんなの俺が暴走したこ

とを覚えていたからだ。

どれだけの規模で戦ったのか、仲間たちのこと考えずに戦いを楽しんでいたのか。最後に闘っては鬼だろうけどそれも俺の心のどこかで思っていたことなんだろうな。

今の俺の顔は多分だが苦渋に満ちているんだろう。グレンもそんな俺を見て溜息を吐いて、もういいとだけ言いその後何が起こったのか説明してくれた。

「こいつは心の何処かで俺達を信託していない。本人の無意識な所で、距離を置こうとしている。そこを鬼に憑かれてる。じゃないと仮面の事もそうだが、こんな短期間で二回も暴走するわけが無い。…こいつの事はシノア達に任せるか」

簡単に話をまとめれば気絶後、終のお偉いさん達が渋谷本体を率いて撃退。んで俺は一週間眠っていたと。

…：…そんなに眠っていたのか俺。絶対シノアとか怒ってるよな…。
ハハハッ。マジで洒落にならんわ。

「それでシノア達は全員無事なんだな？」

「ああ。寧ろお前と優以外はピンピンしてやがる」

「そうか…良かった」

「んじや俺は帰るわ。お前のせいで書類が溜まりに溜まってるんだ。お前のせいだな」

分かったか、強調して言うんじやねえ。

「ああ、それと明日当たりシノア達が来るから」

それだけ言い残し、右手をひらひらさせて帰っていった。

ツハハ。マジか。

その日、あまりにも次の日が怖すぎて、眠れませんでした。

21話 悪夢と希望

朝のどこかの住宅街。二人の少年少女が仲良く真新しい制服に身を包み歩いていた。

「ねえねえ今日からだよ！まさか一緒の高校に受かるとはね〜」

「うっせーよ。大体俺よりもお前の方が「受かるかな…ねえ落ちたらどうしよう…！」って言ってたじゃねーか」

栗色の髪を肩まで伸ばし、ブレザーに身を包んだ愛らしい顔をした少女がうっせーと頂垂れるも次はムツとした表情に変わった。

「確かにそうだけど受けた人はみんな思うものでしょ!!逆に思わなかったの?!」

それに対して少女と似たデザインをしたブレザーを少し着崩した黒髪が目つきの悪い少年は、はあと一つため息をし、あのなと話し始めた。

「受からねえって思ってたら受かるもんも受からなくなるんだよ。だからそういう考えよりは受かったって思う方が気持ち的にも楽なんだよ」

「何からしくない事言ってるー」

「んだとー!」

「わあー!怒った怒った!はっはは!」

「怒ってねーわアホ!」

こんな毎日が続くと誰もが思っていた。こんな平凡が続けばいいと誰もが思っていた。だが人生というのは物凄く理不尽だ。

「ごめんね…また約束…やぶっ…ちゃった…」

血だまりの中栗色の髪をした少女を抱き寄せ、必死に叫ぶ黒髪の少年。

「もういい!!喋んな!その先は後で聞くから!頼む!」

「ううん…あのね…私ずっと…ね、君のことが…大好き…だつ…よ…。」

「…ああ、分かっているよ！そんなの…俺もなんだから！だから頼む…！死ぬな！」

それを聞いた少女は儂くすぐに散つてしまいそんな笑顔を浮かべた。

「…それだけ聞ければ…私は…十分だよ…。だから…幸せに生きてね…。」

「…おい。おい！ふぎけんなよ…！頼むから…！お前の我が儘でも全部何でもするから…！頼む！死なないでくれ！俺を…置いていかないでくれ…!!」

——翌日

「…久しぶりに見たな。(ごめん…あの時守ってやれなくて…)」

コンコンっ。翔さん起きてますかー？

「ああ、起きてるぞ」

そう言つて入ってきたのはシノアだった。

「それじゃ。おはようございます翔さん。一週間ぶりですね」

「おはようシノア。久しぶりだな。優たちは？」

簡単に挨拶をして、こちらに近づき近くにあるイスに座るシノア。

俺の質問にシノアは

「みなさんは飲み物を買って行ってもらって…って翔さん」

「ん？どうかしたか？」

「何で、泣いているんですか？」

「へっ？」

シノアに言われ目元を擦ると確かに涙が出ていた。きつとあの夢が原因なのだろう。

急いで目元を拭き、苦笑いを浮かべながらも大丈夫だ、と答えた。

「…翔さん。私達の事は信頼できませんか？」

「急に何を…。ちゃんと信頼してるよ」

「じゃあ何でいつも一人で抱え込んで何も言ってくれないんですか？」

シノアは真面目な顔で俺の目を見て言ってくる。それに対して俺は目を逸らしてしまう。

「私達は仲間であり、家族なんです。もっと頼ってください」

シノアが儂げに言う。その顔は最後に見たアイツの表情と少し似ていた。

それを見た俺は胸が締め付けられる。

「――」

「え？今なんて？」

聞こえなかったのか聞き返すシノア。

「…俺は許されないんだよ。どんな事があっても」

「それをどういう…」

聞こえたとシノアを他所にドアが勢いよく開いた。

「目が覚めたみたいだなバカ翔！」

「…もうちょい静かにドアくらい開けろよ三葉」

最初に入ってきたのは三葉だった。その後に優たちが飲み物を持って入ってきた。

「翔！お前また無茶しやがって！心配したんだぞ！」

「悪いな優。心配かけた」

「つたく、お前らは無茶しないと生きていけねえのかよ」

「こんな世界じゃあ無茶しまくっても足りねえくらいだよ君月」

「良かった！翔君、元気そうで！」

「はは、見ての通り元気だよ与一。今すぐ退院してもいいくらいだ」

「もうあんなことはするなよ翔!!私達がどれだけ心配したか…」

「耳が痛い…。だけど俺はお前らが危ないと思ったら無茶はするぞ？大切な家族だからな」

四人と話し始めたがみんなが皆心配してくれてたんだなと強く思う。こんな俺なのに…。

「みんなあなたの事が大切なんですから、だから大丈夫ですよ翔さん」
「ああ…。分かってるつもりだったんだけどな…。なんか今日は雨が降りそうだな」

最後のシノアの言葉を聞いた俺は涙腺が緩むのを感じて、窓の方を向く。

それを見た五人はお互いに顔を見合わせ俺を弄り始めた。

「翔さん泣いちやうんですか？さっきも私を見たら泣いてましたもんね」

「へえーシノアを見て泣いたのか。俺なんて翔が泣いたとこなんて見たことねえのにな。へえー」

「こいつもこいつで頭強く打ちすぎておかしいんじゃないか？」

「あの強気の翔が泣くなんて今日は槍でも降りそうだな！」

「いや翔君は元からこうだよ思うよ？」

上からシノア、優、君月、三葉、与一と散々な言い様。

お前らなあ…。と言うも口元が緩んでしまう。

その後は他愛もない話を色々とした。俺が今日中には退院出来ること。俺が眠ってる間に何があったのか、とかな。

その中で特に気になった話が昨日——俺が目を覚ました日に終暮人と何があったかだ。何でも終暮人は新宿での事を俺と優が吸血鬼のスパイだと疑っていたらしい。それを聞き出すために君月と与一を人質にとつて。

けどまだ疑いはあるもののお前程度の實力であれば何も問題は無い、寧ろ急に現れた黒鬼シリーズを手に入れた俺たちでグレンが何かするんじゃないかって。

だけどそれは一緒にいた深夜さんのおかげで何とかならしい。まあ深夜さんにとってはグレンは親友だからな。

親友が疑われるのは嫌なのは俺でも分かる。

そして気になったのはもう一つあった。

何でも鬼呪にはもう一つ上の段階があるらしい。確か…憑依化と具現化だっけな。近々その為の訓練があるとか。

まあそれよりも多分、いや確実に俺は終暮人に呼び出される。あい

つの中では俺が一番スパイの確率が高いんだろうと思う。

そう思うだけで憂鬱だよホントに。何で俺なんかが吸血鬼のスパイ何かやんなくちやいけねんだよ。

「……ホントに厄介だよ」

俺は先程退院して家まで帰り道に空を見上げる。

辺りはもう暗く、夕日もほぼ沈んでいる。

そんな中俺の一言は静寂に包まれ消えていった。

22話 柊暮人

次の日、早速招集がかかった。分かりきつてた事だかあまりに早いだろ…。

少しゲンナリしながらも新宿…中央？軍官舎一号、二号？執務室へと向かって歩いている。

少し歩いていると見た事のある奴が壁に寄りかかっていた。

「よお翔そんなに慌ててどこに行く？」

「別に慌ててはねえけどよ、ちよつとした野暮用だよ」

グレンの言葉で俺は少しだが言いたいことが分かった。まず俺は慌ててなどいない、それを「慌てて」と言うグレン。きつと、柊家の呼び出しに何故駆けつけているのかというようなことを言うつもりか…そして、お前らは俺のものだろ的なようなことを遠回しに言いたいのだろうか。

「それよか俺は仲間も家族も誰も裏切らねえから安心しろ。ここまで育ててもらった恩を仇で返す様なことはしねえよ」

「今日ほどお前を怖いとは思ったことはないな。」

目を見開き、驚きながらいうグレン。

「だが、勘違いしてるようだか俺はお前らの仲間じゃない」

「じゃあ何なんだよ」

「上司、命の恩人、親代わり。これだけ揃ったらお前らにとっては神だな」

「お前が神だったらもうこの世界はねえよ…」

「何ならパパって呼んでもいいぞ」

いい顔しながら何言ってるんだよこいつ。ん…待てよグレンが父親ってことは母親は…。

「お前が父親なら母親は小百合さんか時雨さんだな。結構な大家族だな」

「はっはは、お前はマジで殺す。それじゃあ行ってこい」

グレンに見送られながら俺は軍官舎へと入っていった。

☆

一号執務室に行くべく廊下を歩いている。そこには人一人もなく、何となく不気味に思えた。

そんな中一番奥にあった扉の上の標識に『一号執務室』

とあり、ここかと躊躇いもなく扉を開けて入る。

中は明かりなど着いておらず真っ暗闇だった。入って少し進むとドアが独りりで閉まった。そしてそれに伴い完全な闇によって視界が奪われる。

そしてライトが急につき目の前に吸血鬼が一体現れる。だが、その吸血鬼には鎖で繋がれていた後がある。どうやら意図として放たれた吸血鬼みたいだ。

「(はあ…こういう回りくどい手を使うのか)」

「死ねえ人間!!」

「お前が死ねよ」

俺の言葉と同時に吸血鬼は消滅する。そしてそれと同時にこれらの事を考えると頭が痛む。

「……こういう回りくどいのは好きじゃないんっすよね中将さん」

何処からか現れた三人(一人は終暮人、もう一人は金髪 of 側近の女性、そして深夜さん)の中の一人に向かって言う。

「ほう、こちらに気づいていたのか。まあそれはいい。それでは面接を始めようか」

「ただの面接ならこんなのは要らないと思うんだけど？」

「裏切り者を試す踏み絵だよ。おまえが吸血鬼を殺せるかどうか試した。結果おまえは非武装の吸血鬼を平然と殺したーという事実が一つ増えたな。だが、それだけだ」

「あつそう」

「ではおまえが誰で信用に足る人物なのかについての面接試験をはじめよう。まず、おまえの純粋な剣の技術を見せてもらう。《鬼呪》を発動するな。」

そして、俺に剣先を向ける暮人。

俺も無言で斬月を抜き構える。

「翔一あまり暮人兄さんの言うこと信じない方がいいよ」

始まる寸前に深夜さんが注告をしてくれた。だけどそれを聞いた時には遅かった。

「もう遅いよ。憑依しろ『雷鳴鬼』」

「だろうと思ったよ、『斬月』」

そう俺が言うのと暮人が俺の首元に剣を突きつけようとするのでそれを弾いた。弾かれた事に驚く暮人の顔が見える。そんなことはお構い無しに前蹴りを繰り出す。

それを弾かれた剣を引き戻すことによつて防がれるも追撃はしない。

何故ならばこれは殺し合いではなく唯の面接試験。命を狙う必要は無い。

「ほう、貴様は主家の命令を破るか」

「主家も何も俺はお前に仕えてる訳じゃねえ。俺はグレンの所にいるだ。俺の家族を人質にするような奴の下にはつかねえ」

「はっははは！なかなか面白いことを言うな！それに自分の部隊や上司を家族と呼ぶか。くだらないが面白い。来い、俺がお前を導いてやる」

そう言い手を差し伸べてくる。だか俺はそんなものに興味もなく突き放すように言う。

「お前なんかに導いてもらわなくても俺は生きていける」

「ふん、貴様には礼儀を教えた方が良さそうだな。だが少しでも俺の手を取ろうとしたら斬つていたな」

もう用はないと突き返すように言い滞納し俺に背中を向ける暮人。

俺はそこを敢えて狙い、後ろから斬り掛かる。ギイーン！！つと甲高い音が部屋に響く。俺の剣を金髪の側近が苦しい顔をしながら己の剣で受け止めていた。

「ぐっ……この子強……！」

「これでもかなり力は抜いているだけだな。それでお前は今自分がバカにした仲間を守ってもらわなくちゃ死んでたぜ？」

「はっ。グレンの事を家族と言うだけはある。やはり貴様もグレンの部下だな」

「こんな事のためにお前は俺を呼んだんじゃねーだろ？俺が吸血鬼のスパイかどうかについて聞きたいんだろ」

それを聞いた三人は少しばかりは驚いていた。

「そうだ、朝倉翔。貴様は吸血鬼のスパ「違う」」

暮人の言葉に被せるように言う。

「吸血鬼に家族を殺された俺が何であいつらの手助けをしなくちやいけない？優はともかく俺は恨んでるんだよあいつらを。大切なものを奪っていくあいつらを。それにな終暮人：俺がスパイならとつくにここにいるヤツらを殺してる」

少し怒気を含んで言う。恨んでるなんて言うが一番恨んでいるのは自分自身。何も出来なかった、力を持たないひ弱な己。それは今もだし、前世でもそうだ。

「そうか。では吸血鬼に家族を殺された後グレンはお前らを助けた。事実だな？」

「ああ」

「ならば何故グレンはお前らを救った。お前らはグレンにとって何なんだ」

「……………」

この質問には答えられなかった。グレンにとって俺らは何なのかそんなのは分からない。唯それだけの事だ。四年もいるのに俺はグレンの事を何も知らない。だけどグレンは優の中にあるナニカを利しようとしている。それだけは確実に言える。

「何も知らないみたいだな。さて、百夜孤児院の実態だか、《百夜教》と名乗るかつて、まだ人間が地上で栄華を享受していた時代ー俺たちよりも質が悪い宗教組織だった。そして《百夜教》が運営していた孤児院はすべからず身寄りのない子供を集めて人体実験をしていた。百夜優一郎と同じ孤児院出身も恐らく呪術実験のモルモットだ」

それに対しては何も驚かなかった。昔から実験のモルモットだとしても、俺の中には生まれつき斬月がいた。要はそうゆう事だ。

「ほう、驚きもしないか。だが事實は整理された。もう帰っていいぞ」
そう言い暮人は出口である扉を開け帰っていった。

俺も帰ろうとするど深夜さんが話しかけてきた。

「あはは、いやー、すごく嫌な所でしょう。ここ」

「確かにそうですね。だけど優たちと比べれば何ともないっすよ俺
は」

来た時と同じ扉を開け俺は帰った。

23話く家族く

終暮人との一件があつてからの次の日。俺はあるビルの屋上に来ている。

一人景色を見ながら考えていた。

「俺はどれだけ鬼と混ざってるんだろうな、昨日の終暮人は剣を抜く時『憑依しろ』って言ってたし。それを只の鬼呪だけで防ぐとか人間やめるわ、これ…」

自称的な笑いが少し漏れてしまう。

「(それにいつ話すかな…。前世の事とか言われても納得しないよなあいつら。そして俺は本当にみんなを信じてるのか…?)」

そんな考えが浮かぶだけで顔を俯かせてしまう。確かに俺はは償いきれない罪がある。だけどそれは前世、俺個人の事。それにあいつらを巻き込んでもいいのか？

いいわけが無いんだよな…。

でもあいつらはきつと手を差し伸べてくる。きつとそれに甘えるんだ。

こんなじゃいけないって考えを頭を振って端の方に追いやる。それでも尚頭に浮かぶのは彼女が死ぬ寸前の顔。

「——さん、翔さん！」

「——ああ、シノアと優か。お前らは一緒に来たのか」

その声でやつと気づいた。声をかけられるまで気づかないなんてかなり追いやられてるみたいだな。

「優さんが寝坊して遅れないようにとこのシノアちゃんが起こしに行つてあげたんです！」

「まあシノアが来る前に起きてたんですけどな」

「そうなんですよ！優さん私が起こしに行つたのにもう起きて制服にも着替えてたんですよ！優さん、熱でもあるんじゃないんですか？」

「俺が早起きしたら悪いのか」

そんな二人の会話を見て微笑ましく思える。俺もよくこんな会話をしていたな。まあ大体は起こしてもらつてたけど…。

『翔ー！朝だよ！』

『……あと五分』

『いつもそうやって起きないでしょ！そぐれくなくらく起きない翔にはお仕置きするぞー？』

『おはよう、ほら早くしろよ遅刻するぞ？』

『あーちよ、ちよつと待ちなさいよ！何今の!?!そんなにイタズラされたくないの!?!』

『お前のイタズラはお仕置きに近いからだよ！』

『それは…起きない翔が悪いの!』

「つーかグレンのやつ遅くねーか？」

そんな優の一言に現実へと思考が戻ってくる。

「あ、ああ。確かに。まああいつも会議とか何だで忙しいんだろ」

俺がそう言うのとシノアがジッとこちらを見てくる。

「な、なんだよ」

「…翔さんがグレン中佐のこと庇うなんて珍しいなって」

「そ、そうか？」

「はい」

シノアの視線が突き刺さる。痛くないはずなのに痛い…。これがあれか目だけで人を殺せるってやつか。

……流石にそれは無いか。

「あそこにミカがいるかな」

優が小さく呟いた一言は俺の耳にしっかりと届いていた。優が見ている方角は西。京都のある方だ、そこにミカがいる。

「なにを二人して見てるんですか？」

「西だよ」

聞いてきたシノアにそう答える。そして次は優が喋り始めた。

「…ミカがいるのはきつと西だろ？吸血鬼の都市は…俺が捕まっていた場所は京都の地下だったと聞いたからな」

「ふうん、新宿から京都が見えるなんて優さんは目がいいですねー」

「いや、さすがに見えねーけどさ。でも…俺は必ずあいつを…家族を

取り戻しに行くんだ」

「家族だから…ですか」

一瞬悲しそうにするシノア。その表情に優は気付いていないようで、笑いながらシノアに向けて指をさす。

「あ…吸血鬼んとこ殴り込みに行く時はシノア…一緒に頼むな?」

「えー私も行くんですか? まあいいですけど。それに翔さんも行くんですよね?」

「ああ、吸血鬼になっても家族だ。だから助ける。でもそれには力が足りない、だから手伝ってくれシノア」

そう言うとシノアは「いいですよ」と言いながら俺の横に来る。何かシノアの顔は笑顔で、見ているこっちも癒される。俺にはそう感じられた。

その時扉の開く音が聞こえそちらを見るとグレンが入ってきていた。

「なんだ? おまえら、イチャついてんのか?」

「なっ!?」

「これのどこがイチャついてるんだよバカグレン」

グレンの一言に顔を赤くするシノア。何で赤くなるんだそこで?

「まあいい。って言うより俺、眠い、だるい。だから帰っていいか?」

「ぎっけん! はやく憑依とか具現化とか教えろ!」

「優の言う通りダメに決まってるんだろ。お前会議のせい頭おかしくなってるんじゃないか?」

「はあ、優うるさい。そして翔はしばらくから覚えとけ。別に俺が教える意味はねえんだよ。シノアと三葉はやり方しってるしな」

「へ? そうなの?」

「まあ、教えられますけど…私、普段鎌持っていないでしょう? でもどこからともなく『鬼』と『武器』を具現化しちゃいます。シーちゃん出てきてー」

シノアの言葉に応じて鎌がシノアの手に現れて鬼がその後ろに具現化する。

「おー…んじゃこれが『具現化』か?」

「おまえが次の段階に進んでいいか見てやる。刀を抜いて『鬼呪』を発動してみろ。俺も普通に『鬼呪』だけ発動する。斬り合うぞ」

「お、まじで？ちよつと久しぶりだな」

そうして二人は刀をそれぞれ構える。グレンは刀を前に構え、優は腰を低くして横に刀を構えた。

「俺はどうすりやいんだよ」

「さあ？優さんの行く末を見守りましょう」

そして、同時に聞こえたのは刃と刃が重なり合う金属音。グレンの動きに優はちゃんについていっておりほとんど互角だ。

「へっへーん。どうよ、もう昔みたいに差はねんじゃねえの？褒めてもいーぞ？」

「と…今のが『鬼呪装備』だけの力を使った場合。で、次は鬼を憑依させる。俺に憑依しろ『真昼』」

優の自慢気な言葉を無視するグレン。そして、グレンの雰囲気ガラツと変わる。グレンの後ろには女の人の影が見える。全ての霧が女の髪にも見える。そして霧は炎のように立ち上がる。

「……真昼？」

不意に隣で声がした。シノアの方を見ると驚いたように目を見開いている。そんなシノアをよこにグレンはさらに続ける。

「一撃でも受けられたら褒めてやるよ」

そしてグレンは刀を振る。それを真っ正面から受け止めようとしていた優はその衝撃により屋上の外へ吹っ飛ぶ。

「ちよ…うおお嘘だろ!?!うわわっ!!」

まあ、優のことだ落ちてもへっっちゃらな顔で戻ってくるだろう。そして屋上は優がいなくなったためか静かになる。

そんな静けさの中シノアの声が響いた。

「しーちゃん、殺つちやつてください」

「おいシノア?!」

シノアが鬼を具現化しグレンに攻撃をする。その鬼をグレンは簡単に消すとそれを狙っていたかのようにシノアはグレンの首に鎌をかけていた。

「おい翔、止めようとするにも遅い。そんなんじや守れるもんも守れない」

その状態でよく評価出来ましたね……。まあそれよりなんでシノアが攻撃したか何だ……。けど……。

「まさかと思うが『真昼』ってあの?」

柊真昼。柊の次期当主とまで言われた天才。八年前に鬼呪装備を完成させた張本人。

俺が知ってるのはその位のこと。何故か授業で柊真昼の話になると小百合さん、顔が険しくなるんだよな。

「はあ、で?シノア、なぜ止める?殺りたきや殺れよ」

「私の武器の長所は特殊能力ですから、近接じゃ全然中佐にかないません。どうせ簡単によけちやうんでしょ?」

「お前にだったら殺されてもいい」

「柊 真昼を……。私の姉を殺した罪滅ぼしにですか?その刀には私の姉が入っているのしょう?さつき姉の名前呼んでましたもんね」

それは初耳だった。柊 真昼という名前と死んだ、というのは知っていたが……。グレンが殺したとは。だから小百合さん、少し辛そうに見えるのか。

「真昼はもういない……。あいつは『鬼』になり『鬼呪装備』を完成させて世界を救ったんだ」

「あはは、冗談言わないでください。姉は世界なんかに興味のある人じゃなかった。ただ、ただ、あなたに恋をしていただけ……。決して結ばれない運命のあなたを欲しがって鬼に取り憑かれてしまった。なのに8年前……。世界が突如終わっちゃって……」

8年前、抗ウイルス薬を持ってなかった大人たちは全員死亡……。大地には人間を襲う『ヨハネの四騎士』がどこからともなく現れ……。人口激減による血液不足を恐れた吸血鬼が人間を管理し始めた……

「誰かが言った。それは破滅だ、黙示録だ。増えすぎた人間に神の罰が下ったのだ。と……。もしも姉が『鬼呪装備』を完成させていなければ、本当に人間は滅びていたかもしれない。恋する乙女が一転まるで救世主ですよ。でも、彼女は殺された、研究に取り憑かれて鬼に成り果

てたからそしてその彼女を退治したのがー姉のかつての恋人一瀬グレン」

そして、シノアは語り終えるとグレンの首に鎌の先端を向ける。だが、それだけですぐに鎌を下ろした。そしてまた続ける。

「とういことに表向きはなってますがーもしかして、姉はその刀の中でまだ中佐と一緒にいるんじゃないですか？中佐は姉に取り憑かれている」

「……だったらどうする？」

「さて、どうしましょう」

「そもそもおまえらはそんなに仲のいい姉妹だったか？」

「……いいえ、私は柊家ですよ？家族っていうのがなんなのかもわからず育ちました」

「…ならもう黙れよ」

そうグレンがため息を吐いて言う。そして屋上の扉からカンカンという音も聞こえ始める。優が戻ってきているのだろう。

その音を聞いてシノアは笑う。

「ですが…血が繋がってるわけでもない家族にあんなに必死になってるのを見せられちゃうとちよつと…友達や仲間をもう少し大切にしてみてもいいかなあとか思いました…：優さんを利用して…：中佐の目的はなんですか？姉が…いえ『鬼』が刀の中から命じてる？中

「もしそれが優（さん）のためにならならいことならちよつとやめてもらうぞ（やめてもらえませんかねえ）」

再びシノアが鬼を具現化する。そして俺も体の底から力が溢れてくる。前髪の一部が白く染まる。

「なんだ、お前らそろって…：翔、お前のそれは何だ？」

「さあな、俺にもわからん。ただ俺の鬼は憑依型ってだけは分かる」俺がそう言ったあとにバンツと音を立てて扉が開く。

「やっと戻ったああああ!!外壁に刀刺して戻ろうとしたら壁に傷つけんなって衛兵にすげえ怒られたんだけど！

!!」

入ってきたのはもちろん優である。

「あはは。優さんはいつも間抜けですよ〜」

「うお!? 翔なんだよそのカツコ!! それが憑依なのか!? なんでもう出来んだよ!」

優は俺に指で差しながらそう問い詰めてくる。

「いや優、俺にも全くわからん!」

「クソツ! つか俺の刀はどっちな? 憑依? 具現?」

そう聞いてくる優と話している時グレンは出していた刀をしまう。それを見て優がまた騒ぐ。

「あ! なんでおまえ帰ろうとしてんだよ!!」

「あれ? もう中佐がいる」

「あ、ほんとだ」

優が騒いでいる時与一、三宮、君月の三人が丁度屋上に到着する。

「グレン中佐: 早いですね。確か集合時間まで、まだ30分以上あるはずですが: あたしたちの思い違いでしたでしょうか?」

三葉の言葉にシノアがグレンに向かって笑う。

「: あれえ、私達が聞いてた集合時間と違いますねえ。まさかこれ、私に姉のことを伝える会だったとか?」

「俺の凄さを伝える会だよ。まずシノア、お前の姉は死んだもう戻らない。鬼になって刀の中にいるが制御できてる、俺はあいつに取り憑かれてない。次に優」

「お?」

「お前はもつと強くなれる」

「まじかよつ!!」

グレンの言葉に嬉しそうな顔をする優。

「《鬼呪》の使い方はシノアや三葉に教えてもらえ、別に俺じゃなくてもできる。それに翔にでも稽古付けてもらえ」

「え、俺優に教えられることなんて何も無いぞ?」

「おお! 俺に稽古してくれんの!? 俺、翔と刀交えたことないからワクワクするな!」

俺の言葉を聞かずにそうはしゃぐ優。そこまで言われたらやらな

いなんて言えない…そして、そんな俺たちをほっというてグレンは帰ろうとする。

「ちよつと待てグレン。帰るなら一つ教えてくれ。終 暮人という奴は俺達があゝの孤児院で人体実験の材料にされてたつて聞いたんだけど、あいつの言つたことはほんとうか？俺はなんかの実験体なのか？俺の家族も…ミカやあそこにいた孤児院の仲間たちもみんな実験に使われてたのか？それ分かつておまえは俺を利用しようとしたのか？」

「…そうだ、利用価値のない奴を助ける余裕はないからな。で、それ聞いてガキが怒るのか？」

そんな優とグレンの会話に重い空気が漂う。そして、三宮たちもその話を静かに聞いている。

「いや、お前が俺を助けてくれた事には変わりはない、だから俺が気になるのは俺はお前の役に立つのか？つてことだけだ。…おまえには俺が必要か？必要なら同じ孤児院だったミカのことでも欲しがってくれるか？もしそうなら…俺はおまえを全面的に協力する」

「お前は俺たちの親なんだろ？ならミカを助けられる方法を教えてくれ」

「優くん…翔くん…」

与一が心配そうにこちらを見る。そしてグレンは俺たちの目をしっかりと見て言った。

「当然の事を怒鳴るな馬鹿が…俺も含めてここにいる仲間はまだ家族だ。ならみんなでおまえらの家族を取り戻せばいい。じゃあ俺は帰るぞ」

そう言つて帰つていくグレンを見送ると優が「よし！」と急に声を出す。

「そうとなつたら、さつそく『鬼呪装備』の訓練始めようぜ！シノア三葉教えてくれ！」

「ふむ、ならまず私のことは先生と呼べ」

「いやだね」

三葉の言葉に君月が即答す

「なんだと!!」

「ちよつと〜」

君月に対してそう怒る三宮…を止める与一。そんな中俺はシノアの方を見る。さつきからシノアはなにかを考えているのかずつと無言のままだ。

「中佐は信じられても姉は…平気で家族を裏切る人なんですけどねえ…」

「そうか…。でもあの刀だけはなんかやばい気がする」

「やはりそうですか…まあ翔さんの鬼呪装備も中々ヤバいんですけどねえ」

「だよな…自覚はしてます」

そして会話が途切れる。その沈黙を優が破った。

「どうしたおまえらー?」

「なんでもねえよ（ないですよ〜）」

「じゃあさつそく『鬼呪装備』の訓練をはじめますか?」

「おう!」

そしてこれから終シノア隊の修行が始まろうとしていた。

24話く訓練く

俺たちは例の『鬼呪装備』の訓練のため城壁の外まで出てきていた。

「おい与一。そつからバケモノ見えるかー?」

「んく待つてね優くん」

そう言つて信号機の上にいる与一が答える。何でいるかつて?そんなの『ヨハネの四騎士』を探すためだよ。その為にいま弓を構えている。その時、光の紋章が目近くに現れるのでそれを使って探せるのだろう。いわゆるスコープと同じ役だろう。

「(便利な能力だなあれ)」

「このまま進むと《ヨハネの四騎士》六匹と遭遇しそつだよ」

「だつてさ、どうする殺るか?」

与一の言葉を聞いて優が指示を煽る。そして、考え込むシノアや三葉に俺は提案した。

「案外与一だけで大丈夫じゃね? いけるか与一?」

「うん。これくらいの距離なら……敵を撃て《月光韻》みんなを守るよ」

その言葉と同時に与一の後ろに鬼が現れる。どうやら、すでに与一は具現化ができるようになっていたらしい。

そして、与一の攻撃によりヨハネが五匹が殺られる。しかし残った一体がこちらへと向かつてくる。

「おい!! 一体すごい勢いでこつちに来んぞ!!」

優がそう言うが慌てる必要は無い。試したいことがあるし丁度いいか。

「任せろ。やるぞ斬月。……月牙……天衝!!」

俺の放つた月牙で息絶える。初めて自分の意思で撃てたな。これまでは全部暴走してる状態でやってたからな……。

「…なつ、与一おまえ外に鬼出してなかつたか!!?」

「へ? あ、うん出てたけど」

「おいシノアどういふことだよ!! あいつ具現化できんじゃねえか!! 与一だけに修行したのか?!」

「あーいえ、与一さん達はもともと《鬼呪》の制御能力が異常に高かったので自力で覚えちゃったみたいですねえ」

「何で出来るようになったんだ与一？」

「あつ、それはね夜寝る時とかに鬼といっぱい喋ってたからだとおもうよ」

俺の質問に少し考えて答えた。

「はあ？俺の鬼は乗っ取ろうとする時しかでてこねえんだけど？」

「え、そうなの？僕昨日は何色が好きなのかって話をしたんだけど…」

「へえ、それを聞きやいいんなら…おい阿朱羅丸おまえ何色が好きなんだ？」

そう刀にポンと手を置き聞くがもちろん反応があるわけもなく、返ってきたのは沈黙であつた。

「無視すんなああああああああ!!」

一人で叫んでいる優を見て君月は「うるせえ奴だな」と呟くとそれが聞こえたらしく優が君月に向かって聞く。

「あ!?!おまえは鬼と話せんのかよ！」

「え？あ、いや…もちろんだ」

その場にいた優と当人以外は思っただろう。嘘がバレバレである、と。ここまで嘘が下手くそなやついるか？

「じゃあやってみるよ」

「じゃあ、見てろ。おい《鬼箱王》答えろ、おまえの好きな色ってなんだ？」

——シーン——……

「ほらあ!!」

「その顔やめろ!!」

優の顔を見るとお前も俺と同じ落ちこぼれ仲間だ、って顔してる。確かに腹が立つ。

優は君月に近づくと大丈夫だと言いた気な顔になりポンツと肩に手をおく。

「触んな」

「いい加減にやめい」

俺が止めに入るとシノアと三葉の会話が聞こえた。

「どうですみっちゃん?」

「ここなら大丈夫だろう。修業に失敗して鬼が暴走した時は怖いが…」

『暴走』の一言にみんなが俺と優を見る。優の方はどうした? って顔をしてるけど俺は別だ。俺の場合は暴走したことを覚えてるから顔が自然と俯いてしまう。

「ん?なんだよ」

「いや、なんでもない」

「はいはい。じゃあ『鬼呪装備』の本格的な使い方の講義始めましょーか」

重くなった空気をシノアが話を変えることで何とかしてくれた。

「さっきの与一さんを見たとおりにアレが具現化です。与一さんは自力習得でしたが、これはそんなに簡単ではありません」

「おまえまじですげえな」

「いや、えへへ、それほどでも…」

優の言葉に照れる与一。

「ちなみに翔さんも優さん達よりも一歩進んでいます」

「へ?」

「はあ?!」

優と君月の声が重なる。シノアは何を言ってるんだ?まさかあれの事か?

「何で翔だけ進んでんだよ!!ちやつかりお前らだけ修行してたんだろ?!」

「…ちゃんと説明してもらおうか」

「ハハハ、わかりました。じゃあ翔さんアレお願いします」

「ハイハイ……」

軽く返して目を瞑る。イメージするのは内から出るものをうまく調節するように。簡単に言うとな蛇口を捻って、水の強さを調節する、みたいにな。徐々に蛇口を捻っていく。

そうすると全身から力が溢れるように感じる。それに伴って俺の

前髪の左側が白く染まっっていく。

「ハアハア……。これでいいか？シノア」

俺が聞くとシノアは笑顔でお礼を言った。それ以外の四人は呆気からんとしていた。

優は一度見てるはずなんだけどなあ……

「翔さんのコレは『鬼呪装備』それも憑依型の一步手前の状態です」

「何で翔は出来るんだ？鬼呪を手に入れたのも俺たちと変わらないはずだ」

君月が最もな疑問を投げた。

「君月さんの言う通り何ですよねえ。でも忘れてませんか？翔さんは二度鬼に乗っ取られているんです。私はそれが起因してると思います」

「まあシノアの言う通りだと思う。俺の場合は『仮面』も同時に使ってるからその分鬼の力を余計に使ってるんだ」

「ね、ねえ」

恐る恐ると与一が聞いてきた。

「その、『仮面』ってなに？それも鬼の力なの？」

「まあそうだな。四年前から使える鬼の力の副産物みたいなもんだ」

「副産物？それに四年前だと？どういう事だ？」

今まで口を開かなかった三葉が聞いてきた。

「まあそうだな、俺には生まれつき鬼がいた。その力に気づいたのは世界が滅びてから。鬼呪装備が無いなか、俺は自分の鬼の力を使おうとした。そしたら『仮面』の力が使えるようになった。それだけだよ」俺の話聞いてみんながみんな驚いている。シノアと優が特に驚いていた。

「俺の事よりも二人の鬼呪ついて説明してくれ」

「…はい」

少しばかりシノアに睨まれた気がするが気のせいキノセイ。

「翔に出来るんなら俺達もすぐできるんじゃないの？」

「いや、無理だ」

優が言うことに君月も同じ考えだったのか肯定していたが、それを

三葉がぼつさり切った。

「優と君月は力ばかり強くてまるで考えなしだからそううまくいかない」

「あ？なんだよそれ」

「いえいえ、みつちゃんと言葉は褒め言葉です。そもそも力が強い凶暴なタイプの鬼はなかなか言うことを聞いてくれませんので：そのタイプは『憑依化』のタイプが多いんです。翔さんが特殊すぎるんです」

まあつまり普段から武器を持ち歩いてる俺らは『憑依化』であるという事。それで何やらトゲが含む言い方のような……。

「まあ、《憑依》は力が強い分不便で：武器を出したり消したりするとすら簡単に出来ませんしー」

「そもそもこれ消えるもんだっけ？」

そう鬼呪装備を指差している優に三葉は自分の鬼呪装備を出して言う。

「じゃあ、いつもあたしはこのでかいのを背負っていたか？」

「そう言われるとそうなんだけどさあ」

「鬼の悪意が強すぎる場合凶暴すぎてなかなか消えないんです」

「……悪意ね。阿朱羅丸お前性格悪いのか」

優の言葉にフツと笑ってしまう。

「優と似て素直じゃ無いだけだろ」

「うっせえよ」

「あはは、じゃあ次の段階いきます。優さんみつちゃんと斬り合っていてどっちが強いかやってみてくださいーい」

その声を聞いて三葉が優と距離をとり武器を構えた。

「この距離を保って戦うぞ。じゃいくー！出てこい『天字竜』！」

「まじで?!この距離で攻撃できんの?!」

そして三葉は斧を振り下ろす。その斧は地面に食い込むがそれ以外なにも起きず……

「……え？ってなんにも……」

刹那、優の体がゾクツと動いた。見ているこちらでも感じ取れる寒

気いや殺気——そして地面の中から出てきたのは数体に及ぶ鬼——その鬼は優を囲むようにしてでてきた。

「おわっちよっ……!」

「はい、隙あり〜!」

動揺する優にさらにシノアの攻撃が加わる。

「やるぞ、阿朱羅丸——力を貸せ」

優の顔に鬼の痣が浮かび上がったと思ったら優はその一振りです葉の鬼を一掃した。

「うっわ、いまの全部処理しきつちやうんですかあ…バケモノですね」「んーでもちよつとやばかったな」

「鬼に特殊能力を使わせるタイプーそれがさっき見せたものです」

シノアの説明に納得する優。その中で君月が質問する。

「だがあんな力があるなら何故吸血鬼との戦いの時にださなかった?」

「出せなかったんじゃないのか?」

「ええ、翔さんの言う通り出せないんですよ。鬼を体から出すと体内の『鬼呪』濃度が下がって宿主が弱くなってしまいうから…あく見せませす」

そしてシノアは鎌を俺へと向ける。

「では、翔さん。刀でわたしの鎌を押ししてください」

「わかった」

俺はシノアに言われたとおり二人の武器が一直線になるようにあわせる。

「じゃ、わたしは鬼を具現化しまーす。でてきて、しーちゃん」

鎌から鬼が出てくる時シノアは俺の押す力により吹き飛ばす。なるほど…自分が弱くなるということとはこういうことだったのかと一人納得する。

「大丈夫か?シノア」

「翔さん、ひどーい」

「えっ?」

わざとらしく嘘泣きをするシノア。

「……シノアの馬鹿な芝居は置いておくとして、まあこういうことだ」「身体能力で勝る吸血鬼を相手に近接戦での弱体化は命取り……か。だから具現化は使いにくい?」

君月は三葉の言葉でそう考えをまとめた。

「まあ、ケースバイケースです。超近距離を守ってくれる騎士さんがいればー」

「じゃあ、俺と君月そして翔で仲間を守る。そうすりゃ俺たちは強くなれる。そういうことか?」

「あはは、そうです。三人がわたしたちのナイトになってくれれば……じゃあ、次の段階……今度は憑依です」

そう言い、立ち上がり説明を始めた。

「まあ、おまえはあたしの鬼を斬った時それっぽいことしたがな」

「あれかあくあれ憑依なの?」

「いえ、さらに先にいきます。さっきのもう一度やってみてください」

「力を貸してくれー阿朱羅丸」

さっきと同じように優の顔に痣が浮かび上がる。

「その状態で自分の体を切って、武器に『血を吸え』って言うてみてください
ださい」

「吸血鬼みたいだなそれだと」

「まあ鬼と吸血鬼は関係が深いですからねえ。それは長くなるので機会があればお話しします」

「ふうん、じゃあ、まっ……俺の血を吸え阿朱羅丸!俺と強くなろうぜ
!」

優の手から血が流れる。目も赤く染まり――

「始まった!!暴走する場合はすぐ来るぞ!!戦闘準備!」

三葉が叫ぶ中、優はその場に倒れた。

「……これ、どうなった?また暴走すんのか?」

「さあ?まだわかりません。鬼と融合出来るまでまだ二十時間くらいはかかりますからねえ」

「二十時間!!?」

俺と君月の声が重なり響く。その声にヨハネに気付いたかれたと

不安になるが、大丈夫そうだ。

「…その間、仲間のあたし達がいいつを見守るんだ」

「だから一人じゃ出来ないのか…」

「そーゆうことです。ではでは、ここで夜明かしになると思うのでー焚き火の用意とかしましよーかー」

「…なあ、ちよつといいか？おまえらさつきから仲間仲間行ってるが…正直 俺はその言葉を信用出来てない」

突然に君月が切り出してきた。その声色は冷たく、その言葉に誰もが真剣な顔つきになり黙る。

「なんの話だ？」

「俺と与一は、軍の上層部ー終の奴らに尋問を受けた。聞かれたのは『あの戦場で何があったか』だ」

「で、俺は何も知らないで通した正解か？」

「それが正解でしょう」

「だが、いつまで秘密なのが正解だ？こいつは暴走したことも、シノア、おまえの事を本意じゃなくても殺そうとしたことも、翔の腕を吹き飛ばしたのも、まだ知らないだろう？」

「僕もそう思うよ、だって僕ら仲間だよね…？」

与一も君月と同意見でシノアの方を向く。

「ならこの訓練が終わったらみんなの話をしよう。俺もお前らに話さないといけない事があるから」

「…そうですね。優さんが目を覚ましたら全部話しましょう。それは優さんのことだけでなく、わたしたち仲間みんなの話をー」

その言葉を聞いて俺たちは安心しーそして…

『真実を知ることとなる。歯車は再び動き出し狂った運命は更に狂い出す』

25話〜二人の訓練〜

夜になり周りは冷えてくる。そんな中、焚き火を囲うように俺たちは座っていた。ある1名を除いて。

「ん〜、ちよつとこれ眠つてると寒い気温ですかねえ〜」

「優くん風邪引いちやうかな?」

「ふむ、毛布とか持つて来ればよかったか?」

風邪を引くというのは無いと思うが…念の為、毛布を取りに帰った方が良さそう。そう思い動こうとするとその前に君月が優の体に自分の制服をかけてやる。

その状況に誰もが驚き目を見開く〜なんと失礼な行動だろうか…。

「…なんだよ。その顔〜いや俺は火に近づきや寒くないしそれに〜」

と、どんどん言い訳してみたものを並べていく君月。

「別に何も言つてませんけど〜」

「…そ、そうか?」

「はい」

そして君月は火に当たりに行く。なんとも微妙な空気…俺はシノアの方を見る。そこには何かを思いついたように不適に笑うシノアの姿が…シノアは三葉に近づき肩を掴む。

「おわ、なんだ?」

「なあ、寒いだろ?俺の上着を着ろよ」

「へ?へ?」

急なシノアの芝居に動揺する三葉。だがすぐにシノアのやりたいことが分かり…

「やだ、君月くん優しい…すごく優しい…優しいアピールが凄おい…」

と乗る。そしてその芝居はさらに続く。

「凄いだろう?」

「でも私騙されないうってみんなに優しいんでしょ?」

「違う優!!俺が好きなのはおまえだけだ!!」

「えっ」

「優！」

「君月くん！」

そして抱きしめあう二人…もとい優と君月―

「つづく」

「つづくじゃねえよ!!」

それを見ていた君月は二人に向かって叫ぶ。それを無視して二人はさっきの芝居について話始める。

「つたく、与一、翔こいつら殺していいか？」

「あはは、でも君月くんが優しいのは本当だと思うけどなあ。」

「そうだな。基本的には優しいと思うぞ」

そう君月の優しさについて語っていると…

「危ない！アピールに騙されないで二人とも!!」

「そいつは危険だぞおまえら？」

そう言っただけその話を引きずる二人。

「はああああ？ほんとなんなの？」

「だって、暇なんですよーん」

「うむ、確かにー君月何か芸をしろ」

「てめえがしろよ」

「それが上官に対する態度か!?!」

「ああ!?!」

「なんだ!?!」

無茶振りをさせられる君月をみていると、さすがに君月が可哀想に見えてきた。まあ、楽しんらいだらう。

「でも…もうだいぶ経ったよね？優君大丈夫かな…?…?」

与一の言葉に騒いでいた二人も静かになる。

「鬼呪の訓練って二十時間なんだよな？もう過ぎてるぞ?」

「多分難航してるんだらう。優の鬼呪装備の強さからすると中にいる鬼は相当タチが悪いんだらう」

俺の問いに三葉が答えてくれたが次に君月が聞いた。

「優は眠ったまま何やってんだ？」

「心の中で話をしているんですよ」

君月の問いにシノアが答える。

「鬼とか？」

「ええ。鬼呪で押さえて込んで拘束を少し緩める。鬼の力をたくさん出せるようになればより強くなれますから」

「そんなことしたら暴走するんじゃない？」

「いやまだだ。心の中で本格的に接触したら明確な反応が…」

そう言った直後、優の体がドンツ!!と動いた。

「始まった…？」

「よし、みんなが優が怪我しないように押さえるぞ！」

そう三葉が指示を出したときオオオオオと近くで人ではない声。

「ヨハネの四騎士かー。こんな時に…！」

「俺がバケモノは全部潰してやるだからおまえらは優を守れ」

「君月さん、あまり離れないでください。優さんが暴走したら大変なので…」

「わかった、近くで処理する」

そう言って駆け出して行く君月。

「おい！翔！刀を持っている手を押さえろ！」

「わかった」

そしてそれぞれが優を押さえ込む。その手から逃れようと暴れる優。

「…っ」

「まだだ、収まるまで持ちこたえろ！」

しばらくして、優の動きが止まる。

「成功したのかな…」

「気を抜くのは早いかな」

君月も早くに戻り、みんなが優の顔を見る。すると優が丁度目を開けた。

「ゆ…優!!目が覚めたか!?!」

君月は優に呼びかけて、それぞれはホツとした顔になる。

「…あれ、もしかして俺迷惑掛けた？」

「ううん、優くんおかえり」

「うん」

与一が喜びながらそう言う。優は少し照れたのか顔を赤くして下を向く。そこに君月がたずねる。

「成功したのか？」

「当たり前だろ？」

「ならいい。」

平気そうにしている一番心配していたのは君月なのかもしれない。と心の中で思う。俺としては微笑みの目を向けていたのだが、君月にとってはそれが嫌だったらしく、「その目はなんなんだ」と言われてしまった。その声に「なんでもねえ」と返す。

「しかし、ちよつと疲れたな。君月の修業は来週にしよう」

「ああ？三葉ふざけんな！すぐやれよ！」

「えーすぐはちよつといやだなあ」

「あ、てめ与一まで!!」

喚いている君月を横に俺は優に話し掛ける。

「鬼とは仲良くなれたか？」

「わかんねえけど、仲間になってやるって言つといた」

「ははっ、お前らしいな」

そして無事、優の修業が終わり次は君月の修業が始まる。

「なあ、今は君月の奴落ち着いているしき。翔…俺に稽古つけてくれ！」

「俺、優に教えられることなんてないぞ？」

「この通りだ！」

そして優は前屈みになって頭の上に手のひらを合わせて「お願いし

ます」と言ってくる。

「まあまあ、翔さん。やってあげたらどうです？」

「しようがねえか…じゃあ、優、刀を構え…っってもう構んのが早えな…」

「早くしよぜー！」

じゃあつと刀を構える。

「言っておくけど、これは稽古だから鬼呪の発動は無しだかな？」

「分かってる」

「じゃあ、来いよ」

俺の言葉の後、優がいた場所には土煙だけが残った。そして、すぐ目の前に優が現れる。優は刀を横に振ってくるので、それを強めに弾き、瞬歩で背後に回り斬月の柄尻で後頭部を軽くたたく。

「終了つと」

誰が見ても完全勝利である。

「くっそく、もう一度だ！てか何でもう俺の後ろにいんだよ!!絶対鬼呪使つたる!!」

「使つてねえよ。今のも身体能力だけだよ」

「もう一度だ！」って言うに優に「はいはい」と軽く返事をして最初の位置に戻る。

再び接近してくる優に少し呆れながらも上段から振るわれると思う刀を受け止めるべく構える。その瞬間に優が消えた。そう思った直後に横っ腹に衝撃を感じた。振り切られた衝撃で少し横に飛ぶも斬月を地面に突き立て衝撃を抑え、優を見る。

「よくあの一瞬で斬月の死角に入ったな」

そう、優は斬月を構えた瞬間に判断したのだ。斬月は形状が長く、幅が普通よりも広い。一瞬であるが下に入られると俺の視界を遮ってしまう。そこを突かれたのだ。それからの刀の攻撃ではなく、初動の速い格闘にしたのも中々だと思う。

「流石に刀が大きいから見えないんじゃないかなって思ったんだ」

「いやそれでもだ。流石は優だな」

俺が褒めると「やっぱり？」と言って笑った。とそこで、さっきま

で落ち着いていた君月が暴れ始めた。

「おい！お前ら手伝え！」

押さえつけていた三葉が苦しそうに言う。急いで君月の所へ行きそれぞれが押さえ付ける。何時間経っただろうか。

「シノア！これも俺の時と一緒か!?!」

苦しそうに奇声を上げる君月を見ながら優はシノアに聞く。その言葉にシノアは首を振った。

「もう、三十時間も経っています。まずいかもしれません。」

「鬼に体に乗っ取られる可能性がある」

「いや大丈夫だ。君月ならきつと戻ってくる」

「翔さん…ええ、大丈夫でしょう。信じてあげましょう。君月さんを…」

そして、俺たちは君月を押さえ付けている手にさらに力を込めた。

「おい、まだ終わらないのか！」

「こればかりは…待つことしかない…優、もう少しの我慢…」

「来い『鬼箱王』」

それは、突然だった。君月の声が聞こえたかと思うと君月は優にむけて刀を振る。

「来い阿朱羅丸!!」

優はその攻撃を刀で防いだ。

「ちよ…君月くん暴走しちゃったの!?!」

「…いや、目が覚めた。正気だ」

「ならなんで、斬りつけてくんだよ!?!」

「憑依後、お前と俺、どっちが強いか決める必要があるだろ?」

君月はそう言って不敵に笑う。その提案に優は乗り刀を構えた。

「おい、やめろ。勝手に戦…いいじゃないです、みっちゃん。みっちゃんもどっちが強いか気になるでしょ?」

シノアが三葉止めると優たちの方に目を向ける。

「開け!!阿朱羅観音!!」

優の周りに数本の刀が現れた。それを出したまま、優は君月に向かって走った。攻撃を仕掛けられた君月はその何本もの刀による攻撃をなんとか防ぎきる。

「…鬼箱に入るまでの九つカウントを始めろ、鬼箱王」

君月は左手を上にとげるとその上に大きな箱が出てきた。その箱はーいやその箱にいる何か箱を開けながら数を数え始めた。優はそれを見て後ろに下がる。

「おい、逃げてんじやねえよ!!?」

「うるせえ、だつてそれ絶対やばいやつだろ!」

「…ちっ、勘のいい奴」

二人して騒いでいるのを横に俺はシノアに話し掛ける。

「二人とも特殊能力使ったな」

ええ、まああなたを含めて彼らたちはグレン中佐の秘蔵っ子ですから。それに次は翔さんの番ですよ」

「ああ、分かつてるよ。迷惑かけるけど頼むな」

「はい、任せました」

そう言い俺は斬月に血を吸わせ俺は気を失った。

26話 く幼馴染く

目を覚ますと辺りは真っ暗だった。そうか、今斬月の所に…と思いつ出す。少し歩くとペチャって音が足元から聞こえた。

おかしいと思うと同時に辺りが明るくなり、足元には孤児院のみんなが赤い液体を流しながら倒れていた。

「…………ふざけんなよ」

それだけならまだ良かった。あろうことにかみんは血を流しながら立ち上がり皆が俺を見る。

「私たちを助けられなかったのに何で呑気に生きてるの?」

「僕まだ死にたくなかったよ」

「復讐も全然してくれないし」

そう言いながら俺に近づく。

俺も歩み始め、次第に距離は目と鼻の先となる。

目の前にいるのはこの中で最年長の茜だった。

「翔も優ちゃんも私たちを見殺しにしてくせによく笑ってられるね」

「私達がどんな気持ちで殺されたか分かる? 分かるわけないよね生きてる翔たちには」

そう言い俺の服に縋ってくるかのように掴んだ。

「ねえ! 分かるわけないよね! 何で私たちが死ななくちや行けなかったの?!」

そんな茜を見て俺が出せた言葉はこれだけだった。

「…守ってやれなくてごめん」

その言葉を聞いてか茜たちはは? って顔をしてる。

「俺が弱かったばかりにみんなを死なせちゃった。俺はみんなを守れるって過信してた。この力があれば、って。遅くなっちゃったけど…ほんとにごめんな」

謝ると同時に茜のことを抱きしめていた。そうすると茜も抱きしめか返してきた。

顔を見ると先程の恨みがこもった顔ではなくいつも見ていた笑顔に変わっていた。

「今更謝らないですよ。私達はもう死んじやって翔はまだ生きてる。だから私達が生きれなかった分も優ちやんと生きて」

「ああ、わかつてる。ありがとう茜」

その言葉にみんなが笑顔を浮かべて遠くへと消えていった。

「……それでこれは何なんだ斬月!!」

「ひゃっははは!!傑作だったぜ翔!」

俺の怒鳴り声とも共に甲高い笑い声が響いた。それに伴い俺の見ている景色が摩天楼へと変わっていった。

そして目の前に現れたのは白いオレ、斬月だ。

「……ごめんな、ってどの口が言ってた?!幼馴染すら守れなかったお前が!」

「うるせえ、もう一度その口開いてみる?殺すぞ」

「ひゃっはは!無理だよ!ムリムリ!!お前に:「開くなつたら」いいねくその目だ!」

斬月が話し出すと同時に切りかかる。それはニタニタと笑いながら受け止められた。

一度距離を取り、構える。

「まさかお前がそんな目をするなんてな!軟弱者のてめえが!!何が気に入らない?孤児院のガキ共を出したことか?」

「黙れ:」

「それとも守れなかった幼馴染:「黙れ!!」

その一言とともに俺は再び斬月へと斬りかかった。全力で刀を振る。だが力任せに振るわれるせいか全く当たらず全ていなされてしまった。

「てめえは前にあつた時から何も変わってねえな」

そう言い錨迫り合いになる。

「てめえがここに来た理由も知ってる。だからあえて言ってるよ。俺は弱えてめえに力を貸さねえ。とととと帰れ。ちなみにだが勝つ条件はオレを:殺すことだ!」

拮抗していた錨迫り合いも力負けし、膝をついてしまう。

「クソが:」

「何睨んでだ？これも全て弱えてめえが悪いんだろうが。何も守れない殺人者が！」

「てめえは絶対に殺す!!何があろうとだ!!」

「この状況でよく吠えたな、だが状況は何も変わらねえ!!どんなに虚勢を張ろうともこれが現実だ!てめえには何も守れねえ、ましてや守る資格すらねえ」

不意に上からの圧力が無くなったと思い、反撃しようとした瞬間――

「がつ……」

摩天楼へと吹き飛ばされる。今の一瞬、反撃しようとした直後に蹴り飛ばされた。崩れた瓦礫を押しつけ、斬月を杖がわりにしながら立ち上がる。

「じゃあな翔。これで終いだ――月牙天衝」

そういうオレは月牙を放つ。

「……こんな所で、あいつに負けてたまるか……!俺は負けられねんだ!俺は勝つて――!」

「みんなを護るんだよ!!月牙天衝!!」

二つの月牙天衝がぶつかる。その衝撃は激しく、吹き飛ばされるそうにもなる。

「はっ少しはできるようになったみてえだな。おい翔、騎馬とその王の違いってなんだと思う?」

「……何言ってるやがる」

「〃王とその騎馬の違い〃は何だ?〃人と馬〃だとか〃二本足と四本足〃だとかそういうガキの謎かけをしてんじゃねえぞ。姿も能力もそして力も!

全く同じ二つの存在があったとして!そのどちらかが王となって戦いを支配し、残りのどちらかが騎馬となって力を添える時その違いは何だ!?!と訊いてんだ!!

……答えは一つ

本能だ!!!

同じ力を持つ者がより大きな力を発する為に必要なもの。

王となる者に必要なものは、ただひたすらに戦いを求め、力を求め、敵を容赦無く叩き潰し、引き千切り、斬り刻む戦いに対する絶対的な渴望だ!!

俺達の皮を剥ぎ肉を抉り骨を砕いた神経のその奥、原初の階層に刻まれた研ぎ澄まされた殺戮反応だ!!

てめえにはそれが無え!!剥き出しの本能ってやつがな!!

てめえは理性で戦い理性で敵を倒そうとしてやがる。剣の先に鞘つけたままで一体誰を斬るってんだ!?!だからてめえはオレより弱えエんだよ!!」

一息に紡がれた斬月の言葉に意識を遠くして聞いていた。そして奴から振り下ろされる刃を俺はどこか、諦めたような目でただただ見ている。

だけどそんな時、俺らの目の前に突然と光が現れ俺たちを包み込んだ。

現世 side

「やっぱり寒いですね」

「そうだな」

火に当たりながらシノアと三葉がそう言う。既に翔の訓練から三十時間以上経過していた。

なのに何故かまったりとしている二人。まあ二人からしたら三人の訓練を待ち続けているだけだから当然と言えば当然ではある。

「おいお前らすっかりしろよ。いつ接触するか分からねえんだぞ」

そんな二人を叱咤する君月。やはり彼はこの隊のオカンなのかもしれない。

「そんなこと言っちゃって私たちを基本的に待ってるだけですし」

「つまらないな。やっぱり君月何か芸しろ」

「てめえがやれ」

「なんだと!?!」

再び同じようなやりとりを始める二人。そんな二人は置いて、シノアは優へと視線を向けた。

「どうしたんですか？優さん」

優は翔が訓練を始めてからずっと傍にいる。言わずもだが彼もやはり家族想いの男だ。こんな世界だからこそ、最後の家族の帰りを傍で待ちたい。そんな気持ちだが彼にはあつた。

「ん、いや大丈夫かなって」

「大丈夫、ですよ。翔さんなら」

シノアが翔を見ながら傍げには笑う。それを見た優は気になつていた事を聞いてみた。

「なあシノア」

「はい？」

「お前って翔のこと好きなのか？」

「へっ？」

優から放たれた言葉を聞いて思考が止まってしまう。

：私が翔さんを？そんなことは無いと思います。だって私は柊何ですよ？

そういつもなら言えたはずだった。だがシノアの反応は違った。

頬も赤く染まり、ジタバタと慌て始めたのが証拠だ。

「やっぱりそうだと思っただよ」

そんなシノアを見てニカツと笑う優。

「わ、私が翔さんをですか!?な、ないです！」

「でもその感じだと凶星だと思っただけだな」

「僕もそう思うな」

二人の会話に入ってきたのは近くに座ってた与一だ。

「だってシノアさん翔くんと話してる時ものすごく幸せそうな顔してるもん」

「よ、与一さんまで…」

与一さんにまで言われてしまったら言い返せないじゃないですかと内心でしょんぼりとするがシノアは本当に自分の抱いている気持ちが無なのか分かっていないのだ。

「どうしたお前ら？」

「何かあったのか？」

先程まで騒いでいた二人まで戻ってきてしまった。出来れば三葉と君月には知られたくないようなことであつたのでシノアは「何でもありませんよ」と苦し紛れの笑顔わ浮かべた。

その時、翔の体がドンツと音をたてて動いた。

「！皆さんお願いしますー！」

シノアの指示に従い、皆んなが体を抑える。だが――

「お、おい何だこの力！」

「優くんと君月君の時よりも強いよ!!」

君月と与一がそう必死に抑えながら叫ぶ。実際、シノアと三葉もそう感じていた。

三十時間以上経過し、力も誰よりも強く更には翔は既に二回乗っ取られている。

一番三人の中で暴走する危険性があるのは確かだ。そして驚くべきことに――

「お、おい！何で仮面が現れんだ!？」

翔の顔半分には彼が使っていたあの仮面が勝手に覆われていた。

「まさか!？」

シノアは最悪の結末を考えた、いや考えてしまった。そしてそれを阻止するべく手も…。

「皆さんこのまま聞いてください。最悪翔さんが暴走した場合私達だけでは対処できません。そうなった場合、グレン中佐に応援を求めます」

「それって…まさか!？」

「はい…。暴走してしまった場合翔さんを…殺します」

シノアの言葉を聞いた四人の驚き、当然反論した。

優はふざけんな！何があっても助けるぞ俺は！と救出を、君月、迷ってはいるが与一も同意見のようだ。

だが三葉だけが違かつた。

「ムリだ」

「ああ?!何だと三葉!」

「この訓練で鬼に負けたら絶対に……助からない。お前らもわかってるだろ? 鬼呪を緩めただけであの凶暴さを。それが翔の場合だったらどうなるか」

「……………」

三葉の正論を聞いて二人は黙り込んでしまう。それでも諦めきれなかった。

だからこそと言うべきであろう。四人は翔にエールを送った。

「鬼になんか負けんな翔!!」

「早く戻ってこい翔!!」

「鬼に負けるな!!」

「お前はいつまで私たちに迷惑をかけるんだ! 早く帰ってこい! バカ翔!!」

そしてシノアも翔の顔を見ながら自身の思いを告げた。

「みんな待ってます。だから帰ってきてください翔さん……」

「あれ…俺は一体何を?」

斬月に斬られる瞬間、突然現れた光に包まれたのは覚えてる。

…ってことはここはあの光の中なのか? 一体何が起きてんだ?

そう思った直後、目の前に光が集まりだし、人の形を成していく。

「おい…何で…何でお前が……!?!」

「ははっ久しぶり翔!」

そう言い目の前に現れたのはかつての幼馴染である高木葉月だった。

俺は彼女を見た瞬間、思わず抱きしめあの時言えなかった言葉を紡いだ。

「ごめん…! おれ、ちゃんと護れなかった…!! 約束守れなかった!!」

「うん」

「絶対に護るって約束したのに!! なのに…おれ…!!」

「うん」

「ホントにごめん…！ごめん…！！」

「うん、大丈夫だから、もう抱え込まなくていいんだよ？」

静かに聞いていた彼女が優しく、泣きじやくる子供をあやす様に抱きしめながら頭を撫でてくれた。

そうして俺は前世のあの日以降、流していなかった涙を流した。

「落ち着いた？」

「お、おう」

さつきまで泣いていたのが急に恥ずかしくなり、目を合わせられない。
いい。

「ほ？何であたしと目を合わせられないのかなあ？」

「嬉しい！何でもないわ！」

ニヤニヤとしながら言う葉月に強めに言う。

それでも笑顔を崩さない流石と言うべきだろうか。

「それよりもここは？俺斬月に斬られそうだった筈だけど」

「んーここはまああたしの世界？かな。もっと簡単に言えばあたしの精神世界？かな」

「はあ？」

よく解らぬ。まず大前提に何で葉月が俺の精神世界にいるのか。次に何で光から構成されたのか。

「あ、それは神様をお願いしたの。翔がもし過去の事を憶えてて今でもそれに苦しんでるなら助けたいって」

「…人の心を読むな。それよりもその確率はものすごく低い気がするが？」

「……ラッキー！！」

「お前ってやつは…」

舌を出していうこいつに少し呆れる。それよりも……

「お前ってホントにお節介だな」

「な!?これでも翔のこと想ってお願ひしたんだよ!!あたしが死んでか

ら周囲が翔にどんな反応だったのかも知ってる!!翔の事だからあたしが死んだのも自分のせいだった思い込んでる!!」

「な!?それは違う!!あれは俺が悪いんだ!!助けられ「それを言ってるの!?」っ!?!」

葉月は俯きながら呟いた。

「そうやって自分を追い詰めて…他人のやった事まで背負って…そんな翔が心配だったの!!今もそうでしょ!?あたしの事引きづって新しい家族にも信用できてないじゃん!!」

「…葉月」

「だからもう自分のこと許してあげていんだよ?あたしは翔が想ってくれてるだけで嬉しんだから」

「…そうか。もう許していいのか…」

そうだよと笑顔を浮かべる葉月。そして微かにだが葉月の体が光に包まれている。

「…もう時間かな。翔、負けちゃダメだよ?さっきの白いカケルも目の前にいる翔と同じ翔なんだから。だから勝ってね」

「ああ、わかってるよ。ホントにありがとな葉月」

俺の言葉を聞き、光に包まれていく葉月は笑顔を浮かべた。そんな笑顔を見て俺はまだ伝えてなかった事を、あの時になるまで伝えられなかった事を伝えよう。

「葉月!!俺、お前のことが好きだ!!ずっとずっと好きだ!!」

「ありがとう、それ出来れば生きてる時に聞きたかったな。でもね、それは私に言うことじゃないよ?」

「おまつ…何言ってる…」

言おうとした瞬間、葉月は俺に抱きついてきた。もう体も消えかけてる。だから…本当にこれが最後だ。

「私も好きだよ。私のこと憶えててくれてありがとう。翔は翔らしく真っ直ぐ、自分の信じた道を歩いて。…ああ最後まで笑い顔でいきたかったのになあ。涙が止まんないよ……」

そんな彼女の頭を撫でる。胸に顔を埋め、必死に笑顔をつくらうとする彼女に、名前を呼んで顔を上げてもらう。

そして彼女の唇に自分の唇を当てる。そんな行動をした俺が意外だったのかポケって顔をしてるもすぐに顔を赤くして嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「ありがとうと葉月」

そんな俺の言葉は彼女に届いたかはわからない。でも確かに聞こえた。彼女が光になり、俺の身を包んでいた光が段々と薄くなっている。

『私の方こそありがとう』

そんな彼女の言葉が聞こえると同時に俺は摩天楼の連なる精神世界へと戻ってきた。

そして目の前にいるのは不機嫌にこちらを見る斬月。

「待たせたな斬月」

「お前何した?!この世界でオレが立ち入れない世界なんてありやあしね!!何したんだ!!」

「助けてもらったただけだよ。お前がバカにして言う『幼馴染』にな」

それを聞き、更に不機嫌に叫ぶ。

「そんなわけあるか!!この世界はオレとお前の世界だ!!そこに他人が入ってくる余地なんてねえ!……だがまあいい。光の中で何があったのか知らねえがお前はオレには勝てねえんだからな!!」

叫びながら接近してくる。確かに俺は勝てないさ。さっきまでなら、な。

俺は自分を貫こうとするオレの斬月を受け入れた。

「……やつと気づいたか」

「ああ、あいつに言われなくちゃ気づかなかったさ。お前は斬魄刀であり、鬼つて前に言ったな。ならさっきの『オレとお前の世界』ってのは鬼としてはおかしい。お前は俺の体を狙うはずだ。なのにそれをしてない。今までの俺が負けて自動的にお前に主導権が移ってるだけだったんだ。

それに俺もお前も同じ翔だ。それにお前はいつも俺の危機には助けてくれてただろ?」

「っチー……まあだが前よりはマシな面になったじゃねえか。だけど

忘れんなよ？てめえがオレの王に相応しくねえと思った時には覚悟しとけ。本当にオレの力を支配したけりや、次に俺が現れるまで…せいぜい死なねえよう気をつけな!!」

その言葉を聞くと同時に俺の視界は暗転した。

目を開くと俺が始めた頃のように夜だった。そして俺の顔を覗くように五人が見ている。

「迷惑かけて悪かった。今戻ったよ」

「うわああ!!」

優と与一が一気に抱きついてくる。

「心配したんだぞ!?!」

「良かった!翔くん戻ってきた!!」

「ははっ大袈裟だなお前ら」

そう言い、二人にどいてもらい立ち上がり、三人の方を向く。

「迷惑かけたな」

「…ホントだよ。お前抑えんのきつかった」

「つたく!あたし達をあんまり困らせるなよ!」

「おかえりなさい翔さん」

三人が労いの言葉をかけてくれる。

?葉月、俺頑張ってくよ。だから見守っててくれ?

そう空を見て大事な幼馴染へと向けて思った。

27 話く過去への入り口く

俺たちの訓練から数日経ったある日。突然とまでは言わないけど前に話した？みんな事を話し合おう？をするらしく、明日の昼頃にシノアの部屋に行くことになった。

訓練も終わり、自分の部屋へと戻り、シャワーを済ませベットに大の字で寝転ぶ。

夕飯に閉じてはさつきみんなで食べたからいらない。

ふと目を閉じ、深い深呼吸をする。そして起き上がり胡座をしその上に斬月を乗せ意識を集中させる。

あの訓練が終わってから日課になってしまった一連の動作。別に唯の瞑想とかではなくちゃんとした意味がある。俺が手に入れた力は俺の精神が直接関係してくる。安定していれば自分のコンディションも含め文字通りの全力を出せる。だけど不安定な場合は最悪鬼呪すら使えなくなってしまう。

だから俺はBLEACHでやっていた『対話』を試してみようと思った。それがこれを始めた理由だ。

「テメエもホントに飽きねえな」

目を開けばそこは摩天楼の連なる精神世界。そして目の前にいるのは斬月。

そう、俺は毎日短い時間でもいいからこうして斬月の元に来ては戦ってる。

……こいつのことは許せないけど誰かを護るために力が必要で俺のことを一番知ってるのはこいつだからと割り切った。

「当たり前だ。俺はお前のように強くない。だからこうして特訓してんだろ」

「ハっ、だがまだ俺に一度も勝つどころか一撃も当てられてねえよな？今日こそ当たるといいな」

「……今日こそ勝ってやるよ」

斬月が刀を肩に起きながら挑発してくる。それにイラツとするが心を落ち着かせ構える。

刀を真っ直ぐ相手に突きつけるようにし、左手を右肘に添え腰を落とす。

お互いが同じ姿勢を取り、同じ口上を発した。

「卍、解!!」

「くっそ…今日も勝てなかった」

その後、何度殺されたのか分からない。剣の実力云々よりも戦闘技術があいつは多すぎる。使えるものは使う、例えば剣を投げてそれを囿に体術に持ち込む。…最後はこれにやられた。

どうすれば勝てんだよって考えながらシノアの部屋へと向かう。

その途中で優、君月、与一に会った。優以外は今日の目的を知っているから優が無邪気にも何をするかを聞いた時は場の雰囲気があった。君月は顔を逸らし、与一は別の話題を出し俺はスルーした。

優は自分が暴走したことを知らない。それを伝えるのも目的の一つだがそれよりも――

やけに焦げ臭い。そして煙も出ている。まさか……

「きやああああ!!」

その悲鳴を聞いて部屋に入った俺たちは焦ったのをかなり後悔した。何故なら――

「ちよちよちよみっちゃん!!なんでなんで!!?どういう理屈でオムレツが燃えるんですか!」

「ち、違うだ!図書館でお酒かけたら美味しいって見て!!」

「焦げますよ!!真っ黒に焦げて……」

「あ……」

慌てている二人が間抜けな声を出して目が合ってしまった。

その後二人を見かねて君月が料理をするといい出し六人分のオムレツを作っている。

それを見た優は素直に褒めた。

「すげえな君月。お前なんでもできんのな」

「お前らができなさすぎるんだ」

あ、今の君月の悪意しかない言葉で二人撃沈した。

そこで優が思い出したかのように俺を見て言った。

「そーいや翔も料理出来たよな。昔食ったハンバーグめちやくちや美味かったし」

「まあ人並みにはな。懐かしいなく優が孤児院来たばっかの時に作ったあれな」

二人で昔話に花を咲かせていると君月と与一が料理を運んできた。

「悪いな、手伝えばよかったな」

「いや手間のかかる事じゃねーから大丈夫だ。それよりも今度なんか作ってくれ」

「おう、いいぞ」

「……何で男の子なのに料理が出来るんですか」

「……何か思い出すだけでも恥ずかしい」

二人がボソボソつと何か言っていたが聞こえないキコエナリー。

「それよりも何話すんだ？俺だけ知らなくて仲間外れなの嫌なんだけど」

「そうですね。だからこの会を開きました。ちよつと驚くような話をするので、気をしっかり持って聞いてくださいね」

「…な、なんだよ改まって…」

「炊事 洗濯 掃除 得意 いつも身だしなみもきっちりしている完璧くん、君月土方さんの話なんですが…」

思っていた話と違ったのか君月は自分の話をされて驚いている。そして、シノアの次の言葉を待っている。

「実は君月さんコッチ系なんです。」

「「「え!!?!」」」

「いきなり嘘つくくんじゃねえよ!!?!」

シノアは右手の甲を頬につける。それはつまり…オネエと言う意味のジェスチャーだ。

「ま…ほんとに深刻な話をするのでそんな冗談を交えつつご飯を食べ

ながらも話しましょう」

「それでは始めましょうか…議題は三つ。一、優さんが何かの実験体であの戦場で暴走して私を殺しかけた話。二、翔さんについての話。三、グレン中佐は本当に仲間なのか？」

みんながそれぞれ席についてから話は始まっていった。

俺が…シノアを殺そうとした？それに…翔についてって？グレンの事も…」

「落ちけつて優。今から説明するんだからさ」

「ああ、ごめん翔」

シノアの議題を聞いて思った通り優は驚いていた。そして優以外のみんなも顔を暗くしている。

「優さんは人体実験をされていました。その力が暴走したのでしよう。理性はすでにありませんでしたし…」

「実験の内容は分からないけど俺と優の中には『天使』がいてそれが体に乗っ取ろうとしてる」

「俺…あの時…天使の姿見たかもしれない。ラツパを持ってた。阿朱羅丸もそれに嫌な顔をしてた…」

「でもそれって止める方法ないんじゃない？」

「じゃあ、止める方法がないならどうすればいい！」

「落ち着け、君月」

君月が怒りを出している中、三宮が落ち着くように言う。そんな重たい空気の中部屋にある声が響いた。

「それなら翔が止めたでしょー」

その声にみんなが驚く。何故ならあの時俺の前から消えたはずの葉月がいるからだ。

「な、何でお前がいんだよ?!」

「うーん？まああの時消えたのはそういう演出だよ。ホントは生まれた時からずっーと一緒だったんだよ」

「お…おまえ誰なんだ！」

「私は葉月。…そうだな、鬼じゃないけど翔の中の天使を抑えてる存在。抑止力みたいな感じかな？あなたが百夜優一郎君かー」

「そんなことはいいい、じゃあ優が毎回暴走したら翔が止めなくちゃいけないのか!?!」

君月が葉月に向かって叫ぶ。それを葉月は困った様子に見ながらも答える。

「今から教えてるよ…でもその前にあなた達はこの話を信じる事が出来る?」

「あの…葉月さん？僕はなにがあっても信じます。それが、家族っていうものですよ?」

「よく言った与一！俺もよくわからないけど信じる!」

「やっぱり、馬鹿だな優」

さつきまでの重たい空気が嘘のように明るい空気に変わる。

「それなら大丈夫ね。いきなりだけど…「そこからは俺が話すよ」

「わかったよ」

「お前らは輪廻転生って信じるか?」

「輪廻転生ですか?」

「確か死んだ人間は生まれ変わって他の世界に生まれるって意味だよ?」

「ああ、俺は一度死んで前世の記憶を持ってこの世界に生まれた。葉月はその時一緒にいた幼馴染なんだ」

「幼馴染兼彼女みたいなもんだったけどね」

「「彼女!?!」」

「(彼女ですか…)」

その一言に四人が驚き声をあげる。

てか待て、幼馴染は認めるが付き合った覚えは全くない。

「話を折るなよ…。まあここからは長くなるから気長に聞いてくれ」
「これは俺が高校に通ってた頃の話だ——」

みんなが神妙な面持ちになり、俺は過去での過ちを話し始めた。

28話く過去く

前世の俺は不満ことなんて無かった。家族に恵まれ、信頼がおけない満の言い合える幼馴染がいて。

俺はそんな生活に満足していた。これ以上ないくらいに。でも不幸つてのは突然やつてくる。そう、唐突に――

まだ俺が中学生の時だ。両親が離婚をした。原因は父の浮気だった。相手は会社の後輩だった。そこを知人に見られ、あまつさえ写真まで取られたそうだ。

その次の日から母は俺を一人で育ててくれた。仕事と家事を両立して。そんな母を見て、高校には行かず、働くと言った。

だけど返ってきたのは怒号ではなく謝罪と笑顔だった。

「ごめんね、あなたにこんな思いをさせて。だけど心配はしないで高校に行きなさい。お母さんは大丈夫だから」

そんな母の想いを聞き、近くの高校を選んだ。葉月も俺と一緒にそこに通うと言い出した。その高校は偏差値もあまり高く無く、頭の良かった葉月には釣り合わないと思った。

だけど俺の言うこと何も聞かず、同じ高校に入学した。

幸いなことにクラスも同じだった。

俺たちはいつも一緒にいた。だから、噂も色々あった。

葉月の容姿は美少女のそれだ。だから男子からの嫉妬の視線が多かった。

それに比べ、俺は目つきが悪かった。そのせいか寄ってくる人は少なかった。

男子はまだ話しかけてくるやつはいた。

少なからず友と呼べる人達もいた。

俺はこんな生活に満足していた。母だけに負担をかけさせないようにとバイトを掛け持ちした。

毎日お隣さんである幼馴染と登下校を共にし。

学校に行けばバカをし合える友がいて。

これのどこに不満があるのか。このままこの生活が続けばいいと本気で思った。

だけど入学してから一年後——俺達が高校二年の夏だった。

そんな時に人生で最悪、いや人として最低のことをしてしまったんだ。

その日は珍しくバイトがどちらもなく、久しぶりにゆっくりしようと思った。まあ当然のようにその一時は消えるのだが。

「ねえ翔、今日ご飯食べいくね？」

「はあ？なんだよ急に——」

「おばさんが食べに来たって」

「…ああそういうこと」

母さん。俺に一言あつてもいんじゃないかい？

そんな事を思いながら帰路についた。

じゃあまた後で。と小走りで帰っていく葉月を見届け、家に入る。

そこで違和感に気づいた。いつもは鍵がかかっているのに掛かっていなかったのだ。

違和感を抱きつつ、ただいまと言い入る。

だが返事がない。おかしい。いつもなら夜遅くても起きてて、何かしていても、途中で手を止め俺に抱きついてくる位なのに今日はそれがない。

そこである男の怒号が聞こえた。

「隠れてないで出てこい!!お前らのせいで俺がどんな目にあつたか!!目に物見せてやるよ!!」

なんで、何であいつの声が…!?

俺は急いでリビングの扉を開けた。

いつもは整理され、綺麗なりビングがいろいろな物がグチャグチャ

になり散らかされていた。

「母さん!!」

その声に反応して男がこちらを振り向いた。

その顔は以前見た時よりも痩せ細っていて、目は血走っていた。

「何しに来たんだお前!!」

「おいおい、久しぶりに会うのにそれは無いだろ?ここは俺の家なんだから」

「ここはテメエの家なんかじゃねえよ!!クソ親父!!」

「まだ俺のことを親として見てくれるのか。嬉しい限りだな。…まあ殺すことに変わりはないんだけどな!!」

そいつの手にはナイフが握られていた。

それを見て、一步一步とと思わず下がってしまった。それを見てニタアツと笑い近づいてくる。

「怖いよな?怖いよな?!ああやつとこの手でお前らを殺せる。俺をドン底まで墮としたお前らにな!!まずはお前からだ、翔!!」

ナイフを振りかぶり俺へ突き立ててくる。それを間一髪で躲すも尻餅をついてしまう。

逃げなきゃ!逃げなきゃ殺される!!

そう思うのに体が動かない。

恐怖のせいで思うように動いてくれない。

「避けるなよ、翔。せめて苦しまずに殺しやるからよ」

恐怖の中、這いずるようにして廊下へと続く扉まで来た。

あいつとの距離はもう手の届く距離まで近づいている。

何とかしてドアを開けようもするも、腹を蹴られ扉を壊して廊下へと出される。

そこで家の扉が開く音がした。

そちらを見ると葉月がいた。

葉月は俺を見るや即やに駆け寄ってきた。

「翔、大丈夫!？」

「いい、から!早く逃げろ!」

「何言って——」

そこで葉月は見てしまったのだ。変わり果てた親父の姿を。

「おじ、さん…?」

「ああ?誰だこの女。お前の女か翔?お前も隅に置けないなあ」

ニタアッと笑い言い放つ。

このままじゃ、葉月まで殺される…!それだけはダメだ、と言葉を
発しようとした時――

「まあいいか。俺はお前らが幸せにいること自体に虫唾が走る。とり
あえず死んでくれ」

「やめろ、やめてくれ!葉月は関係ないだろ!!」

「デメエは黙ってる!!」

思いつきり頭を蹴飛ばされる。そうしてあいつは葉月に向かい、葉
月の体にナイフを突き立てた。

それを見て、頭が真っ白になった。

「は、づき…。おい、うそ、だろ?なあ、なあ!!」

俺の目から大粒の涙が零れる。それを見てあいつは大声を上げて
笑った。

「そうだよ!それだ!その顔だ!!俺はお前らのそんな顔が見たかった
んだよ!!その絶望した顔をな!!安心しろ、すぐにお前もこの女と一緒
になれんだからよ!!」

「うわあああああ!!」

気づいたらあいつの事を殴り飛ばしていた。その際にナイフを落
とし、俺の足元にナイフが転がってくる。

それを拾った。

「お前は俺が殺す。何があってもだ」

「お、おい。やめろ、やめてくれ。俺が悪かった。だから殺すのだけは
――」

「知るかよそんなの。人を刺しといて自分はそれか」
倒れているあいつへと一步、一步と近づいていく。

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺

力が抜ける瞬間に俺が刺したんだ。
手を見れば、赤い液体が。手だけじゃない。服にも顔にも飛んでい
る。

「…これで、てめえも…おれ、と…どう…るい、だ」

そう言い残し、息を引き取った。

俺が、ころ、した…？あ、いつと、どう、るい？

「か…ける」

葉月の声を聞いて、我に返り駆け寄る。

「ごめんね…また約束…やぶつ…ちやつた…」

「もういい!!喋んな!その先は後で聞くから!頼む!」

あいつと同じが俺が後でなんてない。だけど…だけど!!ここで死

ぬのは違うだろ!!だから——!!

「ううん…あのね…私ずつと…ね、君のことが…大好き…だつ…よ

…」

「…ああ、分かってるよ!そんなの…俺もなんだから!だから頼む…

!!死ぬな!!」

「…それだけ聞ければ…私は…十分だよ…。だから…幸せに生きてね

…」

「…おい。おい!ふぎけんなよ…!頼むから…!お前の我が儘でも全

部何でもするから…!頼む!死なないでくれ!俺を…置いていかな

いでくれ…!!」

俺の願いも虚しく、葉月は静かに息を引き取った。

その後、今日仕事か休みで買い物から帰った母さんが警察に連絡し

たそうだ。

そのこの記憶は曖昧で俺は到着した警察に言った一言が

「俺があいつを殺しました」

それを聞いた警察の人は事情を聴くと署の方に動向をと云ってき

たらしい。

母さんも同伴したみたいだか、俺の口からは

「俺が殺しました」

何を聞かれてもこれだけだった。

警察は俺のした事を正当防衛だと決定した。

だか、かなり俺の処遇を討論したらしい。

正当防衛と言っても殺してしまつたら過剰防衛だ！

彼は被害者だ！それに彼には殺意はなかった。と色々あった中、俺のした行為は正当防衛に収まつた。

そこからの日々も地獄だった。学校に行けば

「この人殺しが!!」

「お前のせいで高木さんが死んだんだ！」

「お前が死ねばよかったんだ!!」

これ以上のことも言われただろう。けどもう覚えてない。覚えてない位言われたのだろう。

先生達は俺に転校を勧めてきた。けど俺はそれに首を振つた。理由を聞かれたら

「ここには葉月との思い出があります。こんなことに言う権利もありません。だけど…これは俺への罰なんです。人を殺してしまつた俺に。周りの反応は当たり前前の事なんです」

葉月の両親にも殴られた。

「娘を返せ!!君さえいなければ娘は生きていたんだ!!返せ、娘を返してくれ…!!」

それから俺は通い続け、就職をした。

勤務地は東京を選んだ。選んだのも逃げるためだったと思う。口では大層なことを言つても俺は自分の罪から逃げ続けたんだ。

だから東京に逃げた。

東京では俺の事を知る人はいなかった。地方から行けばそれもそうだ。

それから五年働いた。毎年、墓参りにも行つた。あいつが好きだった向日葵を持つて。

そんな時、俺は子供を守つて死んだ。

その時、俺は思った。

「(やつと、やつとお前のところに行ける。いや、やつぱり行けないな。

俺はお前と違って汚い人間だ。当然地獄に行くだろうな。はは、死んでも会えないのか」

心で思い、目を開けばそこは真っ白の空間。

今思えば、神様はあんなこと言って、本当はこれは罰だったんだ。

お前は罪を背負いながら生きろって。

それがお前のした愚かな行いだって

29話 家族

俺の過去を聞いて皆が黙り、重い空気が流れる。

俺の後ろにいる葉月も苦しそうにしている。

そんな彼女を見て

「(お前がそんな顔すんなよ……。本来ならお前は俺のことを恨んでもいんだ。なのに……。なんで、そんな苦しそうにするんだよ……)」

「……………」

ふと聞こえたシノアの声に皆が視線を向ける。

シノアは下を向き悔しそうに下唇を噛んでいる。

「なんなんですかそれ……。あまりにも酷すぎます……！翔さんは殺したくて殺した訳でもないのに……！葉月さんを守ろうとしただけなのに……！！それを……。なんで……！」

「シノア……………」

そんなことを言ってくれたのはお前が初めてだよ。だからこんな感情は持つてはいけないんだろうけど、素直に嬉しいよ。

俺のために怒ってくれてありがとう。

「確かに人を殺すことは重罪だ。けどお前はそれに対してちゃんと向き合おうとしたんだろう？だから警官に向かって自分がやったって言えたんだろ？」

ならお前が周りの奴らのことを気にする必要はねえよ。そいつらはお前の、朝倉翔の根本的な所なんて見てなかったんだ」

「君月……………」

まさか君月からこんなことを言われるなんて思ってもいなかった。

お前がそんな風に思ってたことが素直に嬉しいよ。

でも……………」

「それでも……。それでも俺は自分のことを許せない……………」

だからって許せるほど俺の罪は軽くはない。そんなのは俺自身が一番わかっている。

だから……………」

「翔、俺は馬鹿だから輪廻転生なんて言われてもわかんない。だけど

お前は今も昔も変わらないんだよ。優しくて不器用で家族想いで。それで一番愛情深いんだと俺は思うよ。だからもう許してもいいじゃないか？」

「優……」

俺はお前のそういうところにいつも救われてきた。それにこんな俺よりもお前の方が愛情深いと俺は思うよ。

だって…俺のこれは原作を知っていたから出来た仮初の想いなんだよ。

家族の愛情つてのに憧れて、それに縋って。そして失った。

「翔くんは優くんの言う通り優しいよ。だってそこまで葉月さんのことを思ってるんだもん。僕なんかと比べたら全然すごいよ。」

「だってどんなに言われてもそれに立ち向かってたんだから」

「与」……」

違う、違うんだよ。俺は立ち向かってなんかないんだ。ずっと俺は逃げ続けたんだ。

むしろお前の方が俺なんかよりも断然強いんだよ。

「あたしにはお前がどれだけ辛いのかは分からない。でもお前が自分の起こしてしまったことから目を背けずに立ち向かい続けたことだけは分かる。だからもう責め続けるな」

「三葉……」

もう、やめてくれ……。俺はお前のように素直に物事を言えない。だからこそ俺は自分のことを許せない。

例えこの場のみんなが許してくれても…俺だけは許しちやいけないんだ…。

『もう大丈夫だよ。私はあなたの事を怨むことはないよ。例えこの世界があなたの事を責め続けても私だけは、私達だけはあなたの味方だよ』

「もう…やめて…くれ…。」

気づけば俺の目から大粒の涙がボロボロと流れる。

止まれと思うのにそんなのを無視してどんどん溢れてくる。

「おれは、おま、えらといっ、しよにいちや、いけ、ないんだよ。それ、ぐらいに、お…れは…うすよごれてる…から」

「二」「そんなことない!!」「」

『あの時も言ったでしょ?もう許してあげていんだよ。あなたにはこれだけあなたの事を想ってくれる家族がいるんだから』

「…ぐすつ…なん、なんだよ、お前ら。なん、で、そんなにおれを、たす、けようと、すんだよ」

「そんなの決まってるだろ」

「今に始まったことじゃないだろ」

「なんせ僕らは」

「ああ、あたし達は」

『家族』なんですから」

そう言つて笑う五人を見て俺は

「こんな崩れた落ちた世界で『家族』なんてホントお前らはバカだな」

文句を言いながらも笑っていた。

「バカつてなんだよ翔!」

「ああ、バカは優だけだろうが」

「ンだと電柱野郎!!」

「やんのかアア!」

「やめろ二バカ!!」

「お前には言われたくねえよ三葉!!」

「そうだそうだ!三葉もバカなんだから三バカだろが!!」

「優さん…それはちよつと…」

「お前ら…!表に出ろ!誰がバカなのか教えてやる!!」

「やめなよお三人ともー」

そんなやり取りを見て自然と笑いが零れる。

ああ本当にお前らはバカだよ。そんなバカ達に言われるまで向かい合おうとしなかった俺は大バカだ。

だけでももう大丈夫だ。

なんせ俺にこんなにも俺の事を想ってくれる大切な『家族』がいる

のだから。
そして涙はいつの間にか止まっていた。

30話〜早朝〜

「ではでは翔さんの泣き顔も見れたことですしこれからの方針を決めていきましようか」

「俺の泣き顔はいんだよ」

少し赤く晴れた目を擦りながらそう言う。

？ああ本当に俺は恵まれている？

何故だか急にそんなことを思ってしまう。世界も滅んで。人口も十分の一になって。なのに俺には大切な家族が、守るべきものがある。

それだけでこんなにも変わるものかと感じてしまうほどに。

「まあ皆さんの考えをまとめますとこれから柊シノア隊は『家族を大事に』。こんな世界でそんな方針になるとは思いませんでした——それで戦っていきましよう」

皆が頷くことによって決まった。

『家族を大事に』。この世界では全くもって異端な考えであり、本を読んでいた時はいい考え、すごいな、よく生きていける気になれるな、なんて思ったけれどこの世界で生きてきた限りやはり異端だと同時に感じてしまった。

「それであなたはどうするつもりなのかな？」

「そんなの決まってるだろうが。王が決めたことならオレはそれに従うだけだ」

「そう、でもあなたはまだ彼を狙っているんでしょ？」

「当たり前だろうが。オレはあいつであいつはオレだ。あいつの体はオレのもんでありあいつのもんでもあんだからよ」

「そう言う割に必死に護ろうとするのよね。…まあ彼も貴方も昔からそういう所は変わらないから」

「…ツチ。やりずれえ女だよ teme は。まあ王がオレの力を望むなら貸してやる。だが…それでオレに飲まれても知らねえけどな」

東京——名古屋間へと繋ぐ東名高速道路。そこを一台のバイクが走る。

「つたく…。なんで俺だけ集合時間が早えんだよ…」

背中に大きな刀の鬼呪装備『斬月』を背負う彼——朝倉翔は朝日が昇り始めると同時にバイクを走らせていた。何故こんなにも早く移動しているかという単純に一瀬グレン中佐からの直接の命令だからである。

なぜ呼ばれたのかさえ分からず、指定の時間に来いとだけ言われそこにはバイクが置いてあったので向かっている。ということである。「まああいつが急に呼び出すなんてのはいつもの事だし、慣れっつたよ。…慣れたくはなかったんだけどな」

苦虫を噛み潰したような顔で言うも彼は更にスピードを上げ目的地である海老名サービスエリアへと向かった。

「よお、よく間に合ったな翔」

「… teme エグレン。あの時間に海老名に来てってわざと間に合わせないようにしたな」

「はて、何のことやら？」

手振りで分からない、と言いだけにする。

それにカチンときた翔は背中へと手を伸ばす。

「お前は今ここで殺す。すぐ殺す。跡形もなく殺す」

「おお言うね。だけど無理だよガキが。お前は俺を殺せない。何があってもな」

そう言つて翔に背中を向け、建物の中へと向かおうとする。それを見て冷静になった翔は渋々グレンの後をついて行く。

「おいグレン」

「なんだ？」

「なんで俺だけシノア達とは別の時間なんだ？なんかやることであるのか？」

グレンは口元をニヤツと歪ませながら答えた。

「あああるよ。お前にはこれからここで俺と――」

戦ってもらおう」

「は？お前何言つてんだ？これから大切な任務があんのにバカ言うなよ」

「ああ悪い悪い。俺じゃなくて俺達だ」

暗い廊下を抜けた先は広い空間になっていた。大凡シヨツピングモールか何かの跡地だろう。

そこには見覚えのある五人がいた。

「……まさかグレン隊全員を相手にしろ、なんて言わねえよな？」

「当たり前だろうが。相手すんのは俺と深夜だ」

パンを食べながら奥にいた深夜が笑顔を浮かべながら手を振っている。

「やつほー翔。尋問の時以来だねえ」

「お久しぶりです、深夜さん。それでこれはどういうことか説明が欲しいんですが？」

「ごくん、とパンを飲み込み、んー？と考える素振りをしてから答えた。

「単純に興味本意だよ」

「…言っている意味が分からないです」

「だーかーらー。君の鬼呪装備について知りたいから戦おうって言ってるんだよ」

「!!」

それを聞いた翔は驚いた。まさかと思うが『斬月』の憑依について知っているのか…。

まだシノア達にしか見せてないあれを。

「その反応だとあんまり知られたくないって感じだね。まあ安心しなよ。ここには僕達しかいなし知ったとしてもそれを誰かに口外することは無いから」

朗らかに笑いながら言う深夜。だが――

「(グレンが言ってた通りなら彼の黒鬼は異常そのものってことみたいだし。それに彼の様子を見る限り、鬼のせいで感覚が異常なほど敏感になってる。それこそ僕が気づかれないように当てた殺気にも反応してたしね)」

深夜は密かに影から翔に対して僅かな殺気をぶつけていたのだ。翔はそれ無反応でいながらも身体は身構えていたのだ。

もちろんそれにはグレンも気づいていた。だからこそ今回特に用事も無い中、翔を呼びつけたのだ。

時雨にシノア隊を監視させ――特に翔を――知ったのが翔の鬼呪装備の異常な憑依化。

それがもし自分たちに向けられたと、仲間を失いかけることに繋がるのなら――と考えた末の結論であった。

要は翔の力がこれからもグレンの為になるか否かの話であるのだ。「…わかりました。でもここにいる人達以外には見せら「わかってる。だからお前を呼んだ」

そう言いながら刀を抜くグレン。それを見て翔も斬月へと手を伸ばす。

「これに時間をかけるつもりは無い。だから初めから全力で来い。深夜」

「はいはい」

「お前は俺の援護だ、普通にやれ」

「わかってるよグレン。そんなに心配しなくても」

「じゃあ始めろ」

「……どうなっても知らねえからな」

刀を真つ直ぐ相手に突きつけるようにし、左手を右肘に添え腰を落として口上を述べた。

「卍、解!!」

翔を中心として煙が舞う。それを二人は目を細めながら見る。いや見てしまったのだ。

何故なら翔の体に鬼呪が纏つていくのだから。

「ねえグレンあれって……」

「ああ、あいつ鬼呪を体内から出して身に纏いやがった」

深夜の疑問も尤もだ。何故なら鬼呪とは体内にあつて身体能力等を鬼の力を引き出して使うものだからだ。

それを体外へと出してしまえば使用者本人は弱ってしまう。

いい例を上げればシノアや三葉等が該当するだろう。

彼女達の鬼呪装備は『具現化』なので特殊な能力を使える。だが、それは己の鬼呪を外へと出しているからだ。ならば体内の濃度を下がっていく一方だ。

なのにそれを更には纏うなど異常にも程があるのだ。

煙が晴ればそこには帝鬼軍の制服ではなく、黒のロングコートと羽織っており、先程まで刀と形容するには多すぎる刀は純黒の日本刀へと変貌していた。

「天鎖斬月ッ。グレン、まだこの力に慣れていなくて加減ができそうにない。だから……」

「死なないでくれよ!!」

そう告げた瞬間二人の視界から翔は消えた。

「ツチー！後ろだ深夜!!」

いち早く察したのはグレンだった。ワントンポ遅れて深夜も反応するが既に翔は刀を振るおうと『天鎖斬月』を構えていた。

「つちよ!!これは反則でしょ!!?」

後退しながらも『白虎丸』の引き金を引く。だが――

「嘘でしょ!!?今のを躲すの?!」

「これは予想外だな…。いや厄介すぎる」

ゼロ距離で放たれた銃弾は翔には当たらなかつた。

翔は最初の位置へと瞬間移動でもしたかのようにいる。

内心でまずいと思いつながら翔へと『真昼ノ夜』を振るう。

徐々に二人の剣戟のスピードは増していく。

均衡していると思われたが少しずつ翔が押し始めた。

だがそこで深夜の援護射撃が間髪なく入る。

「ナイスだ深夜」

深夜の元まで下がったグレンは一息ふうとつく。

「もういいじゃないかグレン?今回の目的は分かつた。お前は俺の力がもし暴走したら――って考えてるんだだろうけど俺は傷つけない、傷つけない。それが寧ろ仲間なのならば尚更、な」

「そんなことはわかつてる。だが、確認は取るのは上司としての役目だ」

それを聞いたグレン隊のみんなの反応は様々だつた。

腹を抱えて笑う者やため息をつくもの。更には流石です!と尊敬の眼差しを向けるもの、それに同意するもの。

そんな反応を尻目に嫌な顔をしながらも答えた。

「……お前が上司とこブラック企業すぎるわ」

「よーし。今から全員でお前に攻撃を仕掛けるから覚悟しろよ」

それを聞いてみんなが構える。何故だかみんなの笑顔は怖かつた。

「え、ちよつと待て。ほんとにやんのか…?来ないで…来ないでください!お願いだから!!いやああああああ!!」

海老名サービスエリアに朝から悲鳴が上がつたを聞いて他に集まっていた隊員たちは頭に?を浮かべながら来るべき時を待っていた。

|

32話 く鳴海隊く

グレン隊の猛攻撃を受けた後、ボロボロになりながら本来の集合場所である駐車場へと向かった。

周りからは何故あんなにボロボロなのかを不思議がられたがキニシナイ。

「にしてもあいつらいねえな…」

歩きながらシノア達を探していたが見つからない。まさかとある答えが出た。

「ここで遅刻とかしたら洒落になんねえぞあいつら…」

「ちよつといいかな？」

声をかけられそちらに振り向く。そこには茶色の髪を後ろで一つに結び、背中には三叉槍を背負っている青年がいた。

「俺は鳴海真琴だ。よろしく頼むよ」

「朝倉翔です。こちらこそよろしくお願いします。それで要件は何ですか？」

ニコツと笑いながらも言う真琴に対して翔は辛辣に返した。

どうも違和感がある。というよりも何かを計るようようなもの。その笑顔を見た時から何となくそう感じ取っていた。

「そう邪険にしないでくれ。ただ君のことはグレン中佐から聞いてたんだ。…まあ及第点ってところだ」

「へえ、グレンから聞いてたのは俺だけについてですか？」

「そうだが？まあいい。足だけは引つ張らないでくれよ新人」

握手を求めるように右手を差し出してきたのでそれを素直に握る。だが普通にはなく、少し力を込めて。

「よろしくお願いしますよ、先輩。新人にかっこいいところでも見せてくださいよ」

挑発的な笑みを浮かべながら言い放つ。真琴は顔を顰めるも案外握る力が強かったのだろう。手を離し胸の前で手をプラプラさせた。

「…君案外力強いな」

「黙れガキがつ!! 今回の任務は遊びじゃない!! 軍規を守れない奴は帰れ!!」

グレンの怒鳴る声がサービスエリアに広がる。

それはもつとものことだ。例え理由があつたとしても、これから何十人と死ぬかもしれない任務を前にして入ったばかりの年端もいない子供が遅刻をしているのだ。

大切な仲間を護りたいからこそそのグレンの叫びだった。

「すいませんでした中佐。今回の遅刻は自分が途中、運転の練習をさせてもらっていたからです。自分のせいです」

「ならお前が帰るか?」

「いえ! 俺にも吸血鬼を殺す手伝いをさせてください!」

「優君…」

「優君…」

そんな優を見てグレンは言った。

「後で百夜優一郎には罰を与える」

「そんな——!」

「それなら隊長である私が——!」

「いんだよ気にすんな」

ニカツと笑いながら言う。やっぱり変わらないなお前は。

「いいか、おまえらよく聞け!」

グレンの言葉に場にいる皆が気を引き締めるのが分かる。そして空気もガラツとかわり今ではとても静かだ。だれもがグレンの次の言葉をまっっている。

「この任務は遊びじゃない、おそらく過去最大の危険と難易度になるだろう。きつと仲間が何人も死ぬ。ここにいる仲間は全員家族だ。なら、俺たちは家族をこの任務でたくさん失うことになる——だがそれでも!!? 今回はやる価値がある!!? いいかおまえら、生きて帰るんじゃない!!? 俺たちは勝って帰る!!? 分かったか!!?」

『おおおおお!!?』

一致団結とはこのことを言うのだろうか。誰もが手を上にあげて意気込んだ。

「いたいた、おーい優！」

「あ、翔！お前何してたんだよ！朝部屋行ってもいなかったし！」

「悪いな、グレンに俺だけ別で呼ばれてたんだ」

「別件？なんでだ？」

隣にいた君月が聞いてくる。それに対して卍解の事と伝えると何故か頬が引き攣った。

「やあ、君たち終 シノア隊の子たちかな？」

先程あった鳴海はそう言いながら優たちのほう（シノアと三宮はいない）へ歩いてくる。その後ろには男性が二人と女性が二人計四人いた。

「んあ？おまえは？」

「優、敬語ってしってるか？」

「君は朝倉じゃないか、君も終シノア隊なのかい」

「ええ、そうですか？」

「おい翔、こいつらが年上かわからないのに敬語とか使ってんなよ」

雰囲気からして年上だと分かるだろう…。鳴海は顔を引くつかせながらも手を出しながら言う。

「私は鳴海 真琴 軍曹。そこにいる朝倉とはさつき挨拶したばかりだね。今回君たちの隊と一緒に吸血鬼の貴族殲滅チームにはいることになりました。よろしくね」

「あーうん、よろしく」

そして握手をする鳴海と優。その時「あ痛っ」と優が声を出す。どうやら俺の時と同様に行為的に強く手を握っているようだ。

「でも、敬語も話せないようなガキに背中を任せていいのかなあと不安なんだよね」

「なんだよそれ、ガキガキいうてめえは何歳なんだよ」

「19、君は？」

「ハタチだよ！」

「ブブツ！まじかよあいつ…！堂々と嘘つきやがった！」

君月が吹き出しているがとりあえず気にしない。

「あのバカ…」

「えっと翔くん？どうしたの？」

与一が俺の小言が聞こえていたのか聞き返してくる。

「鳴海達は俺の事をグレンから聞いてたんだ。なら歳とかも聞いてんだろ。なら今のが一発で嘘だつてバレるし、童顔な二十歳とかいないだろそんなに」

「ハハハ…確かに」

そこで鳴海と優の声が聞こえてくる。まだやってんのかアイツら…。

「…まあ、いい。今回の任務じゃ私たちは仲間になるみたいだ。私の部隊を紹介しておく」

と、次々に名前を言っていく鳴海さん。髪を二つくりりにしているのが井上 利香。メガネをかけているのが円藤 弥生。タオルを頭にまいてるのが鍵山 太郎。あと一人が岩咲 秀作、だそうだ。

「これからよろしくね」

俺の不安をよそに彼等はさっつて行った。それと同時に優の頭を君月が叩く。

「なにすんだよ 君月!!」

「いきなり他の隊ともめんな!!」

「君月に同意だ」

「しょうがないだろ!?あつちが絡んできたんだから！」

「それよりも二十歳ってなんだよ。理由が悔しいとだったらホントにアホらしいぞ?」

「いやその…悔しくて…」

もうダメだと思っていると丁度シノアと三宮が帰ってきた。

「やあやあ、何してたんですか？」

「おまえらが遅すぎるせいでいつのまにか俺ら年とってハタチになつてた」

「バレたとき僕たちどうなるんだろーね」

「もうバレてるけどな」

「なんの話だ？」

「三葉は知らなくていい事だな」

「そんなことよりさ、おまえら何処行つてた？」

「そんなことつて…優が蒔いた種だろーに…。それに何処行つてたつてデリカシーのかけらもない。」

そして、シノアと三宮は少し顔を赤くしているのが分かる。とそんな時、優を呼ぶ声が聞こえた。

「百夜 優一郎 特別二等兵！グレン様がお呼びです」

「グレンが？ふむ…じゃあ、行ってくるわ」

「気いっけろよ優」

おう！と笑顔で向かっていった。

六人で陣形を組む。それぞれの目線の先にはグレンと十条 美十、
終 深夜の三人がおり、その三人は余裕そうな顔で此方を見ている。

「それではみなさん作戦どおりに動いてください！」

そして、臨時体制に入る。これから繰り広げられる戦いに誰もが食い入るようにしてじっとしている中俺はやる気が出ないでいた。単純にめんどいしと疲れるし。大体の事は三十分ほど前。

ー三十分前ー

「ぎゃああああ!!たすけてええええ!!」

優が消えて行つた建物のほうから優の叫び声が聞こえてくる。その声に反応し俺たちはすぐに建物の中に入った。

「優！大丈夫か!？」

「優くん!？」

三葉と与一が名前を呼ぶ。そして建物の中では優が裸で正座をしその太腿には四角い重りがのっけてある。もちろん、こんな罰を受け

るようなことは優はしていない。

「シノアこれ」

「はい、しいちゃん幻術を切ってください」

鎌を振るうシノア。するとそこにあつた空気が歪み優が消える。そして出て来たのはグレンと本物の優そしてグレンの仲間であるみなさん。

「性格悪いなーだからグレンはグレンなんだよ」

「翔は一旦だまれ！」

「えー、それよりさ、コレなんなの？」

「まあ、シノアに分からせる会だよ」

シノアに分からせる会？主語を言つて欲しいものだ。

「私に…なにを分からせると？」

「前の作戦で吸血鬼とおまえらと戦つた。誰かが死ぬという状況があつた。今回はさらにそれが増える。お前の指示一つで命がなくなるんだ」

「そんなこと、分かつて…」

「いや、分かつていない。おまえは今まで大切な人間を作つたことがなかつた。だから失う恐怖を知らない」

「失う恐怖？知つてますよ。私は終ですよ？」

「そういうことじゃねえガキ。まあいい、前は運が良かった。おまえらはチームワークが出来ていない。今回はそれが仇となる」

「それは…」

「よし、試験だ。こっちは俺、十条 美十 終 深夜の三人だけで相手してやる。三対六、シノアがちゃんとチームワークの訓練してれば俺達に勝てるはずだ。十秒後に戦闘開始だ。十、九…」

「ちよ…ほんとにやるんですか!?み…みなさん、一度外に出て距離を取ります！いいですか!?!」

シノアの指示に従いそれぞれが建物の外に出てる。その間にもグレンのカウントダウンは続く。

「試験とダルいなお前」

「うるせえ。ああそうだ、お前は卍解使うな」

「使ったら負けてメンツが保てないから、なるほどね」

「ほぎけガキが。いいから行け」

最後の会話をグレンと交わし俺も建物の外へと走った。

とまあ、試験の始まりが刻々と近づいているのであった。

俺たちも作戦会議が終わり、刀を構えてすでに対戦モードだ。

「やるぞー、ガキども。いいか？」

そしてグレンの声が響いた。

特別編

告白

12月25日。それは世界が滅びる前ならクリスマスだった日。そして世界が滅んだ日でもある。

でも今は違う。世界滅亡からようやく復興が始まった。

吸血鬼とは始祖を倒す時に手を組んでから不可侵の条約を結んだ。

その条約は――

とそんなことは今は置いておこう。今日とはあまり関係ないからな。

今日はクリスマスであり――

シノアの誕生日でもあるのだから。

「という事でクリスマスパーティーとシノアの誕生日会を開きたいと思います」

「なんか急に来たな。まあでもいんじゃないか？昔と変わって世界も平和だし」

「おおいいな！祝おうぜ！なんか、こうパァーつと！」

「優ちゃん、それすぐくアホみたいだよ。でも、当日に言い出すのは翔だから置いとくとして。準備間に合うの？」

「なんかすげー馬鹿にされた気がするが。それはそれとしてミカは吸血鬼から人間へと戻れた。え、方法？」

「そんなの本編読んでりや分かるから、今は気にするな。気にしたら負けだ。」

「それなら大丈夫だ。三葉に頼んであらかた準備は終わってる。な、三葉？」

「ああ。急に来たからビックリしたがな。残ってるのは部屋の飾り付

「けと料理だけだ」

「てことで、三葉は料理が壊滅的なので君月と与一に任せたい」

「おい！翔!? あたしだってやれば出来るんだからな!？」

「ハイハイ。それならオムレツをフランベするなんてことしないよーに」

「あああああ!？」

頭を抱える三葉。まあ優が落ち着けるからほつとこう。

優に丸投げだ。

「材料とかはあるから頼んだ」

「しようがねえな。作りすぎてもいんだろ?」

「あはは…。任せてよ翔君。君月君はちゃんと見てるから」

「任せた与一」

「んで、翔は何するんだ? 何か翔は別のことするみてえだけど?」

「俺はシノアの事連れ出そうと思う。ここには近づかないように。一応サプライズだからな」

「ってことはそのまま行けばいよいよ告白か!？」

優が身を乗り出しながら目を輝かせる。告白か…。ってそんなんじゃない?!

「何だやっとか」

「おめでどう翔君!」

「これでお前の相談という名の愚痴も無くなるな」

「これが愛のなせる技だね」

「こいつら…。と、とりあえず俺もう行くわ! そろそろシノア来るし! 場所は俺の部屋だから任せたわ!」

逃げるように部屋を出ていく。何か背中に暖かい視線を感じるが無視だ無視。

「やつと来ましたね。女の子を待たせるのはダメですよ翔さん?」

集合場所に行けば既にシノアはいた。…。一応十分前だけどな。

「悪い悪い、にしても早くないかシノア?」

「いえいえ。これくらい常識ですよ。それに今日は翔さんがデートに

誘ってくれましたから」

「な!？」

意地悪い笑顔を浮かべながらそんなことを言うシノア。ま、まあ世間一般的に見たらこれはデートなのか…。

「と、とりあえず行こう。プランなんかないけど大丈夫か?」

「翔さんにプランなんか求めてないですから大丈夫ですけど、そういうの言うのはどうかと思いますよ?」

「わ、悪い…」

「冗談ですよーだん。さ、行きましょ翔さん」

「ああ」

楽しそうに微笑むシノアの隣を歩き始める。そこで実感した。楽しみなのは俺もだし、それ以上に俺はシノアの事が好きみたいだ。

ほんっと好きなのやつに対して弱いな、ったく。

「とりあえず歩きながら服でも観るか」

「そうですねえ。私もそろそろ新しい服が欲しかったので。折角なので翔さんを選んでもらいましょか」

「おまつ…マジで言ってるのか?俺そう言うセンス無いぞ?」

「いいですよ。私が翔さんに選んで欲しいんです」

「そういうもんか?」

「そういうものです」

「はあ分かった。けど文句言うなよ?」

「それは翔さんのセンス次第ですねえ」

ほんっと小悪魔みたいだよ。

今もそんな感じの笑顔浮かべてるし。

「おつ、ここいんじゃないか?」

「それじゃ入ってみましょうか」

入ったのは女物専用の衣類店。…何か店員の目が暖かいんだけど。

周りを見渡してシノアに似合う服を探す。いつもシノアが着てる服っていえば……

・軍服

・ワンピースまたはスカート

ってこれだけじゃねえーか。……無難にワンピース選ば。

そしてふと目に入った一つのワンピース。色は真っ白で、シノアの髪の色と合わせると凄くいいと思えた。

なんなら上からカーディガンとか羽織れるし。

「なあシノアあれ——」

隣に目をやれば、ワクワクとこちらを見ているシノアが。

おい、他のも見ろよ。最初は見てたじゃねーか。なんで今はそんな目をキラキラさせてんだ。

「何ですか翔さん？この美少女であるシノアちゃんに似合う服でもありませんでしたか？」

「はあ……とりあえず美少女は否定しないけど、まああったよ」

指をさしてさっきのワンピースを指さす。それを見たシノアは少し驚いたようにしていた。何かあったか？

「いえ、なんでもありません。じゃああれにしましょうか」

「おいおい、そんな即決でいいのか？」

「当たり前じゃないですか。翔さんが選んでくれたんですし。断る理由がないですよ」

それだけ言って店員の所へと行ってしまった。

何だあの子、天使か……。いや小悪魔の皮を被った天使なんだ。

シノアが会計を終えて声をかけるまで安心してたのは出来れば俺だけの心に閉まつておきたい。

そのあとも所謂ウインドショッピングをしながらも時間は経過していった。

ちょうど夕方頃、優から連絡が来た。

『準備終わった！シノア連れてきてもいいぞ！それと告白するならムードが大事だってミカが！』

余計なお世話だ！……とりあえず準備も終わったみたいだし行くか。

「なあシノアこれから——」

呼ばれて振り向いたシノアを見て、言葉を失った。

時刻は夕方。今日は快晴だったおかげで夕日が綺麗に見えていた。

その夕日がシノアを照らして、それはもう——

「綺麗だな……」

「何が綺麗何ですか？はっ！美少女である私が綺麗、そう言いたいんですね？」

「…そうだよ」

「え？翔さん今なんて」

「だから！シノアに見惚れてたんだよ！」

ヤケクソ気味に叫ぶ。ふとシノアを見れば顔を紅くしていた。

「ずるいですよ翔さんはいつも…いつも不意打ちのようにそうやって…」

「シノア…」

「翔さんはいつもそうです。家族の誰かがピンチになったら颯爽と現れて。助けてくれて。いつも安心させるように笑顔を向けるんです。でもあなたはいつもボロボロだった。私が始祖に吸血鬼化された時だってあなたは自分の命を投げ打ってまで助けてくれました。」

いつからだったか分かりません。私がこの気持ちに気づいたのは、自覚したのは最近だったから。

私は——

翔さんの事が好きです」

「シノア」

「貴方の笑う姿が好きです。「シノア」怒るところも好きです。誰かの為になにかをしようとする姿も好きです。家族を大事にするところも「シノア!!」!!」

「…俺はそんなキレイな人間じゃない。それどころか人間でもない。俺は鬼と同化した生成りだ。だから——」

「そんなのは関係ありません。翔さんは翔さんだから」

ニコツと笑うシノア。また助けられるんだな。それに彼女だって勇気を出して言ったんだ。なら、俺だってそれに答えないと――

「俺もシノアの事が好きだ。シノアが思ってる以上に好きだ」

「何言ってるんですか？私の方が翔さんが思ってる以上に大好きです」

「いや、俺の方が好きだ」

「私です」

「俺だ」

「……プツハハハハ」

二人して何してんだろうな。可笑しくてしょうがない。でも一つ言えることは――

「好きだよシノア」

「私も好きです翔さん」

二人して手を繋ぐ。まだ少し恥ずかしいけど、いつか慣れるだろう。そんな時になつてもちゃんと伝えよう。しっかりと真正面から、好きだって。

「この後は翔さんの家にですか？いいですけど……まさか！シノアちゃんついにヴァージンを!？」

「そんなことないから安心しろ。それよりも今日は何の日だ？」

家の前に着いて、そんな質問をする。

「今日は12月25日だから……クリスマスですか？」

「そうそう、それともう一つ」

「もう一つ……ですか？」

「答えは」

それと同時に扉を開く。開くと同時にパパッとクラッカーの音が響く。

どうやら優たち全員がお迎えのようだ。

「二」シノア（さん）誕生日おめでとお!!」「二」

「えっ?これは…」

「シノアの誕生日会だよ」

「翔が前々から三葉と準備してたんだ!そんで今朝色々頼まれた!」

「優ちゃんそれだとかかなり説明省いてるよ。正確に伝えるなら『翔がシノアに愛を伝える会』だよ」

「おお!!確かに!!やっぱミカは頭良いな!」

「そういう事じゃねえ?!いや伝えたからあれだけど!」

「え?伝えたの?」

「あっ」

「詳しく聞こうか翔?」

「いや、それよりもさ、ほら。料理冷めるだろうし。な?」

「二」問答無用!!」「二」

優、君月、三葉が俺へと襲い掛かってくる。それを与一とミカは笑いながら見て、シノアは――

「大好きです翔さん」

不意打ちは卑怯だぜシノア。

でも俺も――

「大好きだ」